

令和4年度
山口大学のFD活動

山口大学 教育・学生支援機構
山口大学 教学委員会

第1部 全学FD活動

第1章 教育・学生支援機構主催等のFD活動	1
第1節 教育・学生支援機構主催等の講演会及び研修会一覧	1
第2節 教育・学生支援機構主催FD研修会	5
第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動	10
第3章 学生授業評価	12

第2部 学部・研究科FD活動

第4章 人文学部のFD活動	20
第1節 授業公開	20
第2節 学部・研究科主催FD研修会	20
第3節 教育改善に関する活動	21
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	22
第5節 FD実施経費報告書	25
第6節 来年度の課題	25
第5章 教育学部のFD活動	26
第1節 授業公開	26
第2節 学部・研究科主催FD研修会	27
第3節 教育改善に関する活動	29
第4節 FD実施経費報告書	30
第5節 来年度の課題	30
第6章 経済学部のFD活動	32
第1節 授業公開	32
第2節 学部・研究科主催FD研修会	32
第3節 教育改善に関する活動	35
第4節 FD実施経費報告書	45
第5節 来年度の課題	45
第7章 理学部のFD活動	46
第1節 授業公開	46
第2節 学部・研究科主催FD研修会	55
第3節 教育改善に関する活動	57

第4節	F D実施経費報告	63
第5節	来年度の課題	63
第8章	医学部のF D活動	64
第1節	授業公開	64
第2節	学部・研究科主催F D研修会	64
第3節	教育改善に関する活動	69
第4節	F D実施経費報告書	73
第5節	来年度の課題	73
第9章	工学部のF D活動	75
第1節	F D研修会	75
第2節	教育改善に関する活動	75
第3節	学生授業評価・優秀授業表彰	76
第4節	F D実施経費報告書	82
第5節	来年度の課題	82
第10章	農学部のF D活動	83
第1節	授業公開	83
第2節	学部・研究科主催F D研修会	84
第3節	教育改善に関する活動	87
第4節	F D実施経費報告書	87
第5節	来年度の課題	87
第11章	共同獣医学部のF D活動	88
第1節	授業公開	88
第2節	学部・研究科主催F D研修会	92
第3節	教育改善に関する活動	94
第4節	F D実施経費報告書	96
第5節	来年度の課題	96
第12章	国際総合科学部のF D活動	97
第1節	授業公開	97
第2節	学部主催F D研修会	97
第3節	教育改善に関する活動	100
第4節	F D実施経費報告書	102

第5節	来年度の課題	102
第13章	人文科学研究科のFD活動	104
第1節	授業公開	104
第2節	学部・研究科主催FD研修会	104
第3節	教育改善に関する活動	104
第4節	FD実施経費報告書	105
第5節	来年度の課題	105
第14章	教育学研究科のFD活動	106
第1節	授業公開	106
第2節	学部・研究科主催FD研修会	106
第3節	教育改善に関する活動	110
第4節	FD実施経費報告書	111
第5節	来年度の課題	111
第15章	経済学研究科のFD活動	112
第1節	授業公開	112
第2節	学部・研究科主催FD研修会	112
第3節	教育改善に関する活動	113
第4節	FD実施経費報告書	113
第5節	来年度の課題	113
第16章	医学系研究科のFD活動	114
第17章	創成科学研究科のFD活動	115
理学系		
第1節	授業公開	115
第2節	学部・研究科主催FD研修会	117
第3節	教育改善に関する活動	117
第4節	FD実施経費報告書	117
第5節	来年度の課題	117
農学系		
第1節	授業公開	118
第2節	学部・研究科主催FD研修会	119
第3節	教育改善に関する活動	119

第4節	F D実施経費報告書	120
第5節	来年度の課題	120
第18章	東アジア研究科のF D活動	121
第1節	授業公開	121
第2節	学部・研究科主催F D研修会	121
第3節	教育改善に関する活動	123
第4節	F D実施経費報告書	124
第5節	来年度の課題	124
第19章	大学院技術経営研究科のF D活動	125
第1節	授業公開	125
第2節	学部・研究科主催F D研修会	127
第3節	教育改善に関する活動	131
第4節	F D実施経費報告書	131
第5節	来年度の課題	131
第20章	共同獣医学研究科のF D活動	133
令和4年度	山口大学 教学委員会 名簿	
令和4年度	山口大学 学部・研究科F Dコーディネータ 名簿	

第 1 部 全学 F D 活動

第1章 教育・学生支援機構主催等のFD活動

山口大学のFD活動は全学レベルと学部・研究科レベルで実施されている。本章では、全学レベルのFD活動として教育・学生支援機構および事務局が主催するFD活動の報告を行う（一部にSD・TAD活動を含む※）。

※FD(Faculty Development、大学教員の職能開発)、SD(Staff Development、大学職員の職能開発)、TAD(Teaching Assistant Development、大学院生が行うTAの職能開発)。

第1節 教育・学生支援機構主催等の講演会及び研修会一覧

以下の表は2022年度の教育・学生支援機構主催FD講演会・研修会の一覧である。全学講演会の参加者は47名であった。また、研修会は計7回開催され、参加者は計768名であった。各学部・研究科と教育・学生支援機構が共同で実施する「教育改善研修会」への参加者は合計562名であり、教育・学生支援機構より各学部・研究科へ講師を派遣して開催する「講師派遣型アラカルト研修会」への参加者は合計203名であった。延べ1,580名が本年度はFD活動を行った計算となる。多くの教職員は自主的に、また職務上の必要性から参加し、積極的にFD活動を実施した。

I 講演会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	学修成果の可視化について考える	2022年11月14日(月)	15:00～17:00	吉田地区	共通教育棟メディア講義室及びオンライン配信	鳧田敏行(茨城大学全学教育機構教授)、浅野茂(山形大学学術研究院教授)	本学教育職員ほか及び他大学関係者	山形大学、茨城大学の事例を紹介しながら、3つのポリシー(DP・CP・AP)、学修者本位の大学教育のあり方、学修成果の可視化について考える。	教職員47名
									参加者 47名

II 研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	新任教員研修会	2022年4月4日(月)	13:05～16:45	吉田地区	共通教育棟メディア講義室及びオンライン配信	第1部:学長、学術研究担当副学長、人事労務・財務施設担当副学長、人事給与マネジメント改革担当副学長、学術基盤担当副学長ほか 第2部:教育学生担当副学長、学生支援センター教員、教学マネジメント室教員	(1)前回の研修会以降 に本学の教育職員(附属学校を除く。)となった者。 (2)上記の日以前に本学の教育職員となった者 で本研修未受講者 のうち受講を希望する者。	新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深める。	教員43名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
2	共通教育TA・SA研修会	2022年4月6日(水)	13:00～14:00	オンライン		教育支援センター長、岡田大学生支援センター准教授、岩野教学マネジメント室講師、森本保健管理センター准教授	TA・SAIに採用予定の大学院生・学部生で今回初めて採用された者及びTA・SAを採用する教員	TA・SAとして初めて採用される者および担当教員を対象として、TA・SAとしての心構えや注意事項に関する研修	教職員44名 学生478名
3	各学部・研究科FDコーディネータ研修会	2022年5月11日(水)	16:30～17:15	オンライン		野崎教学マネジメント室長、岩野教学マネジメント室講師	各学部・研究科FDコーディネータ	本年度の教育・学生支援機構主催のFD計画について説明するとともに、各学部でFD計画を立てる際に留意すべき点やFD予算要求の際の注意点などについて研修及び協議を行う。	教職員15名
4	ラーニングアドバイザー養成講座2022	①2022年11月14日(月) ②2022年11月25日(金)	①10:30～12:00 ②10:00～12:00	吉田地区	①共通教育棟1Fオープンルーム 及びオンライン配信 ②共通教育棟21番教室 及び オンライン配信	①畠田敏行(茨城大学全学教育機構教授) ②相生芳晴(上智大学IR推進室長)	希望者	普段の会議資料の作成の改善、役立つExcelの使い方について演習を交えながら、今後の職員の役割について考える。	①教職員65名 ②教職員65名
5	大学マネジメントセミナー「大学の業務改善を教職協働で行う」	2022年11月24日(木)	15:00～17:00	吉田地区	共通教育棟1Fオープンルーム 及び オンライン配信	畠田敏行(茨城大学全学教育機構教授)、菊池昌彦(茨城大学学務部教育支援課 課長補佐)	希望者	茨城大学の教職協働による教育・業務改善を事例に、これからの職員に期待される役割について考える。	教職員46名
6	山口大学 共育ワークショップ2022「教育者としてのあり方を見出す-ティーチング・ポートフォリオ入門編」	2022年12月16日(金)	14:30～17:00	吉田地区	共通教育棟1Fオープンルーム	栗田佳代子(東京大学大学院教育学研究科 教授)	希望者	入門編としてポートフォリオの概要や特徴を学んだ後に、学生にどのように育ってほしいのかという自分の思いや日頃の教育活動を振り返ることで、今後につながる気づきを見出ししていく。	教職員12名
									参加者 計768名

Ⅲ 教育改善研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
	教学マネジメント室と学部・研究科との教育改善FD研修会	①2023年2月15日(水) ②2023年3月8日(水)	12:00～12:45	オンライン		岩野教学マネジメント室講師	各学部・研究科の全教員	①山口大学の教学IR - 2022年度卒業生調査の結果報告 (教学マネジメント指針について説明したのち、2022年6月に実施した卒業生調査の結果報告を行う) ②山口大学におけるDP策定方針 - 2022年度認証評価を受けて (認証評価の事前相談等の状況を踏まえ、本学では今後DPの見直しを予定している。現段階における対応、今後のスケジュール等について説明を行う)	教員562名 (①②合計)
									参加者 計562名

Ⅳ 講師派遣型アラカルト研修会						
	講座名	開催日時	開催部局	講師	内容	参加人数
1	障害等のある学生への合理的配慮:最近の支援ニーズの傾向から	2022年9月21日(水) 15:00～15:30	教育学部	岡田 菜穂子 (学生特別支援室支援コーディネーター:准教授) 松尾理佳 (学生特別支援室カウンセラー)	学生特別支援室は、障害等のある学生の修学支援のための学内拠点である。障害等のある学生や支援に関わる教職員からの相談・問い合わせに対応するとともに、学内の関連部局と連携して支援を実施している。研修会では、最近の修学支援ニーズの動向について情報提供しつつ、授業中の配慮実践例や手軽で汎用性の高い配慮方法を紹介する。	59名
2	学生相談の現状と現在の大学生・大学院生の抱えやすい課題やその支援	2022年9月28日(水) 14:00～	共同獣医学部	春日由美 (学生相談所長・教育学部准教授)	山口大学と鹿児島大学の共同獣医学部で毎年開催している2大学合同FD研修会が、今年度はWebexを用いてオンライン開催された。その中の基調講演として、春日先生に学生相談の概要、学生が抱えやすい課題、学生相談所の利用状況などについて解説していただいた。近年の大学生の状況や、共同獣医学部の学生の傾向など、データを交えた議論があり、学生の抱える問題を早い段階で察知することや、学生が相談しやすい環境を整備することの重要性を両大学の教員が認識した。また、大学の学生相談所に相談するという選択肢が有効であることを共通認識として得た。	75名

	講座名	開催日時	開催部局	講師	内容	参加人数
3	授業の過程における著作物利用ルール変更への対応	2022年11月16日(水) 14:30～15:00	人文学部	小川明子(国際総合科学部 教授・大学研究推進機構 知的財産センター長)	本研修会では2019年からの著作権法35条改正の要点について学習した。とりわけオンデマンド授業等における資料の配信に関して、できるようになったこと／できないことを情報共有し、権利団体に対する大学からの補償金が発生する事例などを確認した。特に、オープンキャンパス等授業外でのグレーゾーンについて詳しい説明を受けた。また法律の枠内で適切に著作物を利用するために「引用」を効果的に利用するようことの提案を受けた。なお、本年度はオンラインでの研修会であった。	42名
						
6	障害等のある学生への合理的配慮:最近の支援ニーズの傾向から	2022年11月16日(水) 13:30～14:00	農学部	岡田 菜穂子(学生特別支援室支援コーディネーター:准教授) 松尾理佳(学生特別支援室カウンセラー)	学生特別支援室は、障害等のある学生の修学支援のための学内拠点である。障害等のある学生や支援に関わる教職員からの相談・問い合わせに対応するとともに、学内の関連部局と連携して支援を実施している。研修会では、最近の修学支援ニーズの動向について情報提供しつつ、授業中の配慮実践例や手軽で汎用性の高い配慮方法を紹介する。	27名
						
						参加者 計203名

第2節 教育・学生支援機構主催FD研修会

1. 全学対象の講演会・研修会・ワークショップ

(1) 全学FD・SD講演会

1. テーマ：学修成果の可視化について考える
2. 開催日時：2022年11月14日（月）
3. 開催場所：メディア講義室 及び オンライン配信
4. 対象：国公立大学の教職員（若手からベテランまで常勤・非常勤問わず）
大学院生（博士後期課程等）
5. 参加者：47名 ※学外21名含む
6. プログラム：

15:00-15:50	「ディプロマ・ポリシー：達成度に注目した学修成果の把握について－茨城大学における入り口から出口までの追跡調査－」 寫田 敏行 氏（茨城大学 全学教育機構 総合教育企画部門 教授）
15:50-16:40	「学修成果の可視化に向けたPDCAサイクルの確立－3ポリシーの体系化に向けた取り組み－」 浅野 茂 氏（山形大学 学術研究院 教授（企画評価・IR担当））
16:40-17:00	質疑応答・ディスカッション

7. 概要：
寫田先生のご講演概要
：教育改善のフォーカス、茨城大学の事例を取り上げながらDPとDPを図るためのアセスメント、分析（教学IR）などについて。
浅野先生のご講演概要
：山形大学の事例を取り上げながら、DPとDPの策定、目標を如何に見える化するか、ディプロマサプリメントなどについて。
8. アンケート結果：
参加者（アンケート回答者）のうち、研修に参加してよかったか（4件法：「とてもよかった」「よかった」「あまりよくなかった」「よくなかった」）については、全ての参加者が「とてもよかった」「よかった」と回答し、高い満足度を得られた。
自由記述では、本学ができていない部分が理解できた、DPとその成果の測定や可視化についてヒントを得られたというコメントが寄せられた。一方で、内容が難しく理解しにくかった、学部で今何をしないといけないのか（課題）が掴めなかったというコメントも一部あった。本学では、全学DPの見直しなども予定しており、改めて本学のできている部分、対応が必要な部分をアナウンスしていきたい。
今後取り上げてほしいテーマとしては、「アセスメントプランの具体例」「アセスメントで測定したデータ分析や活用に関する内容」「教学IRの活用」「高等教育政策の解説」「授業の設計方法」などがあげられた。

(2) ラーニング・アドバイザー養成講座

1. テーマ：新たな職員の役割について考える -伝わる資料、伝える資料-
2. 開催日時：2022年11月14日（月）・11月25日（金）の2日間
3. 開催場所：オープンルーム・21番教室 及び オンライン配信
4. 対象：国公立大学の教職員（若手からベテランまで常勤・非常勤問わず）
5. 参加者：11月14日（月）：65名 ※学外20名含む
11月25日（金）：65名 ※学外20名含む

6. プログラム：

- ・11月14日（月）

10：30-12：00	「会議資料の改善 -ちょっとした工夫で伝わる資料に」 畹田 敏行 氏（茨城大学 全学教育機構 総合教育企画部門 教授）
-------------	----------------------------------------------------------------

- ・11月25日（金）

10：00-12：00	「役だつ！大学職員のための、Excel 活用とアンケート集計・可視化」 相生 芳晴 氏（上智大学 IR 推進室 室長）
-------------	----------------------------------------------------------------

7. 概要：

- ・11月14日（月）

：大学職員として、どのような資料を提示すると良いのかなどについて。例えば、資料の工夫点やデータの活用、実際に資料をどのように展開するのか、ネゴシエーションの方法についてワークを交えながら実施。

- ・11月25日（金）

：Excel でどのようにデータを活用できるのか、業務を短縮されるための工夫などについて。実際にデモデータを使用しながら、ハンズオンでアンケートのデータの集計や可視化を実施。

8. アンケート結果：

参加者（アンケート回答者）のうち、研修に参加してよかったか（4件法：「とてもよかった」「よかった」「あまりよくなかった」「よくなかった」）については、全ての参加者が「とてもよかった」「よかった」と回答し、高い満足度を得られた。

自由記述では、実際にありそうな会議資料のブラッシュアップ事例が見られてよかった、実務的に役立つ内容の話があり業務に関するヒントを得られたなどというコメントが寄せられた。一方、Excel の使い方についてスキルが足りず追いつけなかったのが動画を見直したい、アンケートだけではなく他の活用について知りたかったというコメントも見られた。各教職員が得られたヒントを業務等に活用できることを期待する。

今後取り上げてほしいテーマとしては、「教職課程」「業務の効率化」「高等教育政策の解説」などがあげられた。

(3) 共育ワークショップ ※大学リーグ主催

1. テーマ：教育者としてのあり方を見出す -ティーチング・ポートフォリオ入門編
2. 開催日時：2022年12月16日（金）
3. 開催場所：オープンルーム
4. 対象：国公立大学の教職員（若手からベテランまで常勤・非常勤問わず）

5. 参加者：12名

山口県立大学 5名、山口大学 3名、周南公立大学 1名、水産大学校 1名、山口芸術短期大学 1名、宇部工業高等専門学校 1名

6. プログラム：

14：30-17：00	「学生の主体的な学びを支える Moodle の活用」 栗田 佳代子 氏 (東京大学 大学院教育学研究科 教授、大学総合教育研究センター 副センター長、大学院新領域創成科学研究科 特任教授)
17：00-17：30	質疑応答

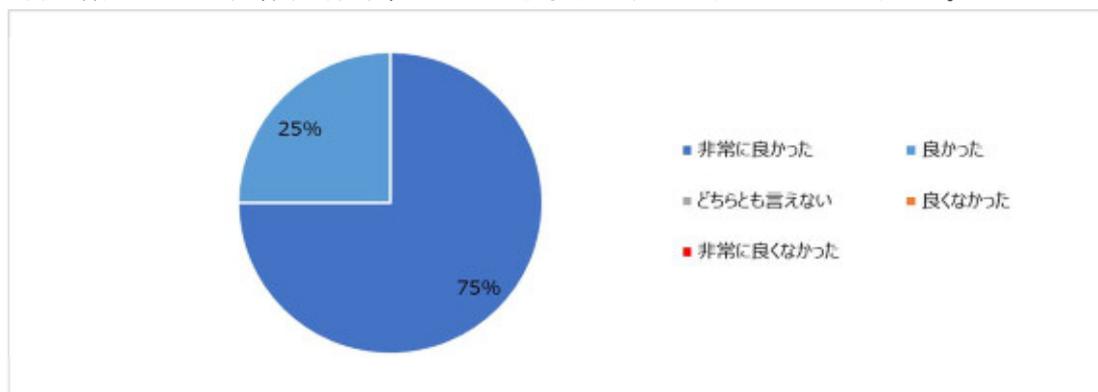
7. 概要：

：ティーチング・ポートフォリオの作成を通して、自ら教育者としての軸や方向、価値を見出し、今後のキャリアアップについて考えてみる。入門編としてポートフォリオの概要や特徴をワーク形式で学びながら、学生にどのように育ててほしいのかという自分の思いや日頃の教育活動を振り返ることで、今後につながる気づきを見出す。

※終了後の質疑応答の時間にも数名の先生が残られ、自身のワークの確認、記載内容や方法の質問を行っていた。

8. アンケート結果：

TP を学べたこと、自分自身の振り返りや授業方法のヒントを得た等の記述以外にも、違う分野の方と話せたことや対面で深く学べたことを取り上げているコメントがあった。



今後取り上げてほしいテーマとしては、アクティブラーニング、IR・教学マネジメント、大学教育、教育方法、教育理念や理論、効率的なレポートの与え方などがあげられた。

(4) 大学マネジメントセミナー ※大学リーグ主催

1. テーマ：大学の業務改善を教職協働で行う

2. 開催日時：2022年11月24日(木)

3. 開催場所：オープンルーム 及び オンライン配信

4. 対象：国公立大学の教職員(若手からベテランまで常勤・非常勤問わず)

5. 参加者：46名(教員7名、職員40名)

山口大学 30名、周南公立大学 4名、山口県立大学 2名、山口芸術短期大学 3名、山口学芸大学 1名、下関市立大学 4名、東亜大学 2名

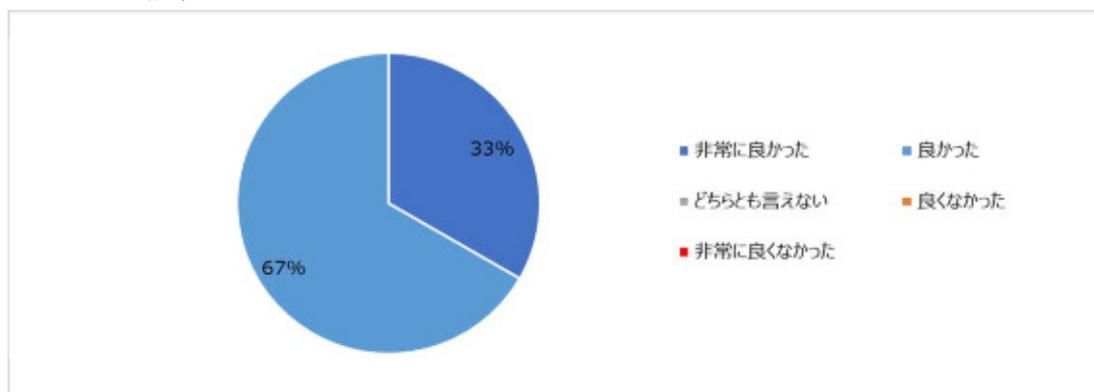
6. プログラム：

15:00-16:30	「教職協働で教育の内部質保証を考える —茨城大学の取り組みから— 畷田 敏行 氏 (茨城大学 全学教育機構 総合教育企画部門 教授) 菊池 昌彦 氏 (茨城大学 学務部教育支援課 課長補佐)
16:30-17:00	質疑応答・ディスカッション

7. 概要:

: 2022年10月1日の大学設置基準等の改正では、「教員組織」から「教育研究実施組織」へと、教員と事務職員等の関係を一体的に規定することとされた。教育研究活動から厚生補導まで含めた教職協働の実質化が促進され、より一層の教育研究活動の質向上を期待するとされ、職員の役割もますます重要になってきているところである。そこで、茨城大学の教職協働による教育・業務改善を事例に、これからの職員に期待される役割について考える機会とした。

8. アンケート結果:



今後取り上げてほしいテーマとしては、教育プログラムに関する内容、学修成果の可視化、内部質保証、教員に対して職員と協力して大学をつくるという意識を醸成する研修会などがあげられた。

2. 教育改善 FD 研修会 (教学マネジメント室と各学部・研究科主催 FD 研修会)

(1) 第1回

1. テーマ: 山口大学の教学 IR —2022年度卒業生調査の結果報告
2. 開催日時: 2023年2月15日(水)
3. 開催場所: オンライン配信
4. 対象: 教職員
5. 参加者: 562名 (第2回との合計参加者数)
6. 概要: 教学マネジメント指針と教学 IR、山口大学におけるアセスメントプランについて解説。2022年6月に実施した卒業生調査の結果について報告について。

(2) 第2回

1. テーマ: 山口大学における DP 策定方針 —2022年度認証評価を受けて

2. 開催日時：2023年3月8日（水）
3. 開催場所：オンライン配信
4. 対 象：教職員
5. 参 加 者：562名（第1回との合計参加者数）
6. 概 要：3つのポリシー、山口大学のスケジュール（認証評価事前相談等を経て）について解説し、具体的なスケジュールと実施内容（第1フェーズ、第2フェーズ）について説明。

第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動

1. FD活動を実施した授業科目別部会

(1) 運動健康科学部会

○部会としてのFDは開催しなかったが、年度末に部会員間での情報交換をオンライン会議で行った。
○この部会では、例年行っている今年度の振り返りと次年度への申し送りに加え、特に成績評価分布の状況について、今年度提出した報告書をもとに具体的な意見交換を行い、成績評価分布の状況を踏まえながら授業に取り組むという点に関して情報の共有を行った。

(2) 英語部会

特になし。

(3) 数学部会

4月に、教育支援センター、教育支援課教務係と連携し、プレースメントテストを実施し、受講生のクラス分けを行った。成績分布はほぼ例年と変わらず、約60点より上位をほぼ学科別に6クラス、下位成績順に3クラスとし、習熟度別のクラス編成とした。

(4) 物理学部会

物理科目の成績評価分布を調査したところ一部の授業に成績評価の偏りが見られたため、当該授業の担当教員と部会が協議して以後は成績評価の偏りを是正することを確認した。

(5) 化学部会

化学実験のテキストの内容をよく理解できず、所定の時間内に実験を終了することができない学生や、実験テキストに記載されているレポート課題を解くことができない学生が以前に比べて増えている。これに伴い、化学の学習相談室を担当する非常勤講師の負担も増えている。このような状況を鑑み、化学実験担当の非常勤講師、実験担当マネージャーならびに化学部会の教員との間でオンライン会議を開催し、実験内容の変更とテキストの改訂について意見交換した。現状を考慮し、テキストを改訂する方針で一致した。また、化学物質の取り扱いに関する法律の適用が2023年度から厳密化されることに伴い、実験で着用する手袋を教育支援センターで準備していただけることになった。

(6) 生物部会

各部局でのFDに参加してもらうこととし、2022年度のFDは特に実施しなかった

(7) 地球科学部会

特になし

(8) 日本国憲法部会

部会内で授業担当者ごとの成績評価の偏りを是正するため、成績分布の確認を実施した。

第3章 学生授業評価

1. 実施方法

学生授業評価は、山口大学修学支援システム（eYUSDL）により実施している。2022年度の学生授業評価の結果は、「授業内容の理解」（質問3）、「到達目標の達成」（質問4）、「授業の満足度」（質問5）において、2020年度および2021年度よりも肯定的な回答（「そう思う」+「ややそう思う」）が増えている。一方、1時間以上の授業時間外学習は、2020年度から年々減少傾向にある（「授業時間外学習」（質問2））。

各科目の集計結果は、担当教員にフィードバックされ、教員個人の授業改善に活かされるとともに、各学部においても共有され、FD活動やカリキュラム改善等にも活用されている。

なお、一部の学科や科目では、独自のシステムを利用した学生授業評価を行っている。それらの学科や科目の結果は反映されていない。

2. 質問紙

質問1 あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値）

- ①90%以上（14回以上） ②80%以上～90%未満（12～13回）
- ③60%以上～80%未満（9～11回） ④40%以上～60%未満（6～8回）
- ⑤40%未満（6回未満）

質問2 あなたは、この授業において、授業時間外学習（授業の予習・復習、レポート作成、試験勉強などを含む）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

- ①3～4時間程度又はそれ以上 ②2時間程度 ③1時間程度 ④30～50分程度
- ⑤30分未満

質問3 あなたは、この授業の内容を理解できましたか？

- ①そう思う ②ややそう思う ③どちらとも言えない
- ④あまりそう思わない ⑤そう思わない

質問4 あなたは、シラバスに記載された到達目標を達成したと思いますか？

- ①そう思う ②ややそう思う ③どちらとも言えない
- ④あまりそう思わない ⑤そう思わない

質問5 あなたは、この授業について満足しましたか？

- ①そう思う ②ややそう思う ③どちらとも言えない

- ④あまりそう思わない ⑤そう思わない

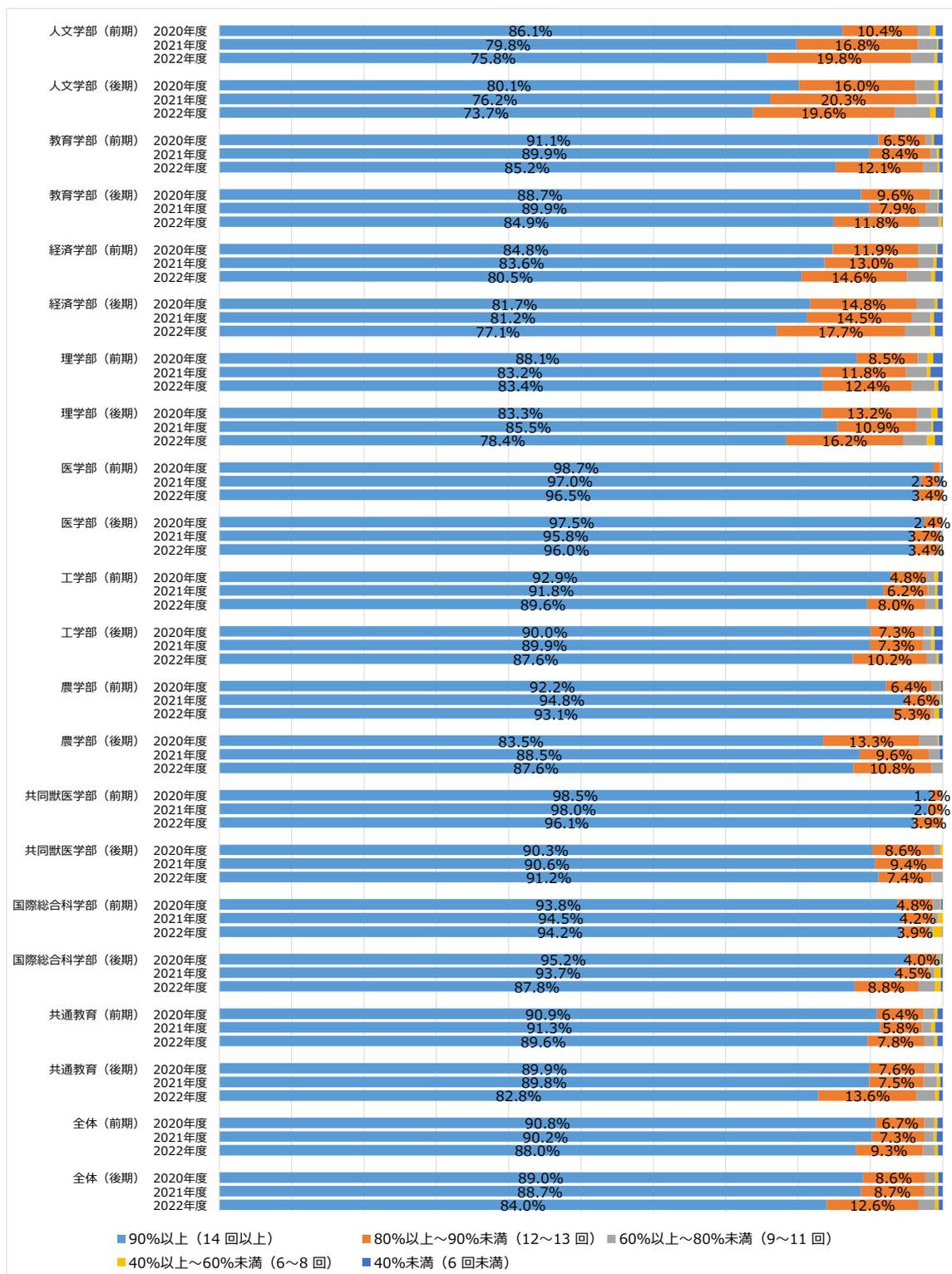
質問 6 【遠隔講義が含まれる場合は、お答えください】

授業方法としての遠隔講義システム（修学支援システム、Moodle、Zoom など）について感想をお答えください。

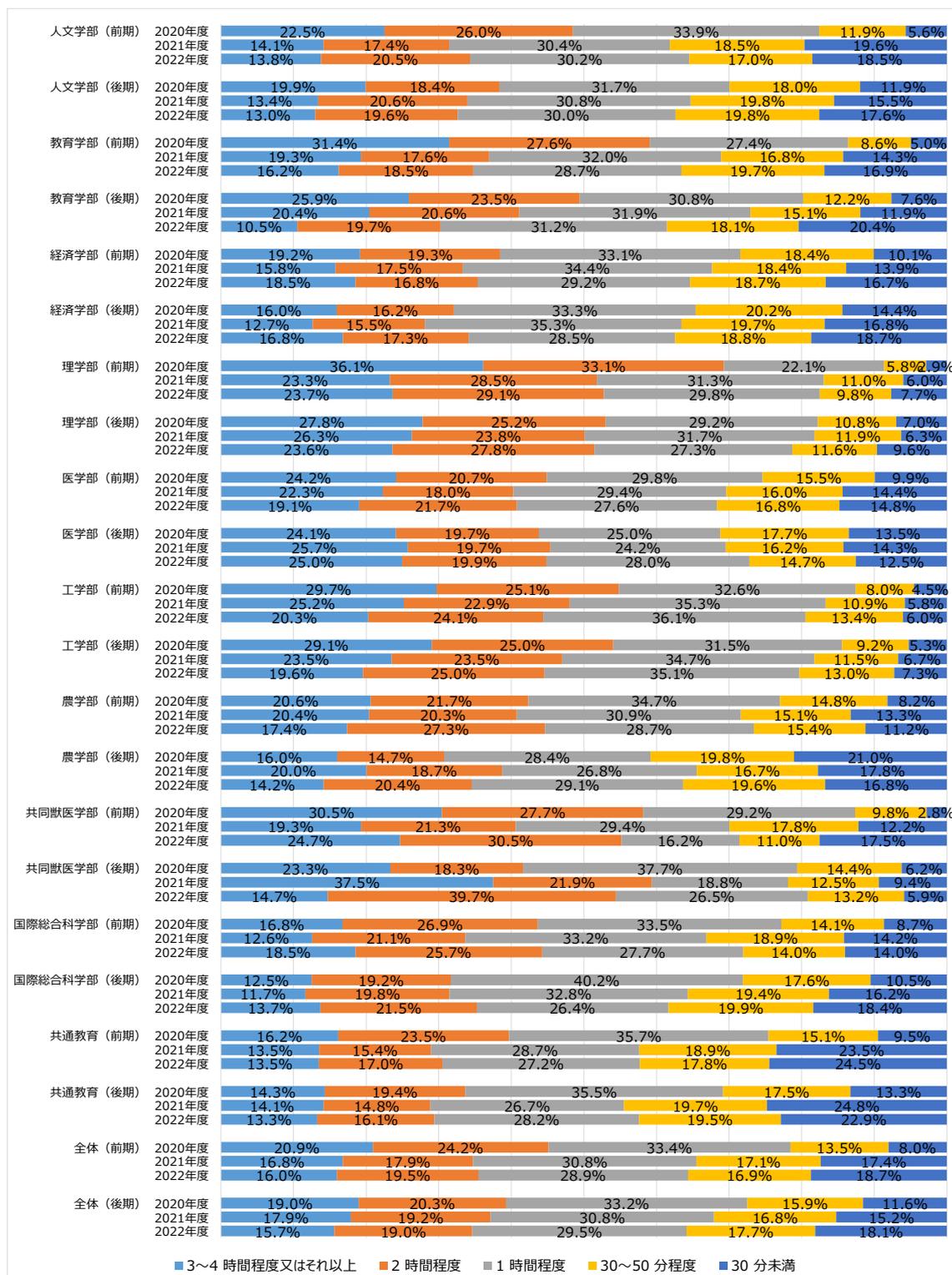
- ①とても分かりやすかった ②分かりやすかった ③どちらとも言えない
④分かりにくかった ⑤とても分かりにくかった

3. 結果

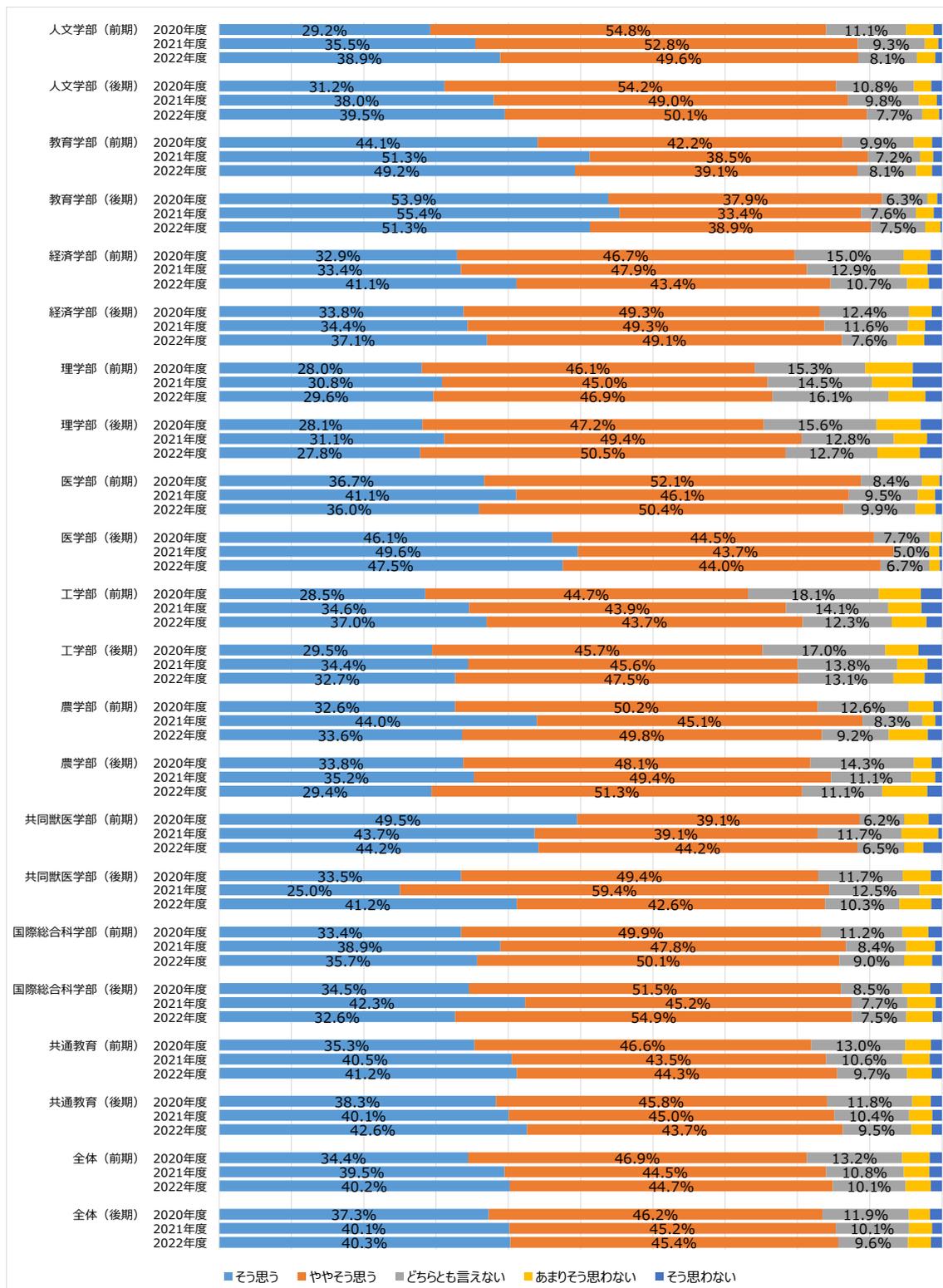
質問1 あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値）



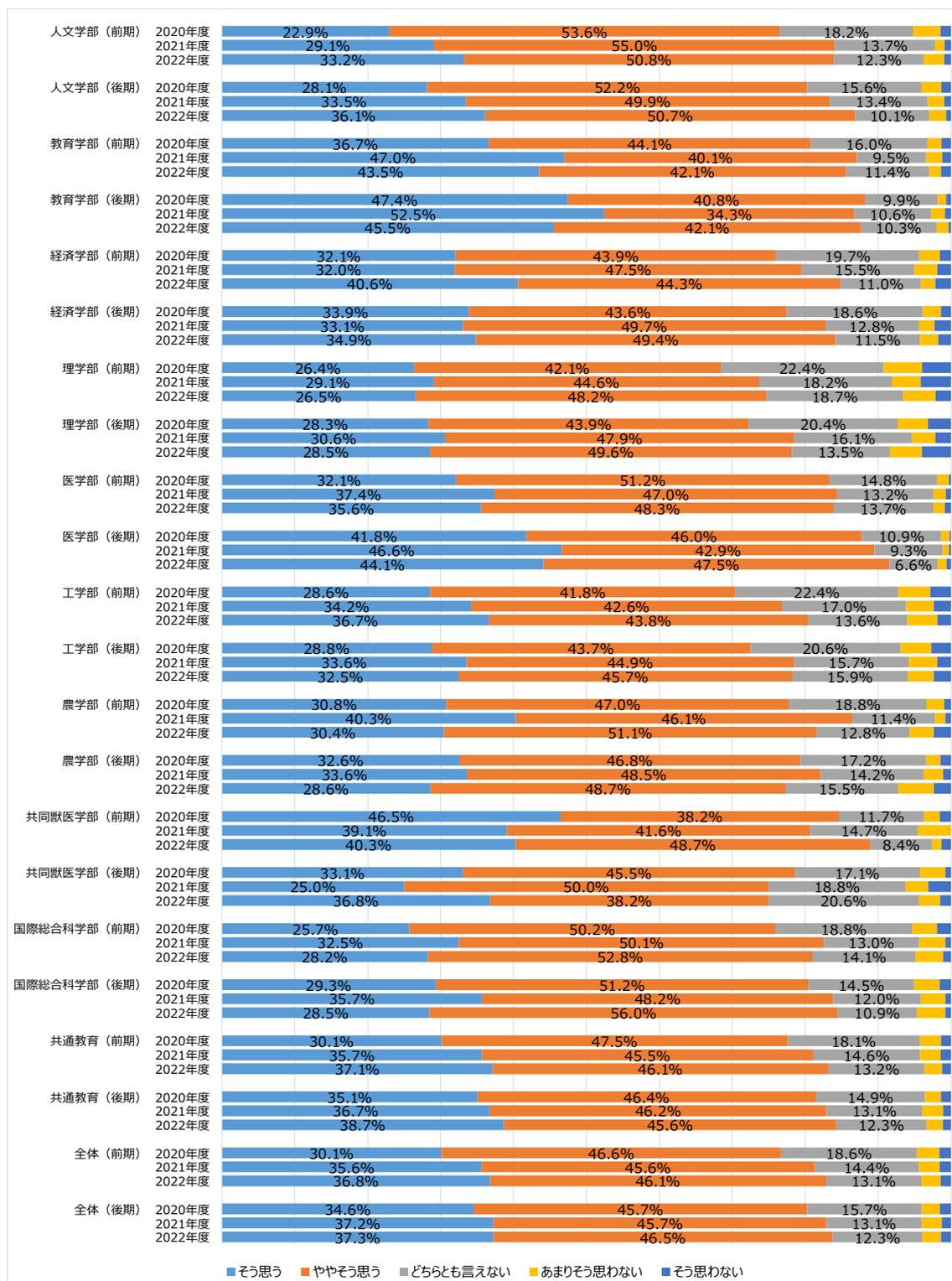
質問2 あなたは、この授業において、授業時間外学習（授業の予習・復習、レポート作成、試験勉強などを含む）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。



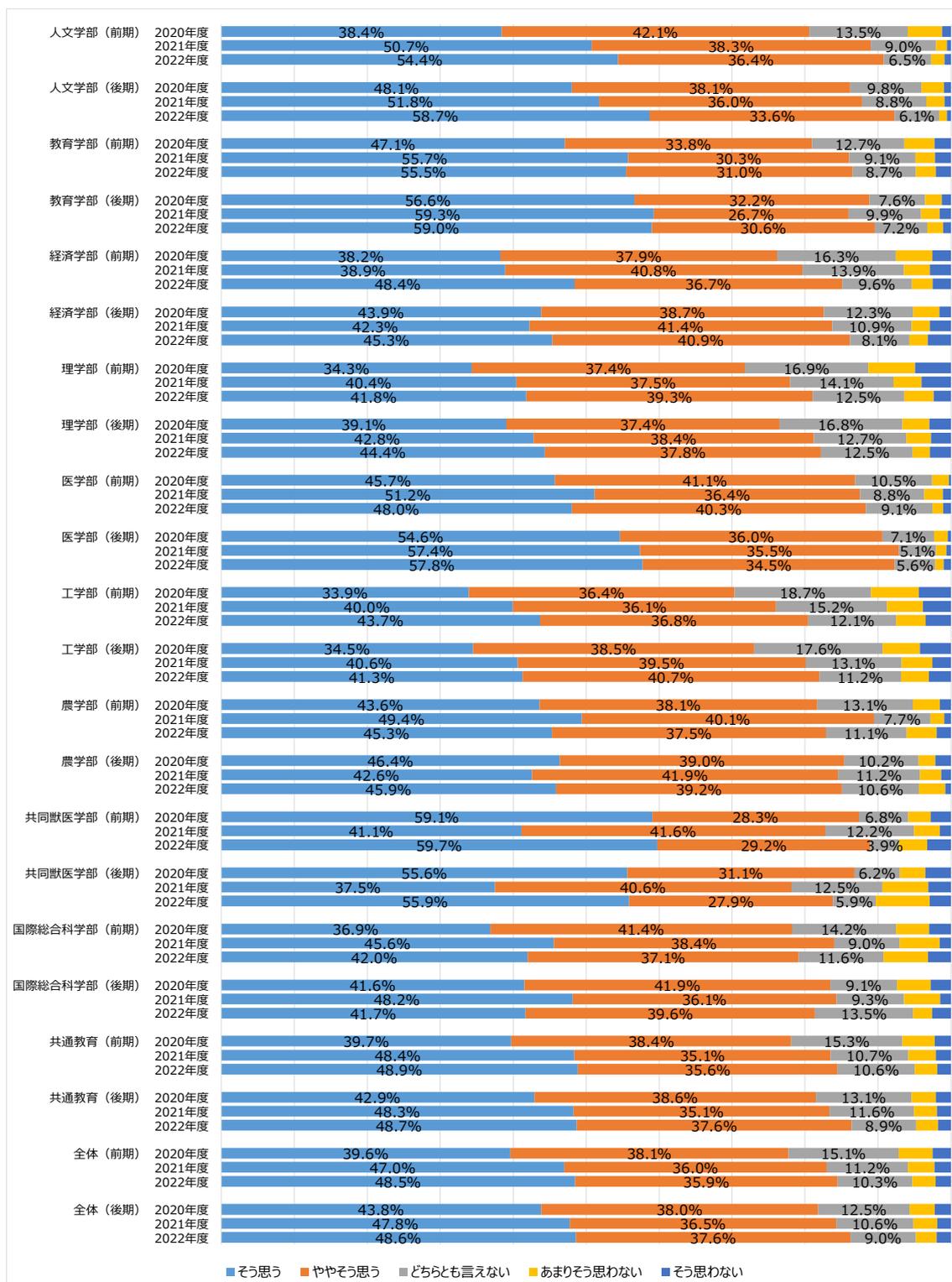
質問3 あなたは、この授業の内容を理解できましたか？



質問4 あなたは、シラバスに記載された到達目標を達成したと思いますか？

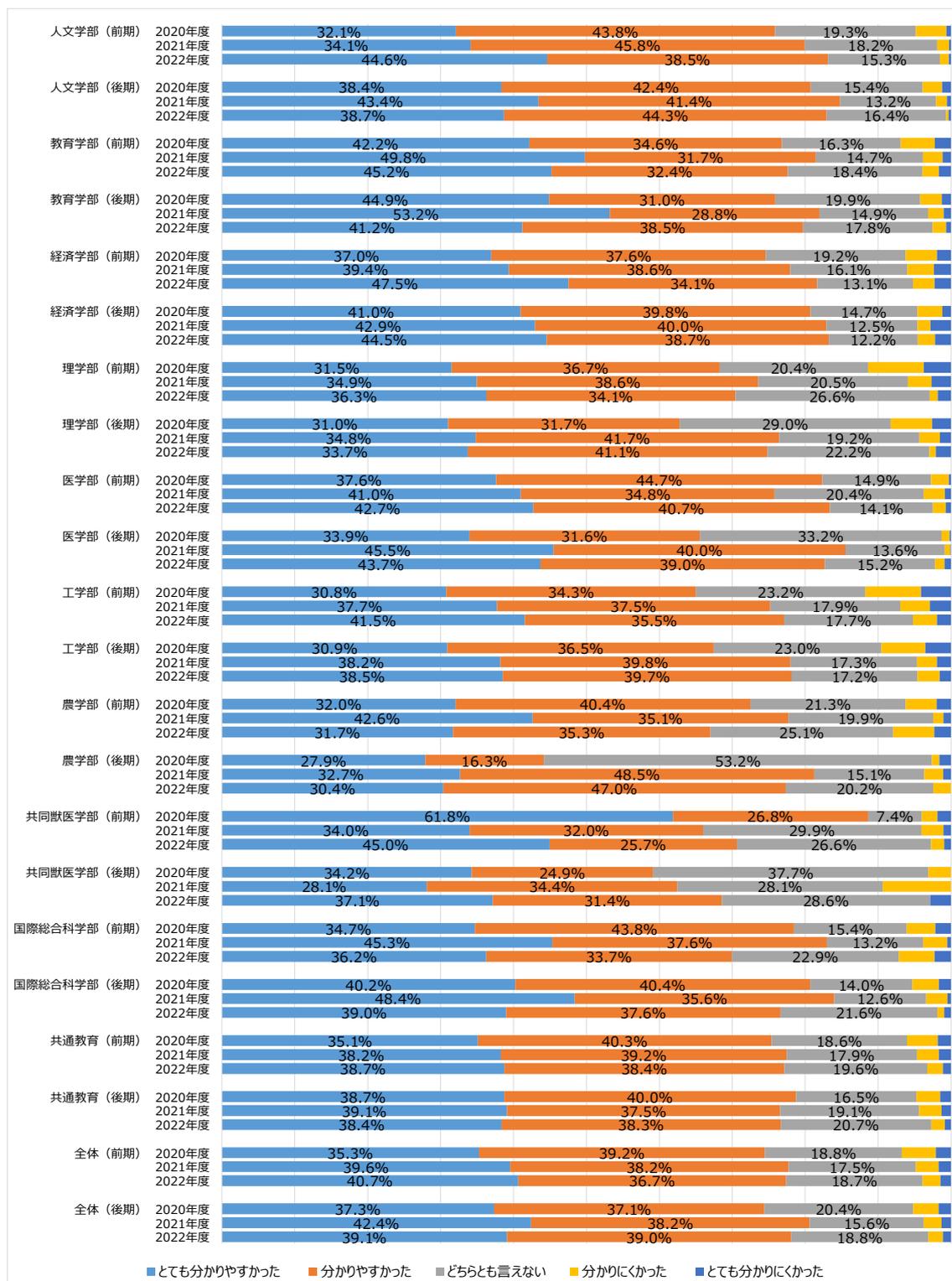


質問5 あなたは、この授業について満足しましたか？



質問6 【遠隔講義が含まれる場合は、お答えください】

授業方法としての遠隔講義システム（修学支援システム、Moodle、Zoom など）について感想をお答えください。



第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動

第1節 授業公開

(1) ピアレビュー実施形態の変遷

人文学部の教員の中からレビュアー教員5名を選出して実施している(平成30年度より)レビュアー教員は参観する授業を任意に選択し、授業担当教員に依頼して参観する。参観修了後FD部会の用意した「ピアレビュー参加シート」に必要事項を記入しFD部会に提出する。提出された「ピアレビュー参加シート」は授業担当教員とも共有し、授業改善の参考資料としている。

(2) ピアレビュー実施状況

本年度はおおむね対面授業に対する参観であった。参加した教員からは分野を超えた授業を参観する機会が得られたことで教授上の工夫や学生への配慮等の面で得るものが多かったとの感想が寄せられた。とりわけ授業担当教員の講義内容や授業姿勢などに感銘を受けたなど教員としての知的・人格的な理想像についての印象にかかわる感想と、コメントシートの利用法や出席の取り方、電子媒体の利用法など、教育技法的に関わる知見を得たという感想の両面があった。

レビュアー教員のうち1名はオンライン授業に対する参観であった。Webexを利用したリアルタイム型の授業では学生が「顔出し」をしていない中での講義となり、教員が匿名的な学生に対して講義をすることに難しさを感じたという感想であった。他面で、チャットや修学支援システムなどを利用したコメントが活発であり、匿名性ゆえの利点もあるのではないかと指摘された。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

令和4年度 人文学部主催FD研修会

開催日時： 令和4年10月19日(水) 14:30-15:15

開催場所： Webex

講師： 脇條靖弘(人文学部長)

参加者： 46名

【研修内容】

本年度は「STEAM教育について」という題目で講習会を開催した。内容は大きく二つに分けられる。前半ではSTEAM教育の一般的理念について簡単な整理を行った上で、とりわけ本学におけるSTEAM教育の構想について、大学ウェブサイトにて即して解説された。後半では、大学全体のSTEAM教育の構想に対して人文学部が積極的に寄与し得る点はどこにあるかという問いかけに対して、講師の見解が語られた。「価値、冒険、共感、説得 人文学を学ぶことで……現代社会に貢献し、健全な民主主義を支えることのできる個人を育てる」という大きなコンセプトが示された上で、個々の項目についての解説がなされた。

人文学部の教育は「行き先のはっきりしない状況」に心折れることなく、自分の信じる価値、軸を形成する力、および、自分自身の「物語」を構築する力をはぐくむことにつながるのではないかと主張が印象的であった。

質疑応答において、人文学部の従来の研究・教育活動をしっかりと進めてゆくことが、結局は全学

の STEAM 教育への貢献になる、という理解が示された。研修会終了後に実施したアンケートでは「勇気づけられた」という声が複数あり、研修会には意義があったものとする。

第3節 教育改善に関する活動

(1) 「基礎セミナー」の運営にかかわる意見交換と情報共有の活動

a. 前期共通科目「基礎セミナー」の運営

人文学部FD部会では例年、「基礎セミナー」の統括運営を担当し、初年次教育に関わる授業担当教員を支援している。

人文学部の「基礎セミナー」では平成28年度から、第1クォーターで学生の人間関係構築やアカデミック・スキルの習得に重点を置いたクラス別指導を行い、第2クォーターで学生の進路（分野選択、留学、就職）に関係する方向づけのための合同ガイダンスを行ってきた。学生は前者において学んだアカデミックスキルを、後者において得られた分野選択の方向づけと組み合わせて、コースごと設定された最終レポート課題に取り組んでいる。

また、授業最終回に人文学部長と学生との対話の授業を設定することで、学部や大学の教育理念を初年次学生に伝えるための工夫を行っている。

残念ながら、本年度もコロナ対策のため第2クォーターの授業をオンライン授業にせざるを得なかった。次のようなシラバスのもとで授業運営を行った。

人文学部基礎セミナー授業概要・一般目標・到達目標および合同授業の内容

【授業概要】

人文学部に入学した皆さんが、はやく大学生活に馴染み、大学を勉学の場として活用してゆけるように導きます。あわせて、今後四年間の勉学について各自の方向性や目的意識がより明確になるよう促します。

【一般目標】

- (1) 自らの大学生活の目的について、明確な意識を持つことができる。
- (2) 大学の環境に適応し、大学を自らの勉学の場として活用できる。
- (3) 自らの勉学に必要な情報・文献を収集できる。
- (4) 日本語論述にかかわる基礎的知識を習得し、大学の授業で課されるレポートを作成できる。

【到達目標】

知識・理解の観点：自らの人生の展望を持ち、そのなかでの大学生活の位置づけを理解している。

思考・判断の観点：自ら問いを発見し、よく考える習慣を体得している。

関心・意欲の観点：人文学全般に広く関心を持つとともに、特に自身の素質に適い、自らが深く関心を持てる分野に気づいている。

態度の観点：大学生活を送る上で基本的な習慣やマナーを身につけ、主体性を確立している。

技能・表現の観点：大学の授業で課されるレポートの作成において、適切に情報を収集したり、文章を構成・表現したりする方法・技術を習得している。

【合同授業の内容】

- (1) ポートフォリオの目的とキャリア教育 第8回に実施予定
「人文学部生のためのキャリア教育」（学生委員・就職支援部・学生支援センターと連携）
- (2) 留学案内 第9回に実施予定 「人文学部生のための留学案内」（国際交流部会と連携）
- (3) 各コースの紹介と履修モデルの解説 第10～14回に実施予定

- 「学際的視野を持つために（各コースの紹介と履修モデル）」（各コースに委託）
 (4) 総括 第15回
 「人文学部長との対話」（人文学部長・FD部会）

b. 「基礎セミナー」の運営にかかわる意見交換と情報共有の活動

第6回基礎セミナー部会

日時：令和4年2月21日（月）10:20-11:50

場所：人文学部事務棟第2小会議室

参加者：FD部会・令和4年度基礎セミナークラス担当教員6名

- 上記「基礎セミナー」について、次年度担当教員のための意見交換と情報共有の部会を主催した。
- ①FD部会員から「基礎セミナー」の担当教員に対して、授業の目的と基本設計について説明をした。
 - ②実際の授業運営の技術的な側面について意見交換や情報共有を行った。
 - ③FD部会員の方で「メールの書き方」等の手引書を作成し、担当教員に情報提供した。
 - ④その後も各教員の授業支援を行った。特に学生委員とFD座長が密に連絡をし、問題のありそうな学生について適宜、各クラス教員と情報共有を行った。

なお、令和4年度の担当教員から、前年度の授業のやり方等についての引き継ぎが不足しているという指摘を受けた。そのため、FD部会で授業後に担当教員へのアンケートを行い、授業の運営手法や気づきについて令和5年度担当教員に情報を提供することにした。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

令和4年度の学生授業自己評価では、昨年度から続く学生の授業外学修時間が低下傾向が継続しているのが見られる。他方で、授業の理解度・満足度については微増している。教員自己評価では、令和4年度前期で、教員が授業の達成に自信を失っている様子が見られるが、後期には昨年度とほぼ同じ数字に持ち直している。

令和4年度の学生授業評価の実施率は、前期97%、後期77%であり、前期は微増しているものの、後期はやや現象している。全体として授業理解度に関して、昨年度と比べて改善が見られた。

Q1：出席に関して（小数点第1位で四捨五入）

項目	令和4年度前期	令和4年度後期
90%以上(14回以上)	76%	74%
80%以上~90%未満(12~13回)	20%	20%
60%以上~80%未満(9~11回)	3%	5%
40%以上~60%未満(6回未満)	0%	0%
40%未満	0%	0%

令和3年度後期、対面授業が復旧した際には非常に高い出席率が認められたが、令和3年度からは比率が低下し、令和4年度もほぼ同じ割合である。

Q2：授業時間外学習時間（予習・復習・レポート作成）（小数点第1位で四捨五入）

項目	令和4年度前期	令和4年度後期
3時間程度またはそれ以上	15%	13%
2時間程度	18%	20%
1時間程度	31%	30%
30~50分程度	18%	20%
30分未満	18%	16%

「授業時間外学習時間」に関しては、令和3年度よりも現象している。特にオンライン授業が中心であった令和2年度と比べると「3時間以上またはそれ以上」の項目が前期で10%程度、後期で20%弱減っている。他面、「30~50分程度」の項目が大幅に増えている。サークル等課外活動やアルバイトが平常どおりになったことなどが理由として予想されるが、今後推移を注視したい。

Q 3：授業内容の理解（小数点第1位で四捨五入）

項目	令和4年度前期	令和4年度後期
そう思う	39%	40%
ややそう思う	50%	50%
どちらとも言えない	10%	10%
あまりそう思わない	3%	2%
そう思わない	0%	0%

「授業内容の理解」に関しては令和3年度から「そう思う」「ややそう思う」の合計が約5%増えている。

Q 4：シラバス記載の到達目標に達成したと思うか（小数点第1位で四捨五入）

項目	令和4年度前期	令和4年度後期
そう思う	33%	36%
ややそう思う	50%	50%
どちらとも言えない	12%	10%
あまりそう思わない	3%	2%
そう思わない	0%	0%

「シラバスの到達目標に達成したと思うか」という質問に対して、「そう思う」「ややそう思う」の合計は3%微増している。

Q 5：授業への満足（小数点第1位で四捨五入）

項目	令和3年度前期	令和3年度後期
そう思う	50%	51%
ややそう思う	38%	36%
どちらとも言えない	9%	9%
あまりそう思わない	3%	2%
そう思わない	1%	0%

「学生の授業満足度」に関しては、「そう思う」の数字が後期について昨年度より 5%程度微増している。

Q 6：授業で使用した遠隔講義システムの分かりやすさ（小数点第 1 位で四捨五入）

項目	令和 4 年度前期	令和 3 年度後期
とても分かりやすかった	47%	39%
分かりやすかった	39%	44%
どちらとも言えない	15%	16%
分かりにくかった	1%	0%
とても分かりにくかった	0%	0%

「授業で使用した遠隔講義システムの分かりやすさ」に関しては、後期は昨年度とほぼ同じであるが、前期について「とても分かりやすかった」「分かりやすかった」が 20%程度増えている。

・教員授業自己評価

令和 3 年度の教員授業自己評価の実施率は前期 58%、後期 54%であった。前期は微増したが、後期は大幅に減少しているため、積極的に呼びかけを行いたい。

以下、昨年度と同様、教員自己評価を実施した全授業における結果を Q6~8 に関して、令和 4 年度前期・後期を比較する。

Q 6：学生が授業の内容をよく理解できたと思うか（小数点第 1 位で四捨五入）

項目	令和 4 年度前期	令和 4 年度後期
そう思う	28%	51%
ややそう思う	39%	32%
どちらとも言えない	27%	11%
あまりそう思わない	5%	1%
そう思わない	1%	4%

「学生が授業内容をよく理解できたと思うか」という問いに対して、前期で「そう思う」「ややそう思う」との回答の合計前年比 20%弱減少しており、学生の側の理解度の項目の比較的高評価と比べて教員がやや自信を失っているように見える。

Q 7：シラバスの到達目標を達成できたと思うか（小数点第 1 位で四捨五入）

項目	令和 3 年度前期	令和 3 年度後期
そう思う	29%	38%
ややそう思う	56%	46%
どちらとも言えない	17%	16%
あまりそう思わない	0%	0%
そう思わない	0%	0%

「シラバスの到達目標を達成できたと思うか」という問いに対しては、「そう思う」の割合が 10%程度減少しており、Q6 同様に教員の側の自信の低下が見られる。

Q 8：学生は授業に満足していると思うか（小数点第1位で四捨五入）

項目	令和4年度前期	令和4年度後期
そう思う	12%	23%
ややそう思う	51%	41%
どちらとも言えない	35%	34%
あまりそう思わない	1%	0%
そう思わない	0%	0%

「学生は授業に満足していると思うか」という問いに対して、同じく前期において「そう思う」前年比20%ほど減少している。

第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
人文学部			0	
計			0	

第6節 来年度の課題

令和4年度は、コロナによる混乱から徐々に回復してゆく課程にあったが、依然として授業形態に制約がある中での授業実施であった。授業の形式的側面もさることながら、長きにわたるコロナ禍が学生の側のメンタリティに及ぼす影響については、引き続き見守ってゆく必要があると思われる。その点を考慮しつつ「基礎セミナー」の運営については学生委員・担当教員と密接に連絡をとるようにした。その結果、「基礎セミナー」で早期に欠席が重なる学生については後期以後も成績不振になるケースが多く、学部全体の留年率・退学率を下げるためにも素早い介入が求められることがわかった。

今年度は新大学院構想、STEAM教育構想など、学部のニーズを考えたFD研修会を主宰することができた。来年度も学部教員のニーズを汲み取りつつ、FD活動としての有効な研修・支援の方法を教学関係者との効果的な連携のもとで検討してゆきたい。(アンケートにおいてSDGsに関する講習についての要望があったため可能であるか検討したい。)

第5章 教育学部のFD活動

第1節 授業公開

平成27年度以降、教育学部は授業公開の時期等で困難があり、実施を見送らざるを得なかった。今後、効率的効果的な授業公開を実施する目的のために、現在、教室単位で行われている授業公開・授業改善がどのような形態と規模で取り組まれているかの実態調査し、併せて望ましい授業公開のあり方について各教室の意見を求めることにした。

各教室の授業公開・授業改善の取り組みの実施例を取りまとめ、各教室間で情報共有の一助とした。また、授業公開実施にあたっての制約や望ましいと考えられる授業公開のあり方についての意見についても情報共有の一環として各教室に還元した。

授業公開実施例・実施にあたっての制約・望ましい授業公開のあり方

1. 現在、実施している授業公開の事例

(1) 複数教員が担当する科目において、担当以外の授業に参加し、授業内容について議論等を行ったりしている。【該当教室】小学校総合・技術教育

2. 授業公開実施にあたっての制約

- (1) 授業公開を実施するにあたって、時間的制約や負担が大きい。
- (2) 授業公開を実施しない場合の弊害についての情報が無い。

3. 望ましいと思われる授業公開のあり方

(1) 「授業公開」だけとりあげても大きな変化は期待しにくいと思われる。教育学部なので各大学教員の教育研究や実践臨床研究との関わりの中での「授業公開」であれば意味があるのではないかと。さらに「大学における教員養成」という視点を具体的な大学の授業をレベルで行うのであればさらに「授業公開」の持つ価値も見いだせるのではないかと。できれば予算的措置などがあれば専門領域を越えた「授業公開」への大学教員の意欲も高まるのではないかと。

理科に限らず、中高の各教科の教育法の科目については、授業内容の体系化や授業方法の改善に繋げることを目的として、どのような内容の授業をどのように行なっているのか、まずは各教科の中で確認することが望ましい。

小学校の教科指導法に関しては教科を超えて授業参観を行い、授業改善の参考にすることが望ましい。(理科教育)

(2) 授業実施形態の特徴(例えば、思考ツールを活用した授業、グループワークを活かした授業など)やケーススタディやロールプレイングの活用について情報共有できれば、その特徴を他教室も活用できる。また、好事例にあたるのではないかとと思われる授業を公開するという形式も考えられる。(保健体育)

(3) 同じ学問領域あるいは各教科・教室の中で授業公開するとよい。(国語教育・社会科教育・音楽教育・美術教育)

第2節 学部・研究科主催FD研修会

第1回FD研修会

テーマ：『卒業生調査報告書』について

講師：藤本幸伸（自己点検評価部，英語教育教室）

日時：令和4年7月20日（水）15:00～15:30

参加者：68名

自己点検評価部は、平成30年度から『卒業生調査報告書』を作成している。この『報告書』は、教育学部を卒業し県内の学校に新任教員として赴任した卒業生およびその赴任校の管理職を対象に、自己点検評価部（最初はFD・評価部）が意見の聞き取りを行い、取りまとめたものである。

今回は、平成30年度から令和3年度まで4年間の『報告書』から抽出した主な意見と課題について報告が行われた。

卒業生には、「卒業論文、教育実習、授業・ちゃぶ台について」の3項目の質問を行った。

- 1) 卒業論文：卒業論文執筆過程で習得した能力への評価と卒業論文と教育現場との不整合への不満
足感
- 2) 教育実習：教育実習の充実感と校務分掌や学級経営知識の不足感
- 3) 授業・ちゃぶ台：模擬授業やちゃぶ台への高評価

以上の3点が報告された。

管理職には、「県の教員育成指標と本学部卒業生の状況、教育学部／教員養成に対する意見」について質問を行った。以下のような意見が報告された。

- ・早期からの教育現場経験の有用性
- ・児童生徒と同僚教員・保護者とのコミュニケーション力の大切さ
- ・教科専門性と授業力
- ・合理的配慮の必要な児童生徒を含めた子供理解

第3回FD研修会

テーマ：DX時代ICT活用の課題と展望

講師：阿濱 茂樹（技術教育教室）

日時：令和4年10月19日（水）15:00～15:30

参加者：63名

学校の授業や大学の講義・演習でICT活用の必要性が高まる中、本学部ではGWE(Google Workspace for Education)が使用できる環境が整備されている。しかし、必ずしも授業等に十分に活用されているとは言えない現状から、自己点検評価部は「DX時代のICT活用の課題と展望」というタイトルでFD研修会を企画した。

背景として、GIGAスクール(Global and Innovation Gateway for All)構想に基づく整備状況と、ICTを活用した学習指導ができる教員の養成・研修のエコシステムについて触れられ、ICTを活用しながら教員養成学部で学んだ人材が、ICTを教育現場で活用し、ICTを活用した学習指導の研修ができる教員へ成長することの意義が示された。

大学の科目での活用事例については、「データ科学と社会Ⅰ・Ⅱ」「技術科教育法Ⅳ」での利用が紹介され、それぞれGWEリテラシーの育成と、共同編集を通じた教材作成などに活用されており、「データ科学と社会Ⅰ」のサンプルからは「ドキュメント」「スライド」「スプレッドシート」「フォーム」の基本操作や課題の実例などが示され、FD参加者の教育実践に役立つ参考資料が示された。

第4回 FD 研修会

テーマ：教員養成を巡る直近の課題と展望～これまでの経緯・変遷を踏まえて～

講師：和泉研二（教職センター長，理科教育教室）

日時：令和5年1月18日（水）15:00～15:30

参加者：71名

本研修会では、1) 教員養成を巡る変遷、2) 『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等に関する改革工程表（案）』に見る課題と展望、3) 課程認定について配付資料をもとに説明がなされた。

1) 教員養成を巡る変遷では、戦後の教員養成について「大学での養成」と「開放性」を視点に中央教育審議会の答申等をもとに述べられた。

2) 『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等に関する改革工程表（案）』に見る課題と展望では、①「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師像と教師に求められる資質能力、②育成指標について、③多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成、④教員免許の在り方、⑤教員養成大学・学部・教職大学院の在り方、⑥教師を支える環境整備について述べられた。

3) 課程認定については、①課程認定の制度の概要等、②教職課程に関する改正等について述べられた。特に、令和5年度から教職専任教員の定義ならびに教育実習等の時間数（1単位あたりの時間数は30時間を標準）が変更されるとのことである。

第6回（臨時）FD 研修会

テーマ：『教員のメンタルヘルスと支援』

講師：春日由美（心理学教室）

日時：令和5年3月3日（金）15:50～16:20

参加者：62名

コロナ禍で新任教員の離職件数が増加傾向にあることを受け、教育学部での学生指導に生かせる支援について、心理学教室の春日由美准教授にお話いただいた。一般労働者のメンタルヘルス不調による休業率が0.5%なのに対し、令和3年度の教員の休業率は0.64%と高く、前年度と比べて増加傾向にある。休業もしくは離職の要因となる教員のストレスとして、学級崩壊、教員間トラブル、多忙、保護者対応などが挙げられるが、初任者の場合、多忙さに先の見通せなさ・わからなさが加わり、また教員の傾向としてミスを過度に気にすることや助けを求めないプライドの高さが指摘されている。初任者は、特に理想と現実のギャップの大きさを感じやすいだけに、在学中に「自動化、柔軟性、人と関わる経験、自己管理・SOSを出す、教育相談力」などを身に付けておくなど、自己防衛力を知っておくことが望ましい。大学側も、狭き教員採用試験をくぐり抜けた新任教員を支援することを心がけることが求められるのではないかと。

第7回 FD 研修会

テーマ：近年の教員採用試験状況と対応

講師：浦田敏明（教職センター）

日時：令和5年3月15日（水）15:00～15:30

参加者：74名

今回は、本学教職センター浦田敏明先生に、近年の教員採用試験（以下、教採）の変容と教採を受ける学生への対応についてご講演いただいた。講演は、浦田先生の経歴を踏まえた話からスタートし、コロナ禍・それ以前からの教採の動向、学生の現況、サポート体制と続いた。

講演では、本学部学生の課題として、スタートが遅い（切迫感がない）、教職相談室（どう相談してよいか）を知らない点が、教採の動向として、より人物重視になった点が紹介された。また、教採の場面指導に関する過去問と、それに対する学生の解答、その学生がなぜそのような解答に思い当たったのかの話、志願書に困る学生に対して、どのような歩みをたどったのかを具体を持って尋ねた話は、教職を志す学生への支援や指導に対して具体的なイメージを持つきっかけとなったと思われる。聴講者のアンケート（回答率 51%）に基づくと、本研修会について「非常に良かった」・「良かった」と回答した者の割合は 95%を越え、「わかりやすかった」との感想と共に、教職センターのきめ細やかな指導に対する感謝が述べられていた。本研修会を機に、教職センターとより一層の連携が図られることを期待したい。

第3節 教育改善に関する活動

本学部では、令和 4 年 4 月に新規に教員として採用された本学部卒業生とその赴任校の管理職（各 22 名）に、卒業生には本学部教員養成カリキュラム（卒業論文・卒業研究、教育実習、授業・ちゃぶ台 PG 等）の満足度や有効性あるいは課題について、管理職には新規採用一年目の教員としての資質・能力は十分に備わっているか、改善すべき点はどこか等について聞き取り調査を行った。その結果を報告書にまとめ、全教員に配付した。

学生授業評価および教員授業評価の実施率の経年変化を図 1 に示した。授業評価実施率は、令和 3（2021）年度に続き、学生・教員ともに減少した。令和 4（2022）年度も、新型コロナウイルス感染症防止のため授業形態が対面授業と遠隔授業が混在することになり、そのことが学生の授業評価実施率に影響を与えたと考えられる。これに対して、教員の授業評価実施率は、大幅に減少しており、40%を下回る結果となった。



図 1 授業評価実施率の経年変化

図 2 は、令和 2(2020)年度～令和 4(2022)年度の教育学部学生の授業外学習時間を調査した結果である。令和 2(2020)年度の FD 報告書で「今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、学生は卒業

生とは大きく異なった生活を送ることになり、学外での活動はかなり制限された。来年度も引き続き新型コロナウイルス感染症の影響があった場合には、状況に合わせて、授業外学習時間が適切に確保できるような取り組みが必要である」と課題を指摘していたが、授業外で2時間以上学習時間を確保した学生の割合は、令和2(2020)年度の55.9%から令和3(2021)年度は38.4%に大幅に減少したが、令和4(2022)年度は34.2%と微減であった。

これも昨年度と同様に新型コロナウイルス感染対策により、学生間で形成されるはずのソーシャルキャピタルが分断され、ストレスが大きくなったことが授業外学習時間の確保に影響していると考えられる。

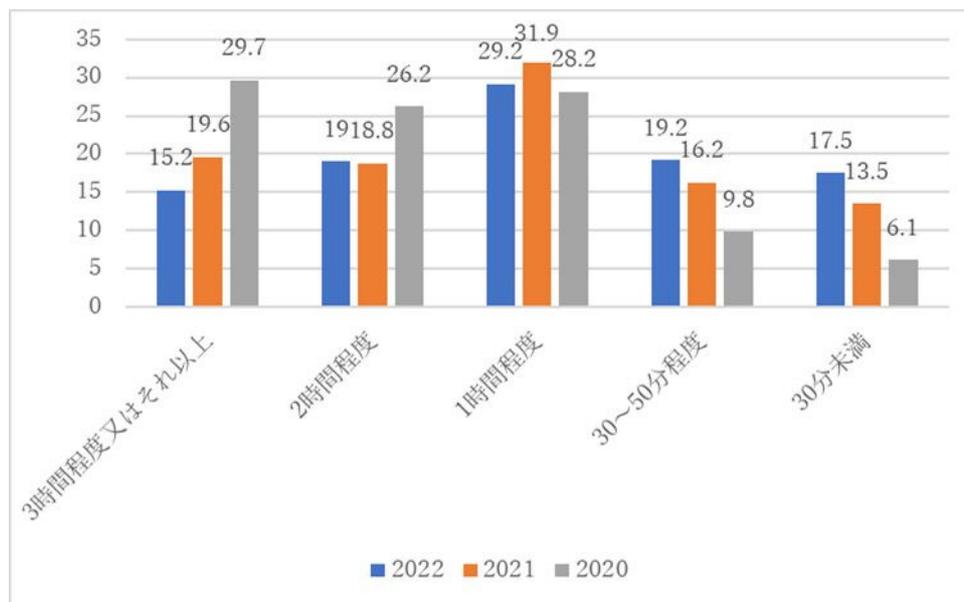


図2 授業外学習時間

第4節 FD実施経費報告書

部局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額	FD活動の効果(簡潔に)
教育学部	卒業生調査報告書	印刷費	57,200	教員養成カリキュラムの満足度・有効性・課題等の把握
	卒業生調査	旅費	8,070	
	卒業生調査報告書	郵送費	1,659	
計			66,929	

第5節 来年度の課題

令和4年度、学部としての公開授業は実施しなかったが、各教室単位で行われている授業公開・授業改善の取り組み実施例を取りまとめ、各教室にフィードバックし情報共有の一助とした。教育学部という学部の特質上、すべての教室が一様に公開授業することは、時間的制約の問題だけではない困難を伴うことが確認された。次年度も引き続き各教室の取り組みを取りまとめ、各教室間で情報共有をして望ましい授業公開に向けた試みを検討していくことが求められる。

平成 30 年に卒業生とその管理職に対する取り調査を開始した。例年、卒業論文・卒業研究、教育実習、授業・ちゃぶ台 PG 等に対する卒業生の評価は非常に高いが、卒業研究の成果を現場で活かしていない、大学の授業と現場で使う教材との関連性が少ない、あるいは教育実習で校務分掌について知っておきたかったなどの指摘がある。また、ちゃぶ台 PG への参加は小学校総合選修の学生が多く、幼稚園教諭・中学校教諭・特別支援学校教諭を主免許とする学生の参加が少ないことも指摘されている。管理職からは卒業生の資質に関しては概ね良好な反応が多いが、毎年、教育現場を知ること、子ども・保護者・先輩教員とのコミュニケーション力を高めることが課題として挙げられている。『卒業生調査報告書』を全教員に配付し、以上の分析結果を共有しているが、その結果を教育活動にどのようにフィードバックするか、どのように反映されているかについては、今後何らかの形で調査し明らかにしていく必要がある。

令和 4 年度の学生の授業評価実施率は 89.6%であり、来年度は実施率を高めるような働きかけを行っていく。一方、教員では約 60%以上の授業で実施されていない。授業評価実施時期には、授業評価の意義について周知して実施を促すことを行っているが、今後も継続して授業評価実施を促す必要がある。

授業外学習時間が昨年度と同様に令和 2 年度から大幅に減少したことについては、新型コロナウイルス感染防止対策の影響で対面授業が減り、オンライン授業が多くなったことが学習時間確保を困難にした可能性がある。授業外学習時間の減少が、新型コロナウイルス感染防止対策の影響で一過性のものなのか、それとも学生の傾向なのかは今後も注視していく必要がある。

第6章 経済学部でのFD活動

第1節 授業公開

今年度、経済学部としての授業公開は実施していない。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

2-1 科学研究費獲得推進ワーキング・FD研修会等

2018年度から実施している科学研究費獲得のためのFD研修会を継続して行った。

- ・ 第1回 研究推進室ワーキング開催

5月18日(水)12:00～ 研究推進室メンバー6名が集まり、研究推進室長より、昨年度の応募状況・採択状況等の資料に基づき現状報告が行われ、今年度の活動方針や内容等の検討を行った。

- ・ 第2回 研究推進室ワーキング開催

6月15日(水)12:00～研究推進室メンバー6人によるワーキングを開催。推進室メンバー所属「細目」における今年度の全国採択者の分析を6名全員に報告してもらった。各分野、分野ごとの特徴がみられ、有益な分析情報も多々あることから、今年度のFD研修会で改めて紹介してもらうことになった。今年度は、1. 審査委員経験がある教員の簡単なレクチャーと情報交換会・質疑応答、2. 細目ごとの全国採択者の状況分析の報告と情報交換を中心とした対面型の座談会の実施することになった。

- ・ 科研費獲得推進研修会

7月20日(水)12:00～定例教授会の前に、上記の内容で科研費獲得推進FD研修会を実施した。参加者は、若手教員を中心に全体の約3分の1にあたる20名前後であったが、質疑応答を含め活況であった。参考までに、「状況分析」の報告の一例を挙げておく(参考資料1)。

.....

(参考資料1)

商学・観光学「基盤研究(C)」の採択状況

1. 概要

この書類は、商学・観光学分野の2022年度科学研究費補助金・基盤研究(C)の採択状況を

まとめたものです。

なお、商学の分野は、流通論、マーケティング論、消費者行動論、物流論（ロジスティクス論）などの分野が含まれます。そのうち、流通論、マーケティング論、消費者行動論のみピックアップしました。

観光学は学際的領域となります。人文（哲学・地理学）・社会科学・工学の研究者が申請しているようです。それらを区別することなく、まとめました。

2. 集計結果

(1) 大学種類別

基盤研究(C) 大学種類別割合	商学(流通・MKG)		観光	
	件数	割合	件数	割合
2022年採択件数	25	100.0%	51	100.0%
旧帝大	1	4.0%	2	3.9%
旧高商(+和歌山大学観光学部)	4	16.0%	4	7.8%
その他国公立	3	12.0%	13	25.5%
早慶上智	3	12.0%	1	2.0%
Gマーチ	2	8.0%	2	3.9%
関関同立	1	4.0%	0	0.0%
その他私立大学	11	44.0%	29	56.9%

※観光学について

- ・旧帝大卒の2件は、いずれも北海道大学
- ・旧高商卒の4件は、すべて和歌山大学観光学部
- ・その他国公立卒は、公立大学の地域ナントカ系学部、人文学・教育学部が多い

(2) 職位別

基盤研究(C) 職位別割合	商学(流通・MKG)		観光	
	件数	割合	件数	割合
2022年採択件数	25	100.0%	51	100.0%
教授	13	52.0%	28	54.9%
准教授	9	36.0%	17	33.3%
講師	2	8.0%	2	3.9%
助教	1	4.0%	1	2.0%
その他	0	0.0%	3	5.9%

(3) 商学の分野別採択件数

基盤研究(C) 分野別割合	商学(流通・MKG)	
	件数	割合
2022年採択件数	25	100.0%
流通	6	24.0%
マーケティング	8	32.0%
消費者行動	11	44.0%

※なお、物流（ロジスティクス）分野は2件あるが、集計に加えていない。

3. 雑感

(1) 商学分野

基本的に採択者は、日本商業学会『流通研究』、消費者行動研究学会『消費者行動研究』の学会誌に論文が掲載されているか、単著・編著を出版している方ばかりである。審査員は、学会への貢献が顕著な方に、さらなる研究を進めるための資金を提供しているものと思えた。

(2) 観光分野

コロナウイルス感染拡大に伴う観光産業の現状や課題を研究するものが多いのではないかと（勝手に）想像していたが、実態としては先生方の多様な観点からの研究に支援が行われているように見えた。国立は、北海道大学（観光高等研究センター）と和歌山大学観光学部の採択数の多さに、驚きを感じた。

.....

・部局マネジメント改革経費による科研新規申請者に対するインセンティブの配布

8月3日の経済学部運営協議会において、研究推進室長の提案により、以下の内容（参考資料2）で、部局マネジメント改革経費による科研新規申請者に対するインセンティブの配布を行うことが決まり、教員に対する科研申請に対する呼びかけが行われ、応募者の増加が図られた。

.....

（参考資料2）

件名：【経済学部】（公募）科研費（R5）応募者へのインセンティブ

宛先：経済学部 教員各位

差出人：経済学部 研究推進室

研究代表者として令和5年度科研費へ新規に応募した経済学部教員（東アジア研究科専任教員を含む）に、インセンティブとして部局マネジメント改革推進経費から一人当たり3万円～5万円程度の研究費を配分することが、8月3日開催の経済学部運営協議会で決定されました。

希望者は、下記により申請してください。

- ・提出書類： 科研費応募インセンティブ申請書（本メール添付 word）
- ・提出先： 経済学部・予算管理係

- ・提出期限： 令和 4 年 10 月 3 日（月）

【注意事項】

- ・令和 5 年度科研費に、研究代表者として新規に応募された方に限ります。
（研究種目は問いませんが、研究分担者及び継続の方は、この度のインセンティブの対象とはなりません。）
- ・令和 5 年度科研費の応募を web 上で済ませた方は、別途「科研費応募インセンティブ申請書」（本メール添付 word）を予算管理係へご提出ください。（科研費の応募をただだけで、本インセンティブが自動的に配分されるものではございません。お手数ですがよろしくをお願いします。）
- ・複数種目に応募された方は、1 種目分のみご提出願います。（本インセンティブは、お一人 1 申請に限ります。）
- ・本インセンティブ申請書の「概要」記入欄は、必ず 200 字以上でご記入ください。
（科研費応募書類の「概要」のコピー可。所定の字数に満たない場合は、本インセンティブの対象とならないことがあります。）
- ・所定の予算額を希望者人数で割ることにより、最終的な一人当たりの配分額が決まりますので、あらかじめご了承ください。

経済学部・研究推進室

.....

第 3 節 教育改善に関する活動

近年、経済学部教員から経済学部カリキュラムに対する課題や問題が指摘されること
が多くみられ、カリキュラム改革の必要が高まってきている。今年度は、そうした状況を
踏まえ、経済学部カリキュラムの課題・問題点に関するアンケートを行い、そうした課題・
問題点に関する情報共有 FD 研究会を行った。11 月 30 日を目安に、経済学部教員全員に
対してアンケート調査を行い（参考資料 3：回答数は経済学部教員全体の約 3 分 1 にあ
たる約 20 名）、各学科で収集し、3 月 3 日の臨時教授会後、アンケート結果（参考資料
4）を示しながらの情報共有 FD 研修会を行った（50 名近くの経済学部教員が参加）。

.....

(参考資料3) アンケートシート

2022 年度経済学部 FD 研修会用シート

学科 氏名

- ・現在、本経済学部や所属学科が抱えるカリキュラム上の課題や問題点（改善点・改善方法）について、自由にご記入ください。
- ・400 字以内でお願いいたします。箇条書きでも結構です。
- ・ご提出は、11 月末日までに、ご所属の学科長までお願いいたします。

.....

(参考資料4)

2022 年度経済学部 FD 研修会（アンケートのまとめ）

2023 年 3 月 3 日

★はじめに★

・今回のお答えいただいたアンケートのご質問は「現在、本経済学部や所属学科が抱えるカリキュラム上の課題や問題点（改善点・改善方法）について、自由にご記入ください。」ということでしたが、所属されておられる学科によって、先生方のご回答に特色がありましたので、ここでは、「経済学部全体に関わること」「各学科における課題・問題点に関わること」に分けて、とりあえずの整理をさせていただきました。

・一部の先生方からのご要望がございました、「経済学研究科」（大学院）に関する言及は、来年度以降、改めて行われるものと期待しますので、ここでは割愛させていただきました。

・また、個人名が記載されているものに関しましても、プライバシーの観点からお名前を削除させていただいております。また、特定の個人の批判とも受け取られかねない表現箇所・内容についても配慮の上、加工しているところがございます。ご了承ください。

・今回の FD の目的は、

学部カリキュラムの課題等を学部の先生方で共有すること にあります。今後の取り扱いについては、学部長にお任せいたしますが、

1. 学部全体のことで、各学科の課題でも、すぐに解消できそうな比較的小さな課題・問題は、学部もしくは各学科において、話し合いを通じて速やかに解消する。

2. カリキュラムの大幅な見直しやコースの設置・改変等の比較的大きな課題については、学部において WG 等を設置し、今後検討していく ことをご提案申し上げます。

I. 経済学部全体に関わるご指摘・ご提案

(1) (学部全体の) カリキュラムの編成に関して

先生方からの主なご提案等

- ① 社会科学入門の設置
- ② 開講科目の削減
- ③ 同一科目を複数の教員で担当

1) 社会科学の基礎を学ぶ授業の不在

【問題点】本学部には、社会科学とはどのような学問なのかを学ぶための授業がないため、社会科学的な思考枠組みを体得できていない学生が一定数見受けられます。

【改善策】多様な分野の教員からなるリレー講義として「社会科学入門」という授業を設定し、基盤科目に位置付ける。

2) 開講科目が教員数に比べて多すぎる。開講すべき科目を絞って複数の教員が担当できるようにし、毎年同じ時間割にするか、せいぜい 3 パターンで済むようにすると、学生にとってはどの科目がいつ開講されるか分かるし、事務の負担も少なくて済む。

複数の教員が担当できれば、数年に一度、サバティカルを設けて研究業績もあげやすくなるのではないかと。

TOEIC400 点を卒業までにとればいいことになっているので、先送りする学生が多い、2 年への進級時に 250 点、3 年の進級時に 300 点、4 年進級時に 350 点のように段階的にハードルを高くすると、TOEIC400 点が取れなくて卒業できない学生は少なくなるのではないかと。TOEIC の補講について、知らない学生が多いようだ。

3) 科目の整理について

担当していただく非常勤の先生を見つけるのが難しいケースがありますし、教員数が少なくなっていることもあり、必要な科目に絞ってすっきりした体系に整理できればいいと思います。いずれやらなければならないと思います。

4) 経済学や統計学の基礎となる数学に関する講義が開講されず支障がでている。退職した教員の後が埋まらない状況が恒常化しており、基礎となる科目について担当グループをつくって抜けない状態を維持する必要がある。その場合、担当科目数の整理も必要となるので、各学科のコースカリキュラム自体を複数でカバーするようなカリキュラム改革も必要となると思われる。

5) 少なくなる教員でカリキュラムを回すためにも、そろそろ「教教分離」について検討することも必要である。

(2) 演習（ゼミ）に関して

先生方からの主なご提案・ご意見等

- ① 2 年生時からのゼミの固定化を避ける（「2 年時セミナー」の設置）
- ② ゼミの毎年の開講
- ③ ゼミの単位を半期 2 単位ものにし、4 年生前期は就活用に不開講
- ④ ミスマッチを減らすため、希望者の多かったゼミは、希望者数に応じて、採用数を増やす
- ⑤ 第一次希望を落ちた学生向けの（定員未充足のゼミでの）「第 2 期募集（追加募集）」制度の設置

1) ゼミ選びに際するミスマッチ

【問題点】ゼミ選びの時期である 1 年生の 10 月時点で、学生達は経済学部教員の授業を殆ど受けたことがありません。結果として、配属されたゼミでの学習内容に興味を持ってない学生が一定数存在すると考えられます。

【改善策】現行の演習 I は、「二年次セミナー」（通年 4 単位、必修）などと名称を変更し、学生が自由に履修できるようにすべきです。その上で、3 年生進学時に現行のゼミ振り分けを行うべきでしょう。こうすれば、2 年次に経済学部教員の様々な授業を経験した後に、ゼミを選ぶことができます。

2) 演習についての提案

・演習 I を原則として毎年全教員が開講（募集）することを提案します。大学受験・志望時

(総合型選抜や推薦入試の志望理由書など)には、特定の先生のゼミで学ぶことを志望する生徒が少なからずいますが、現在のカリキュラムでは、いざゼミを選択する際に、その年に演習Ⅰが開講(募集)されないというミスマッチが起きているかと思います。

原則全員開講とすることでそのミスマッチを多少なりとも改善することができ、さらに、より少人数での密度の濃い指導が可能となるかと思います。また、開講教員数が増えることで、定員オーバーという事態も減少し、併せて教員の卒論指導学生数の負担も軽減されるかかと思えます。

・開講期と単位数は、演習Ⅰを2年次後期から半期(2単位)とし、演習Ⅱは通年(4単位)、卒論演習は前期を無し(就活のため)として、後期から卒論指導(2単位)として、合計4単位(これまで通り、教員の負担は3年12単位分)とします。1年生にとっても、1年次後期の早々にゼミ選択をするのではなく、1年間かけてじっくり教員の専門分野を知ること、教員に関する情報不足によるミスマッチ軽減にも繋がり、2年次前期にゼミ所属が決まるという時間的猶予もできるかかと思えます。一方で、学生にとっては4単位分の補填が必要となりますが、2年次前期に、基礎セミナーの発展版(2単位)を新設(以前「外書講読」という科目はありましたが)したり、他の専門科目(4単位分)で補う方法が考えられます。

・その他にも、編転入した学生の演習単位の取得条件についても利点があるかもしれません(現在どのようにしているのか詳細はわかりませんが)。

・懸案事項は、ゼミ数が増えることによる教室の確保ですが、より少人数になることで、C棟やD棟の空き教室が利用可能になるかかと思えます。

3) 演習Ⅰのミスマッチを少しでも解消するためのご提案。

1. 第二志望(選抜前)段階で、学生応募者数の定員(10名)超過の先生方には、応募者数に応じて、最低採用人数を増やすことをお願いすることです。具体的には、応募者15~19名の場合、最低採用数11~12名、応募者数20~24名の場合、最低採用数12~13名、応募者数25~29名の場合、最低採用数13~14名、応募者数30名以上、採用者数15名とする。一人でも、多くの学生さんが第一希望のゼミに入れるように、配慮が必要かか存じます。

2. 第一希望以外はどこでもいいという、なげやりな学生さんを一人でも減らすためにも、第一希望のゼミを落ちた学生さんをフォロー・アップする仕組みも必要だかと思えます。具体的には、他大学(経済学部)で行われているように、第二期(追加募集)の手続きをきちんと行うということです。ゼミ募集は、年を超えてもよいはずですが。現状では第一次希望までに入らなかった学生さんに、第2~20希望を書かせて、後はGPA順に割り振っているだけの乱暴なシステムです。第二期募集までをきちんと行い、ミスマッチを少しでも減らすことが、学生・受け入れ教員双方にとって重要なことではないでしょうか。(おそらく、留年

率その他に、よい効果をもたらすことになるはずです)。

(3) 各論 2 に関して

先生方からの主なご提案・ご意見等

- ① 各論 2 に定員上限を設ける
- ② 各論 2 と基盤科目との関係を見直す
- ③ 学年指定を導入する

1) 各論 2 の履修者数を上限 50 名にできるとありがたいです。ディスカッションを授業に含めたいのですが、人数が多いと、実施が難しいです。

2) 科目をすべて履修済みでなければ各論 2 を履修できないというのはおかしい。なぜ法学 II を落とすとミクロ経済学 II を履修できなくなるのか。なぜミクロ経済学 I を落とすと憲法 II を履修できなくなるのか。また、各論 II の科目の中には 3 年に 1 度しか開講されないものもあるから、2 年生の時に履修できなければ二度と履修の機会がないことにもなりうる。→基盤科目の位置づけを改め、単なる必修科目とすべきである。

3) 学年指定を導入すべきである(少なくとも毎年開講される科目については)。「総論」「各論 2」の区別だけでは、どの段階で履修すべきかが示されない。

(4) オンライン授業に関して

先生方からの主なご提案・ご意見等

- ① 「オンライン授業」に関する認識を深め、適度な活用を推進する

1) 「オンライン授業」の利点が理解されないこと。教員の「基礎疾患」等の理由を挙げられるのは、授業形態の説明をしている際に、あまりに唐突であり、極めて不穏。説明を理解する気がない、という議論以前の状態。オンラインの長所は、PC の操作説明で、動画を止める、戻す、拡大するということができる点。操作の遅い学生も焦らずに学べる。無理に対面授業にしても、PC を持参していない場合は、教育効果がなさすぎる。「合わせ」ボタン等の授業の「工夫」に理解がない。ただし、授業のすべてをオンライン化すると、誤った情報(オンライン授業の教員と対面授業の教員が別人等)が流布するようなデメリットもある。「オンライン」推進派ではなく、適宜オンラインというスタンスが理解されない。

各学科の改善点に関するご意見

(1) 経済学科

先生方からの主なご提案・ご意見等

- ① ミクロ担当教員選出の在り方の見直し
- ② 「経済」本科と「国際経済」のコースの在り方の見直し

1) ミクロ担当教員の決め方について

ミクロ経済学が必ずしもお得意でない先生も担当者に名を連ねてらっしゃる様子で、担当するのが大きな負担である旨のご意見なども聞きます。ミクロは基盤科目で大変重要な科目です。適正も考えてミクロを得意とする先生方に担当していただく方がよいかと感じています

2) 卒業要件について、経済本科のなかでも経済履修と国際経済履修があり複雑なので、経済本科の卒業要件は一つに統合するなど、所属学科・コースと卒業要件を1：1の関係にしてはいかがでしょうか。

3) 経済学科本科には、「経済」と「国際経済」の履修選択があるが、ほとんどの学生が「経済」で卒業していて、「国際経済」の独自性が希薄となっている。

経済学科本科の「経済」の必修科目である「経済政策総論」は非常勤講師が担当し、「国際経済」の必修科目のひとつである「国際マクロ経済学」も非常勤講師が担当(来年度は未定)している。理想としては、常勤の複数の教員が年度ごとに交代で担当できる(あるいは一人の教員が欠けても毎年開講できる)必修科目とした方がよい。

4) 具体的な提案ができず申し訳ありませんが、可能な限りシンプルなカリキュラムにした方がよいのではないかと考えます。例えば、経済学科本科における「経済」と「国際経済」の履修選択は無くし、選択のことを気にせず自由に科目履修を進められるようにしてもよいのではないかと思います。

(2) 経営学科

先生方からの主なご提案・ご意見等

- ① カリキュラム編成上の不都合の修正
- ② 職業会計人コースの諸問題の提起

1) 今開講中の行政法Ⅱで受講者から言われて初めて気づいたことですが、本来ならば行政法Ⅰを経てからすなわち行政法の基礎知識をマスターした上行政法Ⅱでより専門的な知識(行政救済法)の勉強になるはずでしたが、本学部のカリキュラム編成で前期開講の行政法Ⅰと同じ日時に必修科目が入っているため、結局行政法Ⅰを履修しようとしてもできない

事態が判明した。改善してほしいです。

2) 職業会計人コースは資格取得を目指すコースであるが、公認会計士の合格実績は最大で年5人。簿記1級を取得できるのも1学年10人いるかどうか。学費以外に追加で80万支払ったにも関わらず、毎年30人程度は何も卒業取得できないまましていく。多くの職会生にとっては得るものがあまり無いコースになっている。そもそも基盤科目の成績が悪い学生は経営本科には入れないが、ボーダーの低い職会コースになら入れるので、勉強する意思がないのに籍だけ置く学生もいる。大原からも職会の定員を減らして本気で勉強する意思のある学生だけが入ってくるコースにしてくれとの声がある。大原が科目提供を減らして以降、受験勉強がほとんど単位にならないコースになっているが、定員規模、学科振り分けの方法、カリキュラム内容など、問題だらけである。

(3) 観光政策学科

先生方からの主なご提案・ご意見等

- ① 観光経済分析コースの改編（コースコンテンツの大幅な見直し）
- ② 必須科目に関する再検討（選択自由度を上げる）
- ③ コース振り分け方法の見直し
- ④ カリキュラムの見直し（長期的視野から）
- ⑤ 同一科目・複数教員担当制への異論（例外を設ける）
- ⑥ 海外プロジェクト担当決めに関する意見
- ⑦ 学科定員の見直し

1) 観光経済分析コースでの学びに対する魅力が失われていると思います。

観光経済分析コースを第一に志望する学生は極めて少ない状況が続いています。その状況を改善するために様々な対策を講じてきましたが、観光経済分析コースの魅力がほとんど伝わっていないようです。おそらく、観光経済分析コースのカリキュラムは、もはや学生のニーズにマッチしていないのではないのでしょうか。以前より、データ分析・IT人材に対する需要は高かったのですが、最近では本学部の学生もデータサイエンス等を学ぶ必要性を感じているようです。そのニーズに応えるために、観光政策学科において、観光経済分析コースを閉じてデータサイエンス・DXに特化したコースを新たに開くべきだと考えます。また、より良い学びの導線を学生に提示するためにも、新たなコースのカリキュラムについて抜本的に考えるべきだと思います。

2) 1. 観光経済分析コースと観光コミュニケーションコースは他学科や本科と比べて必修が多すぎるのではないのでしょうか。コースに行きたい学生は定員に達したことがないと聞きます。

勉強したい科目が選択できるように学生の自由度を高めた方がよいのではないかと考えています。

2. これまで、本科 20 名、2 コース 30 名という学部の事務的な定員から学生を割り振ってきましたが、今年度は、本科を第一志望で選択できるようにしたため、コースに行くべきではない学生がコースに割り振られていました。卒業できない学生をつくらないために、コースで学べる学生は本人の勉学への意欲、GPA と英語力から判断するべきだと思います。本科とコースの割り振りについて早急に再考が必要であり、コースの人数を臨機応変に変更するなどの対応が必要だと思います。

3) 2018 年以前の話になりますが、学務係でデータをみせてもらったところ国際総合学部ができた直後から観光政策学科学生の TOEIC 平均点が 100 点近く下がっていました。昨年（この後入学した）経済分析コースの学生から多くの留年生が出ました。私も個人的には英語を重視したいのですが、さすがにここまで留年者が出ると教員の努力不足というよりシステムの欠陥でしょう。本年の学科選択では経済分析コースの第 1 志望がわずか 3 名でした。学生からは、「観光政策学科のコースは、必修が多く同じような科目ばかりでやっていることがかぶっており科目選択の自由度をあげてほしい」との意見が多く聞かれました。まずは必修を減らして、学生が感じている同じような観光専門科目を削減整理し、データサイエンス専門科目に変えていってコースの魅力を上げる必要があると考えます。

今回本科の学生を含めて観光政策学科全体の GPA がかなり上がったと学科長からは聞いています。コース間の定員に幅を持たせて、コミュニケーションコースは外国語教育、経済分析コースは TOEIC の要件を外してデータサイエンスに特化したコース作りをするのがいいのではないのでしょうか。

4) 長い目でカリキュラムの設計を考えるべきだと思います。応用がもちろん大事ですが、基礎がしっかり出来た上での応用が望ましいと思います。

5) 「非日常」を商品とする観光教育に必要なと思われる非経済学的な研究・教育テーマを専攻としている者として、「複数の教員が担当できる科目を残す」という前学部長のカリキュラム編成方針がかなり怖く感じます。例外を認めていただきたいです。

6) 観光政策学科の海外プロジェクト演習について、外国人の教員に任せるという風潮を、改めていただきたいです。

7) 個人的に学部・学科のカリキュラムに関して問題と感じていることはあまりありません。（不開講科目が増えていること、教員数が減っていること、女性教員のみしか採用できない

現状には問題があると思っています)

観光経済分析コースをデータサイエンス系のコース名に変更することには賛成です。ただ、コースの中身に関してはさほど変更する必要はないのではと思っています。

8) 2005年の観光政策学科の設立以降、2015年の学部再編時の観光政策学科本科の新設はあったが、設立当時から存続する従来のコース(観光コミュニケーション・観光経済分析)のカリキュラムがほとんど変わっていない。海外プロジェクト演習や上級年次用のプロジェクト演習(2A、2B)、新規採用になって教員が立ち上げた新規科目など、いくつかの授業が加わったが、カリキュラムの多くの部分が設立当時から変わってなく、インバウンド客の急増や高齢者を対象とした観光の需要、旅行業のデジタル化、コロナ禍でのアウトドアブームなど、その後の観光産業の変化に十分対応できていない。現実の社会に対応するため、開講科目の変更や、○つけの変更など、カリキュラムの抜本的な見直しが求められる。

9) 観光経済分析コースについて

「観光を科学する」という設立当時の目標は今でも重要であるが、観光に関する研究手法が設立当時から変わってきた。全学的にデータサイエンスやDX化が進められてきているので、この波に乗って改革することが望ましい。観光経済分析コースでは外部講師をお呼びしたZoomやWebexを使った勉強会を複数回開いており、DX化対応のための教員側の素地はある。ただし、DXやデータサイエンスに特化したカリキュラムは現在よりも高度な内容になり、学生の負担が大きくなるので、同時に語学要件の変更も行うことが現実的である。

10) 観光コミュニケーションコースについて

語学要件で卒業できない学生が増加したため、TOEIC対策の強化が求められている。

TOEIC600点を目指すための補講が考えられているが、学科会議ではさらに踏み込んだ案として、現行の海外プロジェクト演習の他に、もう一つ新たに海外語学研修の導入が挙げられている。具体的にはフィリピン語学研修がベースになっており、これを国際総合科学部の海外語学研修のように単位化する案であるが、国総とは異なり、選択科目での導入を想定している。なお、若手のTOEIC専門家の採用も希望する。

11) 他学科に比べ、観光政策学科はコース所属の学生の割合が高い。文科省がらみになるので現実的には難しいが、たとえば経営学科と職業会計人コースの割合(40/165)のように、適正な割合にコースの定員を再考できることが望ましい。

第4節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金 等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
経済学部	科研費獲得推進プロジェクト	講師への謝礼(図書券)	35	
計			35	

第5節 来年度の課題

1. 科研のFD研修を毎年実施しているが、昨年度までは、新規採択が1~2件と低迷していた。しかし、今年度(2023年度採択)は、複数の科研基盤研究(B)の採択も含め7~8件(今年度転出者1名を含む)と、昨年度までと比較し大幅に回復してきた感がある。この良い潮流を軌道に乗せるべく、今後一層のFD研修の充実が求められる。
2. 参考資料4で述べたように、今年度のFDは学部カリキュラムの課題等を学部の教員で共有することであったが、今後については、1. 学部全体のことでも、各学科の課題でも、すぐに解消できそうな比較的小さな課題・問題は、学部もしくは各学科において、話し合いを通じて速やかに解消することが望まれ、2. カリキュラムの大幅な見直しやコースの設置・改変等の比較的大きな課題については、学部においてワーキング等を設置し、来年度以降検討していくことが望まれる。

第7章 理学部のFD活動

第1節 授業公開

1.1 数理科学科のピア・レビュー

実施科目「数理科学発展セミナー」

1) 概要

①日時：令和4年11月7日（月）5・6時限（解析）、12月19日（月）3・4時限（幾何）
令和5年1月23日（月）3・4時限（代数）

②対象学生：数理科学科3年生（約50名）

③授業概要：本授業は、卒業研究の準備として3年次後期（4単位）に設けられており、代数・幾何・解析の3つの系別に分かれて行う「系別セミナー」と、指導教員毎に分かれて行う「個別セミナー」の2つのセミナーで構成されている。今回のレビュー対象は、系別セミナーである。代数系は、後期前半部分では90分間の試験と、試験問題の解答例のプレゼンテーションを交互に繰り返すという形で授業を行っており、後期後半部分ではTex講座と個別セミナーで学んだ内容に関する発表会を実施している。今回は発表会をレビュー対象としている。幾何系は、配布された幾何に関する資料や学生自らが興味のある数学的事柄を題材として、学生はそれらに関して発表を行い、教員と受講者で質疑・討論を行うという形式である。解析系は、事前に配布された演習問題について、指名された受講者がスライドを用いて発表を行い、その発表に対してすべての受講者に意見が求めるといった形式である。どの系別においても、学生が与えられた課題に関するプレゼンテーションを行い、他の受講者や教員が理解の浅い点や曖昧な点を指摘し議論することで理解を深めることを目的としている。また、プレゼンテーションの方法についても指導を行っている。

④授業担当教員：（代数）倉富 要輔、（幾何）只野 誉、（解析）廣澤 史彦

レビュアー：増本 誠、木内 功、宮澤 康行、中内 伸光、菊政 勲、幡谷 泰史、
大関 一秀、南出 真、塚本 真由

2) レビュー結果

レビューシートの評価欄には、「知識・理解」、「思考・判断」、「関心・意欲」、「技能・表現」、「態度」の観点から適切な指導が行われているかを5段階で評価されており、いずれの系別の担当者に対しても殆どの項目で「4」又は「5」の評価があり、効果的な授業が行われていることが確かめられた。

レビューシートの自由記述欄には以下のような記述があった。

【優れた点】

（解析系）：

- ・ 発表担当以外の学生も毎回必ずコメントを要求され、また他の回で発表担当になるため、

必然的に毎回能動的にセミナーに参加することになる。

- ・ 各教員がそれぞれ異なる視点でコメントをするため、教員が 1 名の通常のセミナーと比較し、学生は幅広い視点から発表の評価を受けることができる。
- ・ 個別指導では非効率な PowerPoint や Beamer に関する技術的な指導を、発表直後に発表者の資料を題材にすることによって、実践的かつ効率的に指導できる。
- ・ 学生からのコメントが予想以上に適切で教育的な配慮がなされたものだった。

(幾何系) :

- ・ 今回の授業は、自身の興味ある数学的事柄を題材に学生がプレゼンテーションを行う形式で実施された。学生は自分で選んだ題材について調査・研究した内容を理解しやすい表現で説明することに取り組んでいた。担当者からは発表後に内容に関する質問や補足説明等適切な指導がなされていた。発表後の質疑応答において活発な意見交換が行われるよう工夫がなされていた。発表者以外の学生も真剣に授業に参加している印象を受けた。時間的な制約があるので実現は難しいと思われるが、今回発表した学生は全員スライドを使用していたので、数式を扱うことに利便性のあるプレゼンテーションソフトの使い方・スライドの作成の仕方について事前に簡単にレクチャーすることができれば申し分ないと感じた。
- ・ 今回が、只野教員の担当部分の初回であったので、授業の最初に「評価の方法」が丁寧に説明され、この授業では何をすれば良いのかが、学生たちに伝わっていた。発表者は、各自が選んだ数学のテーマについて、プロジェクターシートを作成し、プレゼンテーションを行うという形態で、授業が進められていた。発表者の中には、配布資料を準備してきた熱心な学生もいた。教員は、発表者に適切なコメントを与え、また、質疑を行い、学生の理解を深める指導がなされていた。発表内容は、中には難しい内容もあったが、教員が補足のコメントを行って、聴いている学生たちの理解を促す工夫を行っていた。学生たちは、このような形態の授業で、自習で習得するには難しい経験や能力が身につくものと思われる。

(代数系) :

- ・ 今回の授業では、前期授業科目の「代数学」、後期授業科目の「代数学展開」の講義内容に十分触れられており、さらに発展的な内容が含まれていた。学生は良く学習していると思われる。
- ・ 各班の学生が、普段の発展セミナー個別ゼミの内容を基に、主体的に発表内容の構成を行い、一生懸命プレゼンを行っていた。1年後の卒論作成に向けて、普段のセミナーでは得がたい良い刺激になったと思われる。また、他研究室の教育・研究方法について知る良い機会であったと思われる。
- ・ 半数以上の学生が緊張をしながらも、自信を持って自身の班の研究を発表する姿が印象的であった。
- ・ 各スライドには、細かな表記ミスは時々見られたが、全体的に完成度の高い内容であった。
- ・ 時間通りに滞りなく進行していた。
- ・ 発表の中に現れた概念の例を問うなど、学生の理解を深める質問がなされていた。
- ・ 発表者の理解不足のところを的確にみつけ、自ら理解を促すような働きかけを行っていた。

た。

- ・ 発表者以外の参加者に質問等の発言を促していた。
- ・ 発表者だけではなく、運営についても役割分担することにより、参加意識の向上と発表会の運営の理解の向上を図っている。

【改善点】

(解析系) :

- ・ 学生のコメントは発表方法に関するものが主であり、数学的な記述の正確さに関するコメントはほぼ教員が行っている。今後は後者も学生間で行えることが望ましい。

(代数系) :

- ・ 学生間におけるコミュニケーションが少ないように感じた。
- ・ 学生は完成度の高い発表をしていた一方で、全体的に説明が早くなっていて時間が余ることが多くみられた。時間のペース配分について改善の余地があると思われる。また、初めて参加する数学の発表会だと思うので仕方が無いと思うが、運営(世話役)側の学生の対応にメリハリがあると良かった。
- ・ 多くの学生が発表(プレゼン)に不慣れなため、授業(発表会)後に各研究室でフィードバックの時間を設けるのも良いかもしれない。

1.2 物理・情報科学科のピア・レビュー

1.2.1 物理学コースのピアレビュー

実施科目 「物理学実験 II」 (前期)

1) 概要

- ① 日時：令和 4 年 7 月 12、19 日 (火) 12:50-16:00 理学部 2 号館 15 番講義室
- ② 対象学生：物理・情報科学科 物理コース 3 年生
- ③ 授業概要：物理学を専攻している学生を対象に行う実験の 2 番目に位置付けられる。実験を通して、いくつかの基礎的な物理的概念と物理学実験の方法を習得することを目標とする。学生はグループに別れ、複数の実験テーマの中から 1~2 テーマを選択し、時間をかけて実験を実施する。最後に発表会を実施し、グループ毎に結果を発表する機会を設けている。発表会で必要となる資料をまとめる作業を経験することでチームワークの大切さを理解し、実践できるようにすることが狙いの一つである。ピアレビューは、発表会の日に行われた。
- ④ 授業担当者：藤澤健太、新沼浩太郎、元木業人 レビュアー：堀川、齊藤
- ⑤ レビュー方法：授業に参加し、終了後、問題点や改善点等を担当者に口頭または文章で指摘する。

2) レビュー結果

- ・ 3 年生前期でまだ発表回数が多くなく、質疑応答などにも慣れていない時期のためか、学

生からの質問は少なかった。しかし、担当教員が TA や他の教員を指名してディスカッションを促しており、問題を改善しようとする工夫は見られた。

- ・ 回路製作など時間がかかるので授業時間的に厳しいとは思われるが、発表の事前 指導などでもう少し考察を深めてから発表できるとより良いと思う。
- ・ (既にされていると思いますが) レポートの考察部分の添削にて不足していた部分の事後指導が行われるとよい。
- ・ 全体としてはとても緊張感のある発表会であった。

1.2.2 情報科学コースのピアレビュー

実施科目 「データサイエンス技術演習」 (後期)

1) 概要

- ① 日時：令和 4 年 12 月 27 日 (火) 5~8 限 (12:50-16:00) 共通 21 教室
- ② 対象学生：物理・情報科学科 情報科学コース 2 年次
- ③ 授業概要：情報科学コースの実験・演習科目であり、計算機を利用した実習 (8 回) とその実習内容に関する発表会 (5 回) ならびにガイダンス (1 回) とまとめ (1 回) で構成される。今回のレビュー対象は実習内容に関する発表会であり、受講学生によるスライドを用いた発表を他の受講学生が質問し教員がその内容を総括していた。
- ④ 授業担当者：上田仁彦，小林泰良 レビュアー：西井，末竹，川村，韓，野崎
- ⑤ レビュー方法：レビュアーが授業に参加し，授業の良い点や改善すべき点を授業担当者に文章にて伝える。

2) レビュー結果

レビューの内容は授業方法について概ね肯定的なコメントが占めており，効果的な授業がなされていることが確かめられた。

改善点などは比較的軽微なものが多く，次年度以降に改善可能であると見込まれる。

授業担当者にフィードバックされたコメントは下記の通りである。

【良かったところ】

- ・ 教員はそれぞれの発表について、纏めてコメントするのは良かった。
- ・ 他の受験者は積極的に質問させるのは良かった。
- ・ 学生からの質問が積極的であったことが良かった。氏名を言わせて、カウントしていることで良い循環が得られていると考えられる。担当教員が学生のプレゼンを細部に亘り見て、内容およびプレゼン技法に関する適切なコメントを返していた。
- ・ 演習結果をスライド資料としてまとめ、人前でわかりやすく説明しようとする努力が伺えてよかった。プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を育成する上で重要な授業だと思った。
- ・ プレゼンテーションを聞いている側の学生が積極的に質問をしていた点がよかった。

- ・ 一人一人の発表の後に、教員が的確なコメントをしており、非常に教育効果の高い授業だと感じた。

【コメントとアドバイス】

- ・ 他の受験者からの質問について、発表者は答えられなかった、または回答が不足の場合は、教員から関連の内容について、補足説明を加えたいかがでしょうか。
- ・ 2年後期なので、プレゼン自体がはじめての学生が多いと思われる。実際、文字の大きさ、グラフの見せ方など問題が多いことが分かった。この授業の最初に、プレゼンの入門レベルの指導が必要だと思われる。
- ・ 教室（計算機室）が発表形式の授業を行うには不適切な部屋であったと思う。通常教室を使ったほうが良いように見えた。
- ・ 学生に相互採点をさせると、発表者へのフィードバックも多くなりますし、採点することで評価項目の確認にもなって良いかもしれません。
相互採点は、評価項目を書いた用紙を使っても良いですが、Moodle を利用すると便利ではと思います。
- ・ プレゼンの回だけ、通常の教室で行えば、スクリーンが見やすくなり、もっと効果的になるのでは？と思った。

1.3 化学科のピア・レビュー

実施科目「分析化学実験」

1) 概要

①日時・場所：令和4年12月20日（火）5～8時限、理学部本館4階

化学第1実験室（427室）

②対象学生：化学科 化学コース2年生（必修科目：39名）

③授業概要：「分析化学実験」は、化学科2年生の専門・選択必修科目である。化学を学んでいく上で必要となる分析化学に関して基礎的な実験操作を身につける。そのため、原則として1人で実験を行い、操作や器具の取り扱いについての一定の技術を身につけるべく反復して練習する。

当日の授業内容：2から3人のグループに分かれ、以下の実験を行う。

- ・ エチルバイオレット吸光光度法による陰イオン界面活性剤の分離・定量
- ・ 誘導結合プラズマ発光分光分析法による水道水中の金属イオンの一斉定量分析
- ・ イオン選択性電極法による飲料水中のフッ化物イオンの定量
- ・ クロロ錯体の生成を利用したニッケル(II)とコバルト(II)の分離・定量
- ・ 高速液体クロマトグラフィーによるカフェインの分離・定量

到達目標：以下のような目的を設定している。

- ・ JIS法に記載されている公的分析法を体験し、技術を習得する。
- ・ 様々な分析実験で用いられる器具の使い方を体験し、技術を習得する。
- ・ 最先端の分析機器の操作を体験し、その原理について理解する（考察事項）。

- ・ 実測されたそれぞれの物質の濃度について考察する（考察事項）。
- ・ 物質を分離するメカニズムについて理解する（考察事項）。

④授業担当教員 村上良子・安達健太・鈴木敦子

レビュアー 川俣 純・藤井 寛之・鈴木 康孝・谷 誠治

⑤レビューの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点についての意見を議論する

2) レビュー結果

レビュアーから以下のような意見が寄せられた。

1. 講義内容に関して

- ・ 低予算で充実した内容が提供されていると感じた。
- ・ 水や海水、飲料水など、身近なサンプルの分析は、興味を持って取り組めており良いと思う。発色した色も綺麗であり、実験を楽しんで行っているようだ。
- ・ 様々なテーマがあってよい。
- ・ 実験内容は高度で十分な学習が期待できると思う。

2. 授業の進め方に関して

- ・ 研究レベルの分析機器を併用し、レベルの高いデータ解析を実施している。
- ・ 教員が適切にアドバイス・指導できており学生たちの雰囲気も良い。
- ・ 各班のメンバーが協力して実験している。（特定の人たちが実験している訳ではない）

3. その他、改善点やよかった点など

- ・ 楽しんで実験をしているが、やや騒がしい。
- ・ 分液ロートの使用方法の指導が必要と思われる。
- ・ 女子学生の”爪”の長さが気になった。
- ・ 実験中は安全のため、常に保護メガネをすべきである。

1.4 生物学科のピア・レビュー

実施科目「生物学実験 III」

1) 概要

①日時：令和4年10月27日（木）5～10時限 理学部生物科学学生実験室

②対象学生：生物・化学科、生物学コース3年生（41名）

③授業の概要：生物学実験 III では、初回の講義で、安全ガイダンスの実施と、シラバスに従って実験内容や授業方針について説明を行い、授業の到達目標を伝えている。今年度は実験を実施するにあたり、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、理学部の授業ガイドラインを遵守し、履修者を半数の少人数にし、内容を短縮して実験を行った。具体的な対策としては、着席位置や間隔について十分に注意を払い、全員がマスクを着用し、実験室内の換気と実験台・器具のアルコール消毒や手洗いをを行った。

本実験の目標は、行動生態学のホットピックである動物のパーソナリティと行動シンドロームについて学習することである。実験の項目として、コクヌストモドキという小型の甲虫を用い、死にまね時間と歩行速度の計測を行った。そして、それぞれの行動形質が時間によって変化するか、また、これらの形質の間に相関（シンドローム）がみられるかを検討した。

④授業担当教員：小島 渉

レビュアー：三角修己，岩楯好昭（生物・化学科 生物学分野）

⑤レビューの方法：学生への実験手順説明や結果の解釈の解説などについて聞いていただき、終了後、指導方法について改善点などを文書で指摘していただく。

2) レビュー結果

授業に対して、レビュアーより以下の指摘をいただいた。

レビュアー 1

- ・ 学生実験という通常の講義とは異なる形態の授業においてどのように授業がなされていくのか大変興味深いピアレビューであった。座席の配置として6つの実験台に8名弱の学生が座って行われた。コロナ渦において、現在は収束しつつある状況ではあるが、学生の中に、プラスチックのパーティションが配置され、また各実験台には消毒用エタノールスプレーが用意してあり、感染対策は十分になされていたと言えるだろう。
- ・ まず当日の作業に取り掛かる前に、作業内容の説明をプロジェクターによるプレゼン映写と配布資料を見ながら、作業内容の説明がなされた。実験室は通常講義の教室よりも縦長で後ろの学生からプレゼン資料が見つらいもので、かつ教室には固定式のスクリーンが無いが、大きな携帯スクリーンに、大きな文字と図を多用した説明がなされ、その後の実験作業に取りかかるにあたって、十分な解説であったと言える。
- ・ プロジェクタ投影スクリーンを見るにあたって、天井からの吊り下がりの電源コンセントとコロナ対策のためのパーティションがじゃまになるのをどうにかできればなお良いだろう。しかし除外することはコロナが収束するまではどうしようもないかもしれない。
- ・ 実験においては、教員だけでなく TA がこまめに各グループの作業進行の様子を見回り、進行状況の把握に努めており、不安な部分は学生が質問する雰囲気を作っていた。
- ・ コクヌストモドキの死にマネ時間と歩行速度が相関するかというわかりやすい実験内容で、それが個体の個性の存在の有無と関連づくかという興味深い考察に結びつく、学生が興味を持ちやすいテーマが設定されていた。さらに、実験操作の中で役割のない学生がいないよう2人で実験を行うという、十分に実験材料が準備されていた。このため、受講学生は、手を休めて雑談等することなく実験操作にあたっていた。

レビュアー 2

- ・ 生物分野3年生を対象とした学生実験であり、コロナ対策に配慮しながら40名強が同時に参加した。学生の着席時には、実験に必要な器具や生物材料が実験卓上に準備され、実験のテキストも併せて配布され、円滑に実験内容の説明が始められた。
- ・ 説明中に学生の騒がしさはなく、教室最後尾でも教員の声をきちんと聞き取ることが出来た。実験室前方にスクリーンが準備され、スライドを用いて実験の主旨や作業上の注意点が説明された。しかし、実験台上に背の高い感染防止用のパーティションが設置されていたことから、着席位置によってはスクリーンの視認性が良くない学生もいた。但し、スライド内容がプリントで配布されていたため、本質的な問題ではなかった。教員の説明の内容や時間配分、話す速度は適切であった。
- ・ 基本的に2人一組となって、動物行動学のモデル生物であるコクヌストモドキを用いて、昆虫の行動シンドロームを検証するために、刺激に対する擬死時間と、歩行速度の関係

について複数の個体を用いて計測が行われた。学生は最初、小さな昆虫の扱いに苦戦していたが、やがて手際よく操作できるようになった。教員と TA が巡回し、適宜アドバイスを与えながら実験が行われた。実験中、学生は各自のスマホを用いて時間計測や動画撮影を行っていたが、これは学生実験用の最低限のストップウォッチや撮影機材などが学科で準備されていないためであり、学科としてこれら汎用される機材の整備を進める必要があると考えられた。

- ・ 実験作業の各段階を、組となった学生が相互に確認するやり方になっていたため、学習効果が保証されていて良かった。レビュー個人的には、最初に教員が指摘されていたように（カリキュラム編成上難しいが）、翌日ではなく時間の経った後日に、同一個体群を用いて同様の計測を行い、個体のパーソナリティを検証できると、行動生態学の面白さを実感できるのではないかと思った。

今年度から新たに取り入れた実験内容であったが、学生の反応も悪くないように見え、レビュー者からもおおむね好意的なコメントをいただけたことから、来年以降も継続して行いたい。その際、スクリーンの配置を変更するなど、視認性を確保するための工夫を行いたい。また、カリキュラム編成上可能であれば、1 週間以上測定間隔をあけるような実験デザインにすることを検討したい。

1.5 地球圏システム科学科のピア・レビュー

実施科目「技術者倫理」

1) 概要

①日時：令和 5 年 1 月 26 日（木） 16:10～17:40 第 15 講義室

②対象学生：地球圏システム科学科 2 年生（地域環境科学コース 2 年生必修：2 単位）

③授業の概要

今日では、科学技術の発展にともなって、技術的な成果が社会の発展に密接に関係している。一方で、技術の利用にともなう公害問題や技術の不適切な利用による事件・事故などの科学技術の発展の負の側面や、2011 年の東北地方太平洋沖地震などで見られた科学技術の過信による自然災害の深刻化などの問題も見られるようになった。本講義では、科学技術者、研究者が持つべき基本的な倫理観について解説し、説明責任、製造物責任、知的財産権、守秘義務について、具体的に事例を紹介しながら説明する。また、具体事例や仮想事例などについて、グループワーク、ディスカッションなどを行い、技術者の倫理観を自ら考えてもらう。

④授業担当教員：太田岳洋

レビュー者：阿部、大和田、川村、志村、辻、大橋

⑤レビューの方法：講義後に行う学生授業アンケート（無記名）とレビュー者によるコメント（授業観察カード記載）、授業研究会の開催

2) レビュー結果

① 授業技術に関して（声の大きさ、話の速度、野外教材・案内資料の利用）

マイクを使用しており、学生による発表は聞き取りやすかった、スライドの見づらさが懸念されたが教材の事前配布により対処されていた、学生がホワイトボードに書いた内容に教員が加筆しながら議論を進めてゆくのは良い工夫だと思った、等の意見がなされた。

② 授業内容・授業構成に関して（難易度・過不足など）

代表学生が意見を述べた後に重要な部分を繰り返して共有する・意図を尋ねる・適切な指摘をするなど即座にフィードバックがありとても効果的だと感じた、班ごとの討論を他学科の学生との混合にしているのは異なる視点での意見が出てくることが期待され良いと思った、事例を通して教訓を得る構成にしているのは素晴らしいと思った、グループでの話し合いについては班によって意見交換の密度に濃淡があり難しい問題と感じた、等の意見がなされた。

③ 授業の目標、達成度、理解度、満足度、内容に関して

毎週のレポート提出と翌週の返却・解説により、理解度の把握、繰り返し学習の効果も期待できそう、学生の意見は良好であり理解度・満足度は期待値に達しているのでは、グループとしては各自の理解度はそれなりに進んでいると思われるが、達成度はまちまちだと感じる、グループワークで各自の達成度を評価するのは難しいだろう、等の意見がなされた。

④ 学習活動、学生の参加度に関して（学生の質問など）

他の人との意見交換がきちんと機能しているように思えた、答えのない問題とはいえ難易度がやや高めであったため学生が真剣に取り組みやすい設定になっている、グループワーク主体なので講義に対する参加度は高かった、ただしリーダー的な役割を担う学生の資質には差があった、学生への質問とそれに対する別の学生の返答が機能しており対面形式において理想的な授業形態と感じた、等の意見がなされた。

⑤ 野外教育における注意点（講義との関係、安全教育など）

就職して何らかの立場になった時に思い出して欲しい授業だと感じた、技術者として専門性を高めること・自信を持って相手に説明する揺るぎない姿勢など技術者倫理の重要性を学生が感じたなら大成功、等の意見がなされた。

⑥ 学生の授業アンケートについて

各項目別の結果について以下に示す。また、これ以外の意見として、「自分たちの意見をもとに授業が進んでいくのが新鮮で面白かった」、「他の授業とひと味違って面白かった」、「グループ内 外との意見交換の場があって、様々な考えを知ることができてよかった」、「倫理というものがどのようなものなのかをしっかりと考えることができた」などの感想が述べられた。

1. 自分自信が考えるこの授業の学習達成度はどのくらいですか。

1. 30%未満 2. 30-50%未満 3. 50-70%未満 4. 70-90%未満 5. 90%以上
3. → 5人 (14%) 4. → 19人 (53%) 5. → 12人 (33%)

2. この授業の内容に興味をもてましたか。

1. もてなかった 2. 少しだけ持てた 3. どちらともいえない
4. もてた 5. 非常に持てた

1. → 1人 (3%) 2. → 3人 (8%) 4. → 18人 (50%) 5. → 14人 (39%)

3. 話し方はききとりやすかったですか。 1. はい 2. いいえ

1. → 36人 (100%)
4. 黒板の字やプロジェクターの字は読みやすかったですか。
1. はい 2. いいえ
1. → 32人 (88%) 2. → 4人 (11%)
5. 教え方(説明の仕方)はわかりやすかったですか。 1. はい 2. いいえ
1. → 36人 (100%)
6. 質問をする時間は十分与えられましたか。 1. はい 2. いいえ
1. → 35人 (97%) 2. → 1人 (3%)
7. 質問、疑問に対して適切な対応がなされましたか。
1. はい 2. いいえ 3. 該当事項なし
1. → 34人 (94%) 3. → 2人 (6%)

3) 授業研究会

日時：令和5年2月20日(月) 16:00～16:40

出席者：阿部、大和田、坂口、太田、川村、斎藤、志村、辻、大橋

研究会概要：

学生アンケートと授業観察者によるコメント(授業観察カード)をもとに授業研究会を開催し、意見交換を行った。特に、学生の積極性を高めるための授業構成上の工夫、ディスカッションにおける工夫、学生からコメントや質問を引き出すためのコツについて事例紹介がなされた。また、本授業のようなグループ・ディスカッションは他の講義ではほとんど行われていないこと、その一方で学生は他者の意見を聞ける場を求めていると思われることが共有されるなど、有意義な意見交換の場となった。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

(1) 第1回教育改善FD研修会

「山口大学の教学IR -2022年度卒業生調査の結果報告」

主催 教学マネジメント室

日程 令和5年2月15日(水) 12:00～12:45 およびMoodleによる動画視聴

講師 岩野摩耶 講師(教学マネジメント室)

参加者 理学部からの参加人数：50名

内容

FD研修会は、以下の4つの項目から構成された内容であった。

1. 教学マネジメント指針と教学IR
2. 山口大学におけるアセスメントプラン
3. 卒業生調査の分析

4. 次年度以降の教育改善 FD 研修会

<項目 1> 教学マネジメント指針の概要について、説明がなされた。

教学マネジメント：大学がその教育目的を達成するために行う管理運営であり、大学の内部質保証の確立にも密接に関わる。

教学マネジメントの視点：予測困難な時代を生き抜く自律的な学修者を育成するためには、学修者本位の教育への転換が必要である。学修者本位の教育の実現のためには大学の時間構造を「供給者目線」から「学修者目線」へ転換するという視点が特に重視される。

これに向け、3つのポリシーである「卒業認定・学位授与の方針」(DP)、「教育課程編成・実施の方針」(CP)、「入学者受け入の方針」(AP)の一貫性を確認する。また、アセスメントプランを策定してFDとSDの実施により点検し、教育改革・改善を推進するための教学IRを推進する。

教学マネジメント指針には以下の5の柱があるが、特にI～IIIが重要である。

- ・ I 「三つの方針」を通じた学修目標の具体化
- ・ II 授業科目・教育課程の編成・実施
- ・ III 学修成果・教育成果の把握・可視化
- ・ IV 教学マネジメントを支える基盤 (FD、SD、教学IR)
- ・ V 情報公表

<項目 2> 山口大学におけるアセスメントプランについて、説明がなされた。

調査には、学修実態に関するアンケート(在学生調査)、学修成果に関するアンケート(卒業・修了時調査)、卒業・修了後のキャリア形成に関するアンケート(卒業生調査)、山口大学出身者の就職先アンケート(企業向け調査)、学生授業評価アンケート、教員自己評価アンケートがある。

<項目 3> 卒業生アンケート調査の分析結果について、説明がなされた。

目的：本学の卒業生の就業状況、在学中・就業のステージでの変化を把握する。また、本学での経験や学習成果及び本学に対する意見を伺い、今後の教育改善に活用する。

対象：卒業後3年以上経過した学部及び研究科の卒業生(2019年3月以前に卒業した学部及び研究科の卒業生。学部卒1258名、大学院卒523名)。

なお、所属別回収状況では、理学部卒業生のアンケート回収率が他学部に比べて最も高かった。

アンケート内容：志望順位、卒業満足度、就職状況、教育や学生生活における経験等の満足度、知識・能力到達度。

<項目 4> 次年度以降の教育改善 FD 研修会について、説明がなされた。

教学IRの活用のため、各種調査(在学生・卒業時・卒業生)の結果報告を実施予定。

コメント

当日出席できない教員がいるため、「Moodleによる動画視聴」の方法が併用されたのは良かった。次年度以降もこのような方法での開催を積極的に検討して頂きたい。

(2) 第2回教育改善FD研修会

「山口大学におけるDP策定方針 -2022年度認証評価を受けて」

主催 教学マネジメント室

日程 令和5年3月8日(水) 12:00~12:45 およびMoodleによる動画視聴

講師 岩野摩耶 講師(教学マネジメント室)

参加者 理学部からの参加人数: 25名

内容

FD研修会は、以下の4つの項目から構成された内容であった。

1. 3つのポリシーについて
2. 山口大学のスケジュール(認証評価事前相談等を経て)
3. 第1フェーズの具体的な内容
4. 第2フェーズについて

<項目1> 3つのポリシーに基づく大学教育改革の実現に関するイメージ(案)が説明された。その際、3つのポリシーの策定単位レベルの内部質保証のためのPDCAサイクルが示された。また、他大学のカリキュラムツリーとカリキュラムマップの例が示された。続いて、DPと学修成果の関係、ディプロマサプリメントについて説明がなされた。

<項目2~4> 山口大学のスケジュールについて、第1フェーズ(全学DP再整理、全学CP策定、認証評価事前相談指摘への対応)、第2フェーズ(全学DP・CP策定、全学アセスメントプランの策定、各学部等のDP・CP、アセスメントプラン見直しなど)について説明がなされた。

第3節 教育改善に関する活動

3.1 理学部専門教育へのデータサイエンス系科目の導入

令和4年度から、2年次に開設する理学部、工学部、農学部の共通科目としてデータサイエンス技術(2単位必修)とデータサイエンス技術演習(2単位必修)が導入された。全学で共通に設定している授業レベルや内容を確認しながら、授業内容等の擦り合わせを各学科の授業担当者間で行っている。

3.2 e-ラーニングを積極的に利用した教育の取り組み

(1) 数理科学科におけるe-ラーニングの活用事例

本年度、数理科学科では以下の科目で e-ラーニングを活用した。

授業科目名：数理科学入門セミナー

対象学生：数理科学科 1 年生（約 55 名）

活用方法：この授業では授業外学習時間の増加を狙って e-ラーニングの活用を行っている。内容は高校レベルの数学の復習ができる内容の宿題を一定回数課すという形式である。成績の 1 割を e-ラーニングのテストの成績で評価している。多くの受講生は意欲的に取り組んでいて、自学自習をする上で有効であったと考えられる。

授業科目名：数理科学基礎セミナー

対象学生：数理科学科 2 年生（約 55 名）

活用方法：この授業では、学生の自学自習の定着を促すため e-ラーニングを活用している。内容は 1 次年次の復習及び、2 年次の専門科目で履修をしている微分積分学や線型代数学の内容の問題を解答させるというものである。e-ラーニングの小テストは成績評価に加えおり、多くの受講生が e-ラーニングを積極的に活用し、自習に役立てている。一方で、1 年次の数理科学入門セミナーと比べると意識の低い学生が若干多いように思われる。そのような学生への対応が今後の課題として挙げられる。

（２）物理・情報科学科における e-ラーニングの活用事例

これまで物理・情報科学科では、下記の授業において、学生の理解度向上のために e-learning システムを活用してきた。

「物理と情報のための基礎数学 I」

「物理と情報のための基礎数学 II」

「物理と情報のための応用数学 II」

「ロジカルシンキング」

「計算モデル論 I」

「計算モデル論演習 I」

「計算モデル論 II」

「計算モデル論演習 II」

「数値解析」

「プログラミング演習 I」

「確率論」

「情報ネットワーク」

「論理学」

「情報科学概論」

「電磁気学」

「連続体物理学」

「統計力学 I」

「相対論」
「データ構造とアルゴリズム」
「形式言語とオートマトン」
「データサイエンス実習」
「情報理論 I」
「情報理論 II」

特に、2020 年度において新型コロナウイルスの影響によって、多くの座学系講義においてビデオ教材等が整備された。2022 年度では、授業は主に対面形式で実施されたが、遠隔授業のために開発したビデオ教材等は引き続き視聴できるようにしたため、学生の反復学習を促進することができた。また、これまで従来対面で行っていた演習やレポート提出、および教員からの回答などを Moodle を通して実施したことで、学生の取り組み方がより可視化され、課題提出や採点に関する学生-教員間、教員-TA 間の情報伝達をよりスムーズに行うことができた。

また、本学科ではプログラミング課題のダウンロード、プログラムの作成・実行、課題提出、プログラムの自動採点を行える e-learning システムを構築しており、今年度もこのシステムを利用した Python および機械学習の学習教材開発を実施し、演習科目で活用した。各種ビデオ教材の作成は大きな労力を伴うものであったが、教員側の e-learning 整備に関する技術が大きく向上しており、今後の講義においても継続して活用できる教材が整備できたと思われる。今後はこれを活用して教員側の教育コストの抑制を図りつつ、適宜教材の保守・改訂を行なっていく予定である。

3.3 学力別クラス編成などの導入

物理・情報科学科では、「低年次導入教育の改革」の取り組みとして、平成 23 年度に 4 つの授業で学力別クラス編成授業を試行した。その結果に基づいて、平成 24 年度には、1 年生、2 年生の 5 つの必修科目で学力別クラス編成を本格導入した。その後、学力別クラス編成の改編を行い、平成 27 年度以降は、「物理と情報のための基礎数学 I、II、III」、および「力学 I」において、学生の学力に応じた授業を行っている。ただし、いずれの授業においても、学力別クラスに関係なく期末試験には同じ問題を使用し、単位修得の基準も統一することで、評価に不公平はないようにしている。今年度も引き続き学力別クラス編成により授業を実施しており、学力別クラス編成が定着していると言える。今後も引き続き、学生の習熟度を確認しながら、授業の実施方法を柔軟に改善していく予定である。

3.4 少人数クラスの導入・継続

地球圏システム科学科では、2017 年度より必修科目「地学英語」の担当教員を 2 名体制とし、履修者を 2 クラスに分けた少人数クラスを試行してきた。2023 年度に授業担当者が交代するにあたり、今後も教員 2 名体制を続けるのか、英語の基礎学力によるクラス分けが必要か、2022 年度入試から入試科目に英語が課されたので学力が上がっているのではないかと、

などの意見が出た。これについて教育改善ワーキンググループで検討し、検討結果を学科に返答することになった。ワーキンググループでは、はじめに、2017年度に2クラス・教員2名体制に改革した経緯の説明と、2017～2019年度の地学英語の実施状況等について担当者から説明があった。続いて、2020～2022年度の地学英語の実施状況等について担当者から説明があった。それぞれの年度の状況の長所短所等について情報共有をした。さらに、現在の1年生～4年生について、2022年11月現在のTOEICスコアと得点頻度分布について説明がなされた。また、2022年度英語入試について、入試種類別の得点頻度分布について説明がなされた。その結果、(1)2022年度入学者の英語学力は、過年度生に比べて優れているわけではないこと、(2)入試およびTOEICの得点は、上位と下位でかなりの開きがあることが確認された。加えて、「地学英語は、かなり昔は、専門分野別に4人態勢でやっていた」、「オムニバス+主任教員形式にしてはどうか」などの意見も出た。検討の結果、地学英語の今後の体制については、「2クラス体制の教育効果を鑑みてこれを維持する。教育内容は担当教員の裁量で工夫する」という案を学科会議に提案し、承認された。

3.5 実習・演習・実験などで教育改善に関連する取り組み

3.5.1 物理学コースでの取り組み

物理学コースにおいては、2021年度入学者からカリキュラムを変更している。それに伴い、2022年度より理工農共通の科目としてデータサイエンス技術 I/II が開講され、物理学コース実験科目の再編も行われた。4つの新実験科目(基礎物理学実験、物理データサイエンス技術演習 I、物理学実験 I、物理学実験 II)の現状、およびデータサイエンス技術 I との関係性について確認を行い、実験科目全体を通じた教育指導方針についての検討を行った。以下、検討の結果について報告する。

1. データサイエンス科目の現状の確認

まず、教育指導方針の検討にあたって、データサイエンス技術 I, II で行われている講義内容と物理コース実験科目との関係性について確認を行った。

- データサイエンス技術 I/II について

データサイエンス技術 I で統計学、同 II では機械学習に関する講義が行われている理工農共通の科目である。その後の各専門コースのやり方に合わせた内容で演習へ移行する。当コースでは、「物理」データサイエンス技術演習が相当する。現状ではデータサイエンス技術 I における統計学の入門知識が、一連の物理学実験のデータ処理に関わる内容となっている。

- 関連科目の開講順について

関連科目の開講順は以下のとおりである：

0. 物理と情報のための基礎数学 I (統計学): 1 年前期
1. 基礎物理学実験: 1 年後期

2. データサイエンス技術 I/II: 2 年前期
 3. 物理データサイエンス技術演習(旧: 物理学実験 I): 2 年後期
 4. 物理学実験 I (旧物理学実験 II): 3 年前期
 5. 物理学実験 II (旧物理学実験 III): 3 年後期
- (*0 についてはデータサイエンス教育科目ではないが、統計学を扱っている)

以上のように半期ごとに連続的に開講されており、反復すべき学習内容、ステップアップしながら習得すべき知識の設定を適切に行うことで、連続した教育カリキュラムとして効果を高めることが期待できる。

2. 物理学実験において教育すべき「データサイエンス」の定義

「データサイエンス」の中でもどのような側面を物理学実験で教育すべきか、以下のよう
に定めることとした:

- 原理的に物理を理解するための正しいデータの取り扱い(統計学)を重視する。
- 大量のデータから誤差や物理モデルを推定するいわゆるビッグデータを用いたサイエ
ンス手法については研究室配属後の実践の中で教育する。

3. 問題提起と議論

現状の講義内容と実験科目との間のあるギャップについて、問題提起と議論を行った。
提起された問題点は、以下のとおりである:

- 純粋な統計学と実験結果の統計と本質的違い
- 実験における誤差の取り扱い
- 物理的モデルの有無によるデータ取り扱いの違い
- ノギスやマイクロメータ等の副尺の必然性: デジタル測定器が主流となり、ばらつ
きから誤差評価する方が現実的である。しかし、誤差に関して原理的な理解をする
上では教育上の意味があるのではないか。

4. 今後の方針/課題

以上をもとに、今後の方針と課題について検討を行った。

● データサイエンス技術 I の講義内容更新について

実験データの解析を意識した内容、例えば誤差評価等を含めるべきか検討を行ったが、
以下のような2つの意見が出ており、継続して検討を行っている。

- どちらも基礎物理学実験の具体例を経験してはいるので繋がりが良い。
- 各実験でも適宜説明しているが、実際に用いる場面で説明するのが一番効率的では
ないか。反復学習として意味があるかを検討する必要がある。

● 学生に対する意識づけ

学生に対して4つの実験科目の相互関係や連続性を意識づける必要があるとの意見が出
された。

- 個別の実験科目の内容と指導方針

データサイエンス技術Ⅰと実験科目間の相互関係をふまえ、個別の実験科目の内容と指導方針について決定した。

- 実験間の打ち合わせは定期的に実施

さらに以下のように継続で議論すべき内容が複数存在するため、打ち合わせを定期的実施することが決められた。

- 装置の老朽化に伴う実験テーマの更新準備
- データサイエンス講義の最適化に合わせた学習効果の確認
- 学生の傾向と経年変化に関する意識共有
- 指導方針のすり合わせ(一貫性の担保)

3.5.2 情報科学コースでの取り組み

情報科学コースにおいては、2021年度入学者からカリキュラムを変更している。2022年度においては、従来実施していた「情報科学基礎実習」を「データサイエンス技術演習」に変更し、実習内容もデータサイエンス関連のものを多く取り入れることとなった。2023年度においても、それまで開講していた「計算モデル論演習Ⅰ」と「計算モデル論演習Ⅱ」を「マルチメディア処理演習」と「データサイエンス実践」に刷新し実施の予定である。また、2022年度より開講された「情報専門英語」については、所属する研究室でそれぞれ実施することによって、少人数クラスによるきめの細かい指導が実現できた。

3.6 地球圏システム科学科における、野外調査修得項目の達

成度自己評価の集計

地球圏システム科学科では、2022年2月から、野外地質調査の修得項目について学生による達成度自己評価をデータで回収できるよう、修学支援システムを用いた自動化を進めている。このデータの解析作業について教育改善ワーキンググループで検討した結果、年度進行での学生の達成度(ポイント)変化をエクセルで解析できるひな型を作成することとなり、2023年3月に完成した。今後このひな形を使用して各学生の成長やカリキュラム上のウィークポイントなどを分担して解析する事になった。

3.7 学生授業評価

2022年度に理学部で開設している専門科目のうち、特別研究やセミナーのような科目や、履修者が極端に少ない科目などは授業評価科目の対象外とし、修学支援システムを通じて授業終了後などに学生授業評価アンケートを取っている。評価結果は各教員が修学支援システムを通じて閲覧し、次年度の授業改善などに利用している。

3.8 成績分布共有システムの利用

成績分布共有システムを利用し、各学科において成績評価が正常に行われているか、相互チェックを行っている。令和3年度の調査結果では、1) 特別研究や文献購読のように時間割に時間指定のない科目や実験科目では優が多数を占める傾向が見られた、2) コロナ対応により試験の代わりにレポートでの評価とした科目については、例年に比べて秀や優が多くなる傾向がみられた、3) 二峰性（中間的な成績の者が少なく、高得点取得者と低得点取得者が多い）が見られた、という意見もあったが、特に大きな問題はないという意見が大半であった。これらを踏まえ、令和4年度に関して成績分布共有システムを使って確認したところ、特段の問題は見られなかった。なるべく正規分布になるように評価の方法を検討し、試験問題の作成の仕方を工夫している教員が増えていることが反映されていると思われる。

第4節 FD実施経費報告書

今年度は理学部ではFD実施経費を使用していない。

第5節 来年度の課題

講義室では収容定員まで収容可となり、コロナ禍前のように対面で授業が実施できるようになる。昨年度までのコロナ禍に関する問題は大幅に解決されることになるが、理学部では実験科目や実習科目が多いため、感染防止対策を引き続き徹底することになっている。また、WebexやMoodleなどのツールを使ったオンライン形式などによる授業ノウハウも蓄積されているため、有効活用したい。

配慮を必要とする学生がいるため、サポート体制を整えていきたい。

第8章 医学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 医学科

実施なし

2. 保健学科

実施なし

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 医学科

医学科主導FD研修会

(1) CBT問題ブラッシュアップ講習会及びワークショップ

- 1) テーマ：CBT問題ブラッシュアップ講習会及びワークショップ
- 2) 開催日時：令和4年4月8日（金）17:00～19:00
- 3) 実施時間/回数：合計2.00時間 2.00時間/1回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1人 聴衆者：43人
- 8) 講演1：CBT作問について
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：2.00時間
- 11) 主な内容：CBT作問ブラッシュアップに関する説明とワークショップ

(2) 医学科新任教員オリエンテーション

- 1) テーマ：新任教員オリエンテーション ～今、求められる医学教育とは！～
- 2) 開催日時：令和4年6月21日（火）17:00-18:00
- 3) 実施時間/回数：合計1.00時間 1.00時間/1回
- 4) 主催者：医学教育センター
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：3人 聴衆者：14人
- 8) 講演1：山口大学の医学教育について
講演2：CBT, OSCEについて

講演 3 : eyume の操作説明

- 9) 演者/専門 : 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間 : 1.00 時間
- 11) 主な内容 : 医学教育に関する講演

(3) 臨床実習入門実施担当者講習会

- 1) テーマ : 臨床実習入門実施についての説明会
- 2) 開催日時 : 令和 4 年 7 月 22 日 (金) 17:00~18:00
- 3) 実施時間/回数 : 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回
- 4) 主催者 : 医学部長
- 5) 開催場所 : 学内
- 6) 企画立案者 : 医学教育センター
- 7) 講演出席者 : 講演者 : 1 人 聴衆者 : 24 人
- 8) 講演 1 : 臨床実習入門について
- 9) 演者/専門 : 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間 : 1.00 時間
- 11) 主な内容 : 臨床実習入門ユニットの実施について

(4) プレ臨床実習テュートリアルチューター講習会

- 1) テーマ : プレ臨床実習テュートリアル実施についての説明会
- 2) 開催日時 : 令和 4 年 11 月 21 日 (月) 17:30~18:00
- 3) 実施時間/回数 : 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回
- 4) 主催者 : 医学部長
- 5) 開催場所 : 学内
- 6) 企画立案者 : 医学教育センター
- 7) 講演出席者 : 講演者 : 1 人 聴衆者 : 12 人
- 8) 講演 1 : プレ臨床実習テュートリアルの実施について
- 9) 演者/専門 : 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間 : 2.00 時間
- 11) 主な内容 : 臨床実習入門ユニットの実施方法について

(5) 医学科教員研修会

- 1) テーマ : 「頑張っても結果が出ない医学生」を発達障害・記憶のメカニズムから考える
- 2) 開催日時 : 令和 4 年 11 月 1 日 (火) 17:30~18:30
- 3) 実施時間/回数 : 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回
- 4) 主催者 : 医学教育センター
- 5) 開催場所 : 学内
- 6) 企画立案者 : 医学教育センター
- 7) 講演出席者 : 講演者 : 1 人 聴衆者 : 26 人 (教職員)
- 8) 講演 : 「頑張っても結果が出ない医学生」を発達障害・記憶のメカニズムから考える
- 9) 演者/専門 : 学内教員/医学教育

1 0) 講演時間： 1.00 時間

1 1) 主な内容： 医学教育について発達障害・記憶のメカニズムから考える

(6) シラバス講習会

1) テーマ： 医学科 シラバス説明会

2) 開催日時： 令和4年12月16日(金) 17:00~18:00

3) 実施時間/回数： 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回

4) 主催者： 医学部長

5) 開催場所： 学内

6) 企画立案者： 医学教育センター

7) 講演出席者： 講演者： 1 人 教員 41 人

8) 講演 1： シラバスの更新について

9) 演者/専門： 学内教員/医学教育

1 0) 講演時間： 1.00 時間

1 1) 主な内容： 医学部シラバス(e-YUME)の更新について
ユニット責任者及びシラバス担当者への講習会

(7) CBT 試験問題作成講習会

1) テーマ： CBT 試験問題の作問

2) 開催日時： 令和5年3月3日(金) 17:00~18:00

3) 実施時間/回数： 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回

4) 主催者： 医学部長

5) 開催場所： 学内

6) 企画立案者： 医学教育センター

7) 講演出席者： 講演者： 1 人 聴衆者： 37 人

8) 講演 1： CBT 作問について

9) 演者/専門： 学内教員/医学教育

1 0) 講演時間： 1.00 時間

1 1) 主な内容： CBT 作問に関する説明

2. 保健学科

保健学科主導 FD 研修会

(1) 第 1 回保健学科 FD 研修会

開催日時： 令和4年12月7日(水) 16:00~16:40

内容： 第 2 回保健学科研究棟火災訓練

参加者： 39 名(学生・教職員・自衛消防隊・防災センター・警備員等)

事前説明会を 11 月 30 日に役割担当者を中心に実施した。

当日の実施内容

宇部中央消防署に訓練実施を届出、保健学科において学部学生・院生・教職員を対象とした防火教育・訓練の自主訓練として、通常時（平日の昼間）に保健学科第2研究棟3階のラウンジから出火したという想定で、通報連絡・初期消火・避難誘導の訓練を実施した。

- 16:01 訓練火災発生（第2研究棟3階ラウンジの感知器作動）
火災発見（第一発見者）、非常ベル作動
- 16:03 非常放送、避難開始（研究棟）
防火戸が閉まる（第2研究棟3階中央階段）・感知器により作動
- 16:03 地区隊本部立ち上げ（研究棟）、地区隊本部へ出火通報
地区隊長より初期消火・応急救護所設置の指示
初期消火（消火器）開始
- 16:05 初期消火失敗、初期消火失敗の連絡（第一発見者）、初期消火班の到着
- 16:06 地区隊長より避難誘導班長に避難指示
全員避難
学生避難誘導、第2研究棟避難完了確認
- 16:12 応急救護班による負傷者応急手当
研究棟玄関前（玄関ホール）に避難誘導
- 16:12 避難完了者の点呼完了、避難完了報告
- 16:16 （館内放送）訓練火災鎮火、初期消火・避難訓練終了
- 16:18 消火器の使い方訓練
- 16:23 訓練終了
- 16:24 地区隊長挨拶、防火防災管理者講評

サポーター 管理運営課 山田 博司 特命専門職員
コーディネーター FD 委員 下川・村上

アンケート結果（回収数27）

1. 所属

看護学専攻（20） 検査技術科学専攻（7）

2. 保健学科研究棟火災訓練について教えてください

有意義だった（10） まあまあ有意義だった（11） 普通（5） あまり意義がなかった（1）

3. 適切に行動することができましたか？

できた（10） ある程度できた（17）

4. 時間をかけずに行動することができましたか？

できた（16） ある程度できた（10） あまりできなかった（1）

5. シナリオ想定外のものが発生しても臨機応変に対応できましたか？

ある程度できた（4） 想定外のことはなかった（23）

〈シナリオ想定外のことが起こった方に質問です。想定外の出来事の内容とその対応について教えて下さい〉

5-1 どのようなことが起こりましたか？

- ・時間がかかりすぎた。外で待機がエントランスで待機
- ・救護班が連絡場所を間違えた。
- ・火災発見後に通報する際、防災センターに何度電話しても通じない。
- ・護送者の援助

- 5-2 どのように対応されましたか？
- ・指示に従った。
 - ・すぐに探し出し、適切な場所へと誘導した。
 - ・通じるまで何度も電話し続けました。
 - ・「助けてください」とのことでしたので、援助しながら避難した
6. 消火器の取り扱い
操作できる (23) どちらともいえない (4)
7. 訓練時間
長かった (1) 適切だった (24) 短かった (1) どちらともいえない (1)
8. 今回の訓練は、今後役に立つと思いますか？
思う (25) 思わない (2)
9. 火災発生から避難完了までについて知りたい内容があればお聞かせください
・訓練では役割を決めていたが、実際の火災では今回と同様の役割が割り当てられるのか。
10. 訓練に対するご意見がありましたらお聞かせください
- ・これまで消火器を設置場所から取り出す・直に持つなどの経験がなかったため、消火器などの取り扱いなどについて事前に確認できる機会など少し設けて頂けたらと思いました。
 - ・本気でやるならなるべく全員が参加できるようにすべきだと思う。毎年水曜日に行っていると水曜日に会議の人はずっとできないと思う。
 - ・残留者確認の方法を検討すべきであると思う。
 - ・救急箱の物品を再考すべきだと思う。
 - ・事前説明が曖昧なままの説明が多く分かりにくかったです。
 - ・初めて参加したが、とても有意義でした。個室にいると外の様子が分かりにくいので、今回のような避難訓練をおくと、火災だけでなく、地震などの緊急時の避難もしやすくなったと感じた。皆が声をかけあい、分業して早く避難できたことが良かった。
 - ・防火扉がどのように作動するのか、中央階段を使用して避難するのは大丈夫なのかの2点が気になった。
 - ・昨年聞こえなかった放送はしっかりと聞こえるということがわかり、安心しました。大変お疲れさまでした。

(2) 第2回保健学科FD研修会

開催日時：令和4年2月22日(水) 13:30~14:00

開催場所：HD1-1 講義室

講師：野垣宏 専攻長・学科長

内容：パワーハラスメント防止に向けて

参加者：33名(教職員)

2019、2020、2022年に続いて4回目の開催となる。今回は、ハラスメントの種類と概要、ハラスメントにはどのようなものがあるのか、パワーハラスメントの行為類型の具体例、山口大学における令和2、3年度の件数について示された。

第3節 教育改善に関する活動

1. 医学科

(1) 学生授業評価・教員授業自己評価

医学科では、平成30年4月より、学生がeYUMEを使用して入力した診療科（部）ごとの臨床実習評価結果を、即時に該当診療科に所属する全ての教員が閲覧可能とし、診療科の教員は、次のクールでの臨床実習の参考にし、より質の高い臨床実習の実施に活用しているところである。

更に、平成31年4月より、ユニット毎に設定した山口大学独自の“到達目標”により、学生はユニット終了後に、“到達目標”をどの程度身に付けることができたかをeYUME上で自己評価する取り組みを開始した（紙媒体のユニット学生振り返り評価票は廃止）。ユニット責任者及びシラバス責任者はその結果を閲覧することができ、形成的評価を行うと同時に、次回のユニットの向上に活用することが可能となる。ユニットの1つである「医療概論・倫理序説」の到達目標は以下のとおり（図1）。

目標
1.主題
1.医学・医療の倫理問題全般を理解する。 2.医学・医療の各領域の倫理問題に対する現在の考え方や解決のあり方について理解する。 3.医療概論全般について理解する。
2.到達目標
1.医療倫理の歴史的な流れを概説できる。 2.臨床倫理の歴史的な流れを概説できる。 3.患者の基本的権利を概説できる。 4.患者の自己決定権を概説できる。 5.臨床諸領域における代表的な倫理問題を概説できる。 6.倫理問題に対する解決法を4分割表を用いて概説できる。 7.キャリア形成のあり方について概説できる。

図1 「医療概論・倫理序説」の到達目標

(2) 医学教育分野別評価の受審

令和元年10月28日～11月1日に、日本医学教育評価機構による評価を受審し、令和2年8月から国際基準教育校として認定された。今後は令和8年度の再受審に向けて様々な教育改善に関する活動を実施中である。

(3) 学修成果基盤型教育の推進

平成27年度の医学科カリキュラム・ポリシー作成より、学修成果基盤型教育を推進してきた。令和3年度も「医学教育モデル・コア・コンピテンシーに基づくカリキュラム強化策」により、学修成

果基盤型教育を更に推進している。さらに令和4年度には「令和4年度版医学教育モデルコアカリ」が公表されたため、変更点や新規点を確認作業中であり、令和5年から6年にかけて医学科教育カリキュラムに反映させる予定である。

(4) マイルストーンとしての到達目標の充実

平成31年4月より、学修成果基盤型教育の充実と学修成果の確認のため、医学専門群別にマイルストーン(図2)として到達目標を設定し、その周知や強化を引続き行ってきた。

	医学専門1群	医学専門2群	医学専門3群	医学専門4群-V群
群の特徴	医学・医療の基礎となる基礎医学を、細胞・系統等に編みこまれた「コース・ユニット制」に基づき、カリキュラムの中で学修する。講義、実習、少人数グループ学習等を行う。医学・医療の基礎となる基礎医学知識を身に付ける。	基礎医学から臨床医学への発展的段階として、社会医学や臨床医学総論を含めた知識の体系的統合を行う。また研究活動を通じて科学的探求力と自己開発力の醸成を行う。	細胞・遺伝的に編みこまれたメソッド講義により臨床医学各論を体系的に学ぶとともに、医療法学、医療安全、多職種連携、基本的臨床技能を学習し、臨床実習前段階としての基本的能力を身に付ける。	医学部附属病院、教育関連病院や地域の医療機関での診療参加型臨床実習を通じて、知識・技能・態度など医師として求められる能力の磨きと醸成を図る。
DP1: 医療基盤力	基礎	基礎	発展	応用
DP1: 医療基盤力	生命現象の基本、人体の基本的構造と機能。分子細胞生化学等の基礎医学知識や、診療の基礎となる臨床病理学知識を有し、発症を診察して問題解決に応用することができる。	基礎医学知識の学習を進めるとともに、基礎医学の進歩段階として統合医学アプローチ等の教育を通じて知識の体系的統合を行い、問題解決に応用できる。	基礎医学と社会医学の知識を基盤として、臨床医学を体系的に学習することで、疾病について総合的に理解し、病態や病機を理解し臨床推論に応用することができる。	診療参加型臨床実習を通じ、学修した基礎医学・臨床医学知識を応用し、臨床推論的・基本的診療技能などを実践できる。
DP2: 地域・国際対応力	地域・保健・医療・福祉・介護に関する社会医学知識を身に付けている。	高度自己学習コースや社会医学活動を通じて、地域や国際医療に関する知識を有し、社会の変化や課題に対応する能力を身に付けている。	疾病に関する疫学・予防・医療体制等、地域医療や国際医療に関する知識を有し、地域保健活動を実施することができる。	地域医療実習や学外実習を通じ、地域医療・地域保健活動やグローバルケアを実践できる。
DP3: 医療プロフェッショナリズム	医療倫理に関する基本的な知識を修得するとともに、医療人としての自覚を持った対応ができる。自らした学修成果を学ぶ、継続・生理学的実習を徹底し責任の念を持って取り組むことができる。	研究活動や社会医学活動を通じて、教養を高めることと、研究倫理やセルフマネージメントなど医師としての高い倫理性を身に付けている。	医療に関する法学や医療安全・臨床倫理に関する知識と考え方を身に付け、感病患者の事例検討、シミュレーション学習において医師としての対応を実施することができる。	医師としての職務を自覚し、患者・家族および医療スタッフ等と良好な関係を築くことができる。医療安全を中心とした実習を行うことができる。ネット教育や指導医とのディスカッションを通じて、自身の目標と将来像を構築できる。
DP4: チーム医療コミュニケーション能力	実習やグループ学習において、周知と連携して役割分担と情報共有を行い、協調・共働するチーム力を身に付けている。	研究活動や社会医学活動を通じて、研究者や医療従事者、社会と関わり、共通のコミュニケーションと連携できる。機会があれば学外や海外での活動にも参加できる。	医療安全・行動医学・多職種連携に関連するユニットで、医師としての役割を自覚し実践と共働することができる。小グループで活動して事例検討やシミュレーション教育に取り組むことができる。	指導に関わる医師や看護スタッフ等の多職種医療職との連携の中で、医師としての対応やコミュニケーション、チーム医療を実施できる。
DP5: 自己開発力	医学・社会の変化をにらみながら、積極的に最新の情報を収集・分析し、基礎医学を中心として医学の発展に積極的に取り組むことができる。	研究活動の中で、自分自身の知識、技術や態度を客観的に評価し、その向上に向けた努力をする能力を身に付けている。	医療を取り巻く変化を捉え、最新情報を収集・分析し、臨床医学を中心とした医学の発展に積極的に取り組むことができる。	臨床実習を通じて医学の修学に積極的に取り組むとともに、臨床医学・生命科学の先端分野に輪理、徹底的に学問的視野の拡大を図ることができる。
DP6: 科学的探究力	自然科学への探究心と論理的思考力を持ち、基礎医学知識の取得と実習手段を実施できる。	人々の健康と疾病の問題に対して幅広い学際的視野を持ち、独創的な研究活動や社会活動を行うことができる。その成果を論理的に理解し、論文にまとめるとともに、口頭発表できる。	基礎医学と臨床医学を徹底統合して課題に取り組むことができる。臨床推論を体験し、問題点の発見と克服、解決のプロセスを学習する。また成果をまとめる、発表できる。	臨床推論と臨床医学・基礎医学・社会医学等の知識をもとに論理的に考察し解決に導くことができる力を養う。成果をレポートにまとめ、口頭発表できる。
DP7: 総合的診療能力	科別の医師としてのコミュニケーション能力を有し、医療安全に関する医学実習や保健活動に安全に実践できる。	実践的診療の基盤となる基礎医学知識を応用しつつ、患者安全と人的成長をもって実習や社会活動を行うことができる。	少人数グループで個別型実習、実証実習、シミュレーション実習を行い、臨床実習前段階としての医学知識の統合と臨床推論の構築、基本的診療技能の修得を行う。	診療チームの一員として、自ら医療面接や身体診察、基本的検査によって情報を収集し、統合された知識と技能に基づいて診断点を抽出し、解決に向けて診断や治療の計画を立案・実行することができる。

図2 医学専門群別マイルストーン

(5) eYUME 機能の周知と活用の促進

平成30年度より、eYUME に簡単にHPの編集を行うことができるCMS (content management system) を搭載した。各講義を担当する教員が自身のIDとパスワードで学内からログインし、授業内容詳細等を適宜更新することで、学生が自己学修を行うための情報を常に最新にすることが可能となった。4年目となる令和4年度 eYUME 機能の周知と更なる活用を促した。

*eYUME の定義：山口大学医学教育総合電子システム (electronic system of Yamaguchi University Medical Education) の頭文字によるネーミングであり、山口大学医学部医学科で行われる全ての授業内容を電子化したシラバスで、平成13年よりWebサイト上に公開している。

(6) 臨床実習におけるマイルストーン評価の解析

平成31年1月、学生にeYUME上で、「臨床実習で医学生として信頼され任される役割 (EPA)」、「基本的臨床手技」、「臨床推論 (実習で経験した症例や臨床推論を学んだ疾患名を記録)」を自己評価させることで、各学生が最終的な到達点の中でどの程度修得しているかを把握させる臨床実習マイルスト

ーンの評価を本格的に開始した。令和4年度も引き続き、電子化された臨床実習マイルストーンのデータを解析し、学生が経験しにくい技能や臨床推論を把握・分析し、各診療科へフィードバックした。(コロナ禍の為に完全なデータ収集とはならなかった)

(7) YU CoB CuS の実質化

医学科では、学修成果基盤型教育を更に推進するため、大学全体の開始より1年早く、令和元年度より、DPに基づく人材育成の達成度を定量的に可視化する YU CoB CuS (Yamaguchi University Competency-Based Curricular System) を導入した。学修プロセスを可視化することにより、学生自身の振り返りを促進するとともに、教員による学修プロセスの把握を通じた学修指導を可能とし、教育・学修の質的転換に繋げている。具体的には、ユニット毎にDPへの貢献度を数値化(1単位あたりの合計値を100とする)し、成績によって係数を掛け(秀:×1.4、優:×1.2、良:×1.0、可:×0.8)、学生毎にレーダーチャート化(図3)することで、学生は成績表とともに、目標が十分に達成できているDP、不十分なDPが一目瞭然に把握できるようにしている。令和4年度も引き続き、3年生～4年生に適用し、オリエンテーション等を通じ学生に周知を行っている。



図3 学生毎のレーダーチャート (一例)

* YU CoB CuS の定義：山口大学能力基盤型カリキュラムシステム (Yamaguchi University Competency-Based Curricular System) の略。ディプロマ・ポリシーとして設定した卒業時に修得しているべき能力に基づき、その各々の能力をどの程度修得しているかを定量的に示すもの。カリキュラムマップに基づき算定する。

(8) 学生・教職員教育改善委員会の設置

令和元年に受審した医学教育分野別評価実地調査で、“学生に関する諸事項を審議する委員会に学生が参画し、適切に議論に加わるべき”との講評をいただいた。

当講評を受け、毎年定期的に行われている“学生自治会との懇談会”を、規則上に位置付けられた正式な委員会(図4)とし、令和4年度も学生・教職員教育改善委員会において協議された学生からの意見・要望等を議事要旨にまとめ医学科会議に報告し、組織的に医学教育の改善に取り組んだ。

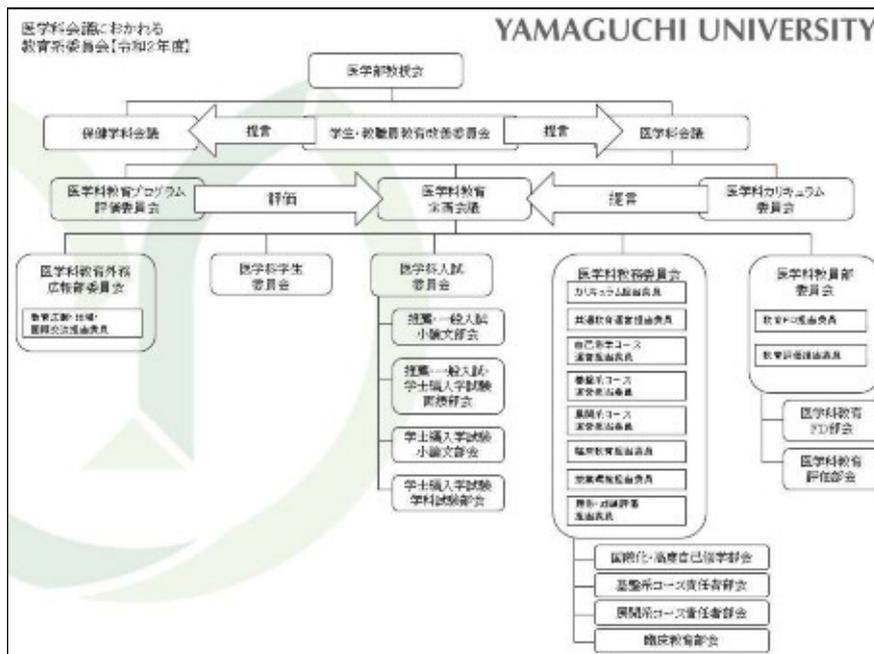


図4 医学科会議における教育系委員会

(9) FD 出席の義務化

令和元年に受審した医学教育分野別評価実地調査で、“新任教員を含め、教員に対する研修を充実すべき”との講評をいただいた。

当講評を受け、医学科教育FD部会で、“FD参加を年度に1回義務づける”、“参加についてはeYUMEのFD動画を見るeラーニング形式でも「可」とする”ことを協議した。令和4年度よりも引き続きeラーニング形式での受講を促進し、コンテンツもさらに増やした。

(10) 担任制の実質化（ポートフォリオシステムの開発）

医学科では、平成29年度より担任制を導入しており、令和4年度時点で、2年生～6年生の全学生を39講座で分担し、面談等を実施することとしている。また、修学支援システムの“レポート機能”を使用して、年度初めに学生にポートフォリオ・シートを記入させている。

この2つを効率的に行うため、令和元年度学長戦略経費で、eYUMEにポートフォリオ機能を搭載した。令和4年度も担任講座の教員が、eYUME上で学生が記入したポートフォリオ・シートを確認し、学生の面談等を行っている。

(11) オンライン（web）講義の実施

新型コロナウイルス感染症の影響により、オンライン（web）講義を余儀なくされる場面が多岐にわたった。このため、LMSとして本学で整備された遠隔講義ポータル（zoom、webex、eYUM、SLeYUSDL、動画配信サイト、Moodle2）を使用することとなり、円滑な講義の実施のため、教員および学生を対象とした講義および受講のマニュアルを引き続き周知した。

実際にオンライン上での学生発表や、挙手・チャットシステムによる質問募集を行い、対面講義に劣らない自発的なプレゼンテーションや積極的な質疑応答を確保することができた。

2. 保健学科

学生に対して、1年次はメール教員、2,3年次は担任、4年次は卒業研（ゼミ）究担当教員が主となって個別相談に応じている。教務委員、学生委員、科目担当今日委員、キャリアデザイン委員と連携し、健康状態、実習を含む学習活動、部活動、進路など多岐にわたり対応している。

また、国家試験に対して、保健学科看護学専攻では国家試験対策委員とゼミ担当教員が連携して模試結果をもとに4年生の個別指導を行った。保健学科検査技術科学専攻では、国家試験対策講義を継続して実施している。

第4節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔)
医学部	医学教育改善講演会(医学科)	講師費用1名分	60	医学教育の最新の状況について理解が深まった。
		計	60	

第5節 来年度の課題

1. 医学科

(1) 医学教育分野別評価の受審講評に基づいた改善

令和元年に医学教育分野別評価を受審した。実地調査で改善すべき、あるいは改善が望ましいと講評・指摘を受けた領域については、実現可能なところから実施改善していく。

(2) 教務委員会と入試委員会および IR 部門の協働による受験生・入学生の質確保

令和2年度入試から実施された地域枠の入学定員の増員が、今後どのような影響をもたらすのか等、医学教育センターIR部門とも協働調査していく。また、引き続き教務委員会と入試委員会の協働による受験生・入学生の質確保の細やかなフォローを行う。それと同時に入学定員減についての対応も本格的に開始した。さらに、大学入試制度の変革に対応するための検討を引き続き行う。

(3) 学生委員会による担任制導入など学生支援の充実化

平成29年度より開始された担任制も7年目となる。令和2年度から実施された eYUME でのポートフォリオシステムの運用を通じて、担任制の充実化・実質化をさらに進めていく。

(4) 教育主任制度の更なる充実によるカリキュラム改革の普及

平成25年度より、各講座、診療分野毎に、教育主任制度を開始した。これは、医学教育センターと、実際の教育を担当する各講座教員グループとの情報の伝達、共有を密にすることにより、複雑化する医学教育を円滑に進めることを目的としている。教員間の戸惑いや伝達ミス等も散見されたが、

概して軌道に乗ったものと思われる。令和4年度は、今まで以上にこの制度の更なる活用により、より充実した内容の教育を目指してきた。また、令和元年度より臨床実習後 OSCE が開始された。臨床実習前 OSCE も公的化され、教員の負担は大きくなるばかりであるが、学生教育の必要性・重要性の理解を深めてもらい、医学教育への参加をこれまで以上に促していく。

(5) 学外での地域医療実習の更なる充実

将来選択する専門領域に関わらず、プライマリ・ケアや地域医療に一定の理解・能力を有する医師を養成することが必要になってきている。そこで、6年生を対象に山口大学医学部近辺の各診療科同門の診療所を中心にした診療参加型地域医療臨床実習を、平成25年度より導入している。引き続き、施設関係者との密なコンタクトを行い、実習内容の細かな検討、あるいは学生アンケート等を実施して実習の更なる充実を図る。

(6) 成績不振者への個別指導の更なる充実と対象学生の拡充

個別試験や CBT 試験で成績不良であった4年生と卒業延期学生が対象であり、個別指導等の更なる充実と拡充に向けて、議論をさらに加速させる。今後の検討課題として、低学年時の成績不振者に対する個別指導体制の構築についてもさらに検討していく。

(7) 臨床実習の充実化、mini-CEX の普及、臨床実習後 OSCE

臨床実習の更なる充実に向けて、ログブックの一部を eYUME 上で行えるように改訂を行っており、運用等の問題点を整理した。また、mini-CEX も6年目になり、主要な診療科での実施をさらに進めるとともに、問題点などについても整理していく。

また、卒業時の技能・態度の評価として、臨床実習後 OSCE が令和2年度から全国正式実施となった。今後は臨床実習前 OSCE と同様に公的化される方向にあり、これに伴う人員や設備の運用を的確に行い、円滑な試験の実施に取り組んでいく。

(8) eYUME の改定と e-learning の普及

eYUME の機能強化を引き続行っていく。また eYUME を用いた動画配信等により、学生・教員が自由な時間に学習を行うことができる e-learning のシステムを整備していく。

2. 保健学科

大学院教育について

昨年度からの検討課題ではあるが、博士後期課程の教育研究内容を充実させ、受験生を増やす必要がある。保健学専攻長を中心に戦略を練っており、成果が出るように努力する必要がある。

第9章 工学部のFD活動

第1節 FD研修会

1. 教育改善FD研修会

以下の要領で、教育改善FD研修会を実施した。

日 程：令和5年2月15日(水) 12:00～12:45
場 所：オンライン（Webex 使用）
講 師：教学マネジメント室

【研修内容】

「山口大学の教学IR –2022年度卒業生調査の結果報告」
教学マネジメント指針について説明したのち、2022年6月に実施した卒業生調査の結果報告を行った。当日参加できなかった教員に対しては、Moodle上で録画配信が行われた。

日 程：令和5年3月8日(水) 12:00～12:45
場 所：オンライン（Webex 使用）
講 師：教学マネジメント室

【研修内容】

「山口大学におけるDP策定方針 –2022年度認証評価を受けて」
認証評価の事前相談等の状況を踏まえ、本学では今後DPの見直しを予定している。現段階における対応、今後のスケジュール等について説明が行われた。当日参加できなかった教員に対しては、Moodle上で録画配信が行われた。

第2節 教育改善に関する活動

工学部では、以下の様な教育改善に関する活動を実施している。

① Yu CoB CuS の導入

令和元年度（2019年度）から、一部の学科においてYU CoB CuSを導入し、学習成果を可視化できるようにした。

② 工学教育研究センター

工学部附属工学教育研究センターは、工学部における教育内容の充実と教職員の教育力強化を図り、山口大学の工学教育の改善に資することを目的として、2005年7月に設置された。本センター

は、

- (1) 先駆的な教育実践活動に関する情報収集、分析および独自の教育改善方法の提案、
- (2) 学部・大学院での教育実践活動に関するデータ分析、取りまとめおよび学内外への公表、
- (3) 長期的なセンターの維持発展のための運営体制のシステム化、

を主なミッションとして活動している。2017年4月からは、本センターの組織を調査研究部門、学生ケア部門、学生教育部門の3部門に改組し、学生教育部門の中に「文部科学省グローバル人材育成推進事業(2012～2016年度)」を通して実施してきたグローバル教育を継承した。3部門のうち、調査研究部門では工学教育に関連した調査、分析、研究およびその成果公表に関する活動、学生ケア部門では工学部サロンにおける活動を中心とした学生の修学支援に関する活動、学生教育部門では修学の基礎力向上のための取り組みに関する活動を推進している。特に、学生教育部門には語学教育強化室、海外派遣支援室、数学統一試験実施室の3室を設置し、学生の英語力の向上、留学プログラムの運営と留学サポート、工学系数学基礎力の向上に取り組んでいる。

山口大学工学部附属工学教育センター <http://eerc.eng.yamaguchi-u.ac.jp/>

③ 工学部サロン

平成18年度(2006年度)から、吉田キャンパスの研究1号館の1階に「工学部サロン」を開設している。工学部サロンは、工学教育研究センターの学生ケア部門の活動である。工学部はキャンパスが離れていることもあり、工学部1年生のために、よろず相談が可能な場が工学部サロンである。工学部サロンには、相談員として工学部の教員OBが待機している。長きにわたり、工学部で教育研究に携わってきた豊富な経験があり、工学部のことを熟知した教育熱心な先生方が相談に対応している。また、工学部のいろいろな情報提供も行い、学生交流の場としても利用できるようになってきている。月～木の14時～18時30分(月は19時)まで対応しており、曜日によって担当教員が異なっている。

山口大学工学部附属工学教育センター 工学部サロン

<http://eerc.eng.yamaguchi-u.ac.jp/salon.html>

④ ステップアップノートの配布

平成23年度(2011年度)から、工学部の新1年生に対して「ステップアップノート」の配布を行っており、工学部学生のポートフォリオとして利用している。

第3節 学生授業評価・優秀授業表彰

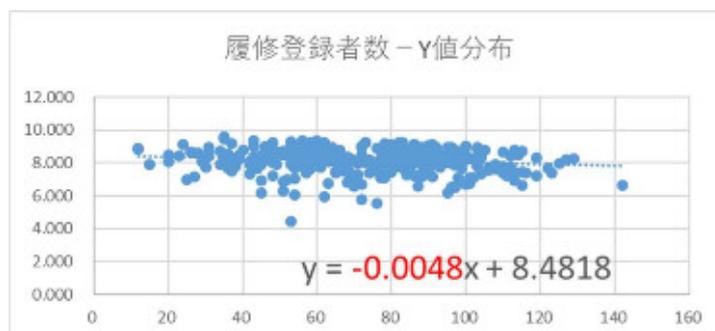
工学部の点検・評価委員会では、学生授業評価データを利用して、優秀授業の表彰を行っている。令和2年度に学生授業評価アンケートが修学支援システムを利用したオンライン形式に変更されたことに伴い、アンケートの質問項目も変更されたため、工学部の「学生授業評価表彰実施要綱」の改正が行われた。従来のアンケートでは、「理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されたか」、「授業の内容が理解できたか」、「授業が満足のいくものであったか」の3項目の回答結果を利用して優秀授業を決定していたが、新しいアンケートでは授業内容の理解度と満足度を問う2つの項目の回答結果を利用して優秀授業が決定された。概要は以下の通りである。

<p>項目(3) あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>項目(5) あなたは、この授業について満足しましたか？</p>

上記 2 項目の質問に対する学生の回答は、「そう思う」が 5 点、「ややそう思う」が 4 点、「どちらとも言えない」が 3 点、「あまりそう思わない」が 2 点、「そう思わない」が 1 点である。したがって、合計点が 8 点以上であれば「良い評価」、6 点以上 8 点未満であれば「概ね良い評価」と考えて良い。2 項目の合計点 (Y 値) を導出する。授業評価アンケート回答数と合計点 (Y 値) の相関を考慮した補正式から、補正合計点 (Z 値) を算出する。この補正合計点 (Z 値) を評点とし、学部授業では全開講科目数の 10%、大学院授業では 20%を「優秀授業」としている。ただし、授業評価アンケート回答数が 10 未満の授業は、正確な評価が期待できないので「優秀授業」の対象から除いている。

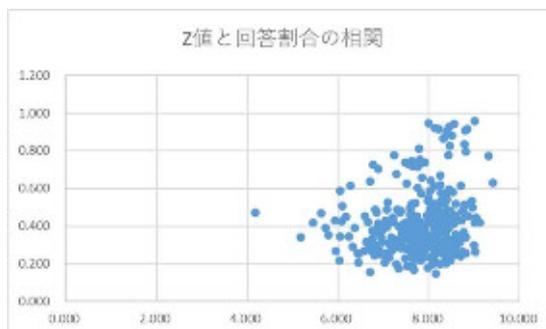
学部の「優秀授業」に関しては、学科間のバランスを考慮して、「各学科の補正合計点の上位 3 科目」と、それら以外の「学部全体での補正合計点の上位科目」を「優秀授業」として専攻している。大学院授業に関しては、創成科学研究科 (工学系) 全体での補正合計点の上位 20%の科目を「優秀授業」としている。また、学部授業では学部全体と各学科の補正合計点の最高点の授業を、大学院授業では各専攻の補正合計点の最高点の授業を「最優秀授業」として、これらの授業の担当教員を表彰している。

令和 3 年度 (2021 年度) 開講の工学部と大学院博士前期課程 (工学系) の授業について、上記 3 項目の合計点 (Y 値) と、授業評価アンケート回答数の相関 (授業評価アンケート回答数が 10 未満を除く) を以下に示す。全開講授業数は、学部授業は 400 科目、大学院授業は 116 科目であった。授業評価アンケート回答数が 10 未満を除く授業数は、学部授業は 361 科目、大学院授業は 27 科目であった。回帰直線の傾きの絶対値 α を用いて、 $Z \text{ 値} = Y \text{ 値} + \alpha \times \text{アンケート回答数}$ 、として補正合計点 (Z 値) を各講義に対して導出した。

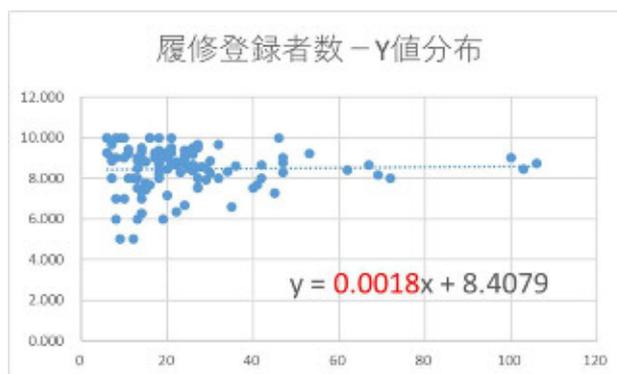


学部授業の履修登録者数 - Y 値分布 ($\alpha = -0.0048$)。

学部授業について、補正合計点 (Z 値, 横軸) と授業アンケートの回答割合 (縦軸) の相関は、次の通りであった。回答割合が高い方が評価値は高くなる傾向があった。

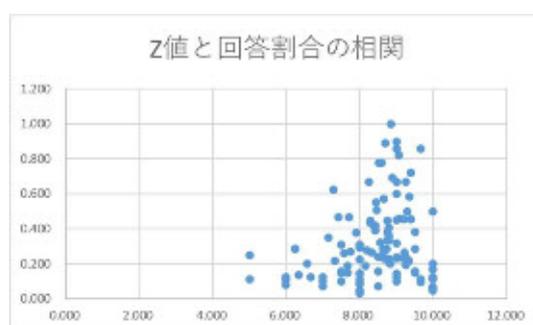


学部授業の Z 値 - 回答割合の相関。



大学院授業の履修登録者数-Y 値分布 ($\alpha = +0.0018$).

大学院授業について、補正合計点 (Z 値, 横軸) と授業アンケートの回答割合 (縦軸) の相関は、次の通りであった。



大学院授業の Z 値-回答割合の相関。

1 科目の履修登録者数が 30 名以上の科目は限られており、また業評価アンケート回答数が 10 未満となる、アンケート回答割合が 30%未満の授業も多い。優秀授業評価対象となる授業評価アンケート回答数が 10 以上の授業割合が、23% (27/116) と少ないことが問題である (学部授業の場合は 90%)。オンライン形式アンケートになって回答割合を増加させることが難しくなっている上、アンケート回答数が少ないので評価値が大きくばらついている。現状では、評価対象の大学院授業の内、85%が優秀授業として選出されている。実態して履修登録者数の多い授業が表彰されている状況で、表彰制度の体をなしていないといえる。本件について点検・評価委員会で全委員へ意見を伺ったところ、80%以上の委員は表彰制度の存続に疑問を呈したが、教員のエンカレッジに寄与しているという意見もあった。

令和 4 年度 (2022 年度) の授業および学生授業評価は実施済みなので、これについては従前通り、優秀授業表彰を実施する。ただし、令和 5 年度 (2023 年度) に開講する授業に対する優秀授業表彰については、制度を変更する方向で議論することになった。

令和 3 年度 (2021 年度) 開講の優秀授業一覧を、次ページ以降に示す。

令和3年度（2021年度）優秀授業一覧表（学部）

連番	科目名	担当教員名	学科	Z 値	備考
1	テクニカルコミュニケーション I	ROBERTSON ZACHARY THOMAS	機械工学科	8.851	機械 1 最優秀授業
2	ものづくり創成実習 I	三上 真人	機械工学科	8.794	機械 2
3	ものづくり創成実習 II	MACADRE ARNAUD PAUL ALAIN	機械工学科	8.588	機械 3
4	国際建設技術演習 II	森 啓年, MD. AZIZUL MOQSUD	社会建設工学科	9.423	社建 1 最優秀授業
5	国際建設技術演習 I	森 啓年, MD. AZIZUL MOQSUD	社会建設工学科	9.313	社建 2
6	土質力学演習 I	中田 幸男	社会建設工学科	9.127	社建 3
7	土質力学 I	中田 幸男	社会建設工学科	9.020	
8	土質力学 I	鈴木 素之	社会建設工学科	8.862	
9	土質力学演習 I	鈴木 素之	社会建設工学科	8.862	
10	測量学	中島 伸一郎	社会建設工学科	8.821	
11	ものづくり創成実習 I	吉武 勇, 吉本 憲正, 原 弘行, 渡邊 学歩	社会建設工学科	8.814	
12	東アジア国際協力概論	森 啓年	社会建設工学科	8.789	
13	土質力学 II	吉本 憲正	社会建設工学科	8.779	
14	土質力学演習 II	原 弘行	社会建設工学科	8.746	
15	機器分析 II	山吹 一大	応用化学科	8.722	応化 1 最優秀授業
16	物理化学 I	酒多 喜久	応用化学科	8.599	応化 2
17	テクニカルコミュニケーション α	ROBERTSON ZACHARY THOMAS	応用化学科	8.556	応化 3
18	数理計画法	若佐 裕治	電気電子工学科	9.004	電電 1 最優秀授業
19	常微分方程式及び演習	堀田 一敬	電気電子工学科	8.555	電電 2
20	応用解析 I	栗原 大武	電気電子工学科	8.538	電電 3
21	数値計算	中村 秀明	知能情報工学科	8.826	知能 1 最優秀授業
22	P B L 入門	瀧本 浩一	知能情報工学科	8.759	知能 2
23	人工知能	間普 真吾	知能情報工学科	8.706	知能 3
24	プログラミング I	瀧本 浩一	知能情報工学科	8.700	
25	ソフトコンピューティング	間普 真吾	知能情報工学科	8.698	
26	応用物理学 I	嶋村 修二	知能情報工学科	8.630	

27	構造基礎力学Ⅰ・同演習	秋田 知芳	感性デザイン工学科	9.058	感性1 最優秀授業
28	建築デザイン論	岡松 道雄	感性デザイン工学科	9.051	感性2
29	日本建築史	矢ヶ崎 善太郎, 岡松 道雄	感性デザイン工学科	9.031	感性3
30	建築設備工学Ⅱ・同演習	小金井 真, 金 炫兌	感性デザイン工学科	8.807	
31	常微分方程式及び演習	柳下 剛広	感性デザイン工学科	8.774	
32	応用物理学Ⅰ	嶋村 修二	感性デザイン工学科	8.741	
33	ものづくり創成実習Ⅱ (CAD/CG 演習Ⅱ)	小林 剛士, 白石 レイ	感性デザイン工学科	8.685	
34	環境情報学Ⅰ及び演習	田中 一宏	循環環境工学科	8.963	循環1 最優秀授業
35	常微分方程式及び演習	堀田 一敬	循環環境工学科	8.945	循環2
36	移動現象論	佐伯 隆	循環環境工学科	8.654	循環3
37	地球環境論	長井 正彦	循環環境工学科	8.611	
38	テクニカルコミュニケーションⅠ	貞光 宮城	工学部	9.015	
39	テクニカルコミュニケーションⅠ	植村 隆, 貞光 宮城	工学部	8.802	
40	テクニカルコミュニケーションⅠ	ROBERTSON ZACHARY THOMAS	工学部	8.785	

令和3年度(2021年度)優秀授業一覧表(大学院)

連番	科目名	担当教員名	専攻	Z値	備考
1	メカトロシステム設計特論	江 鐘偉, 森田 実	機械工学系専攻	9.357	最優秀授業
2	システム計算工学特論	小河原 加久治	機械工学系専攻	9.091	
3	機械工学系特論	蔣 飛, 新銀 秀徳	機械工学系専攻	9.000	
4	粘性流体力学特論	望月 信介	機械工学系専攻	8.423	
5	水質浄化工学特論	今井 剛, 鈴木 祐麻	建設環境系専攻	9.385	最優秀授業
6	大気・土壌保全工学特論	樋口 隆哉, 新苗 正和	建設環境系専攻	9.300	
7	メンテナンス工学	吉武 勇	建設環境系専攻	9.071	
8	災害対応におけるリモートセンシングと地理情報システム	長井 正彦	建設環境系専攻	8.789	
9	建設環境系特論	山田 和彦	建設環境系専攻	8.632	
10	X線分光光学特論	吉田 真明	化学系専攻	8.524	最優秀授業
11	情報セキュリティ特論	福士 将, 藤田 悠介, 平野 靖, 呉本 堯	電気電子情報系専攻	9.000	最優秀授業
12	電力変換工学特論Ⅱ	山田 洋明	電気電子情報系専攻	8.688	
13	超伝導工学特論	原田 直幸	電気電子情報系専攻	8.667	
14	電磁気学特論	小柳 剛, 山田 陽一, 大原 渡, 山本 節夫, 原田 直幸	電気電子情報系専攻	8.607	
15	電気電子情報系特論	河村 圭, 小柳 剛, 大原 渡, 荻原 千聡, 中島 翔太, 田村 慶信, 西藤 聖二, 田中 俊彦	電気電子情報系専攻	8.462	
16	電子システム工学序論	西藤 聖二, 田中 俊彦, 若佐 裕治, 堀田 昌志, 山田 洋明, 中島 翔太	電気電子情報系専攻	8.455	
17	画像認識特論	藤田 悠介	電気電子情報系専攻	8.364	
18	音響情報工学特論	佐伯 徹郎, 爲末 隆弘	電気電子情報系専攻	8.300	
19	半導体物性特論	山田 陽一	電気電子情報系専攻	8.286	
20	固体物性論特論	仙田 康浩, 荻原 千聡, 鳴海 孝之	電気電子情報系専攻	8.250	
21	基礎数理解析学特論Ⅰ	柳原 宏	基盤科学系専攻	9.214	最優秀授業
22	科学・技術英語特論	植村 隆	基盤科学系専攻	9.000	
23	応用数学特論Ⅱ	柳下 剛広	基盤科学系専攻	8.733	

第4節 FD実施経費報告書

FD実施経費は下表のとおりである。

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額	FD活動の効果（簡潔に）
工学部	工学部ポートフォリオ(ステップアップノート)の改訂	印刷費	64,400	学部新入生へ配布し大学生生活の成長(ステップアップ)の軌跡を記録させた。
計			64,400	

第5節 来年度の課題

① 優秀授業表彰制度の変更

令和4年度(2022年度)の授業および学生授業評価は実施済みであるので、従前通り優秀授業表彰を実施する。しかし、令和5年度(2023年度)に開講される授業に対する優秀授業表彰制度は変更する方向で議論を進める。

第10章 農学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 生物資源環境科学科の授業公開（ピアレビュー）

生物資源環境科学科では、「生物資源環境科学セミナー」として、教員の授業を公開し、複数教員によるピアレビューを実施してきた。本年度も、公開授業が行われ、教員同士の意見交換が活発に行われた。以下、本年度に実施した3回の公開授業を記す。

- (1) 「売れる麦を核とする中山間水田輪作体系における収益力強化と省力化の実証」の成果と検証
日時：令和4年7月27日（水）15:30～ 高橋 肇 教授
- (2) 獣害はなぜなくなるのか
日時：令和4年9月28日（水）15:30～ 細井 栄嗣 准教授
- (3) 土壌教育を考える：土壌教育の国際ガイドラインに向けて
日時：令和4年11月30日（水）15:30～ 藤間 充 准教授
- (4) 節水型コムギ育種に向けた基礎的研究～節水と高収量の両立を目指して～
日時：令和5年1月11日（水）15:30～ 妻鹿 良亮 助教

2. 生物機能科学科の授業公開（ピアレビュー）

生物機能科学科では、「生物機能科学セミナー」として、教員の授業を公開し、複数教員によるピアレビューを実施してきた。本年度も、公開授業が行われ、教員同士の意見交換が活発に行われた。以下、本年度に実施した6回の公開授業を記す。

- (1) サラブレッドの運動生理学的研究の意義
日時：令和4年4月28日（木）16:30～ 宮田 浩文 教授
- (2) フェニルプロペン香気成分の生成に関わる転移酵素の機能解析
日時：令和4年7月15日（金）16:00～ 肥塚 崇男 准教授
- (3) 褐虫藻に秘められたサンゴ-褐虫藻共生の仕組み
日時：令和4年7月22日（水）16:00～ 湯山 育子 助教
- (4) 有用物質生産菌の細胞膜内外の代謝に関する生物工学研究
日時：令和4年10月27日（木）16:00～ 片岡 尚也 助教
- (5) 「第二の抗酸化物質」活性カルボニル消去物質の探索
日時：令和4年11月30日（水）16:00～ 真野 純一 助教

(6) 酢酸菌の細胞内代謝に関する2つの話

日時：令和5年1月27日（金）16:00～ 薬師 寿治 教授

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 令和4年度 アラカルトFD研修会「障害等のある学生への合理的配慮：最近の支援ニーズの傾向から」(農学部FD研修会)

日程：令和4年11月16日（水）13:30～14:00

場所：農学部大会議室

講師：岡田 菜穂子 准教授，松尾 理佳 カウンセラー（学生特別支援室）

参加者：24名

はじめにFDコーディネーター鈴木教授より岡田菜穂子准教授、松尾理佳カウンセラーの紹介があった。引き続き岡田先生の自己紹介があり、その後講演に入った。主な内容は以下のとおり。

1. 「学生特別支援室」とは

学生特別支援室は、障害等のある学生の修学支援のための学内拠点であり、障害等のある学生や支援に関わる教職員からの相談・問い合わせに対応するとともに、学内の関連部局と連携して支援を実施していることが説明された。

2. 障害のある学生への「合理的配慮」

資料をもとに、山口大学の障害学生修学支援体制が説明された。医療的に障害があるからと言って支援が必要とは限らない、障害の受け止め方も支援の方法もさまざまであるといった話題に加え、配慮書の内容とともに修学支援の実施について説明があった。また、支援の必要性が比較的明確な障害学生だけでなく、障害の有無や配慮の必要性が不明確な「グレーゾーン」の学生もいることから、多様な配慮への協力依頼もあった。

3. 最新の支援ニーズの傾向

最近の修学支援ニーズの動向について情報提供され、授業中の配慮実践例や手軽で汎用性の高い配慮方法が紹介された。

講演のあと、質疑応答の時間をとった。問題ある（あるいは潜在的にありそうな）学生を面倒みている側からすると、相談できるところがあるということを改めて知ることができた、教員側もどうしても一人で抱え込んでしまうところがあるので少しその不安が解消された気がする、引き続き情報共有や連携を保ちながら問題解決できることを望んでいる、といった意見があった。

2. 学部内FD研修会（農学部）

日時：令和4年8月3日（水）15:00～16:30 （安全に関する座学30分・実習50分）

場所：農学部附属農場実習棟実習室

参加者：農学部の教職員 約30名

合同拡大教授会の議事に先立ち、生物機能科学分野の松井健二教授による日本農学賞・読売農学賞受賞記念講演「みどりの香りの科学 ～しつこくやったら受賞したり「さきがけ」のアドバイザーになってたり～」を開催した。本講演は、学部内FD研修の一環として開催し、農学部の多くの先生方が参加した。松井教授からは、これまで取り組んできた研究内容の後、外部資金の獲得を目指す先生方へ向けて、申請書の書き方のポイントなど、多くのアドバイスがあった。

3. 刈り払い機講習会（農学部附属農場）

日時：令和4年8月3日（水）15:00～16:30（安全に関する座学30分・実習50分）

場所：農学部附属農場実習棟実習室

参加者：農学部の教職員および学生で農場の刈り払い機利用希望者 10名

農学部附属農場が主催して、農作業にかかる安全教育の一環として、総合技術部との共催で刈り払い機講習会を以下のとおり実施した。

4. フィールド教育研修会（農学部）

本年度の「フィールド教育研修」では、果樹園における環境低負荷型栽培技術を教材化するため、岡山県での研修会参加や鳥取大学への視察を行った。

農場技術職員一名が山陽薬品株式会社主催のIPM研修会への参加と、赤磐市の観光農園および農家の果樹園を視察した。11月28日に岡山県岡山市の三徳園（写真1）にて開催されたIPM研修会では、バイオスティミュラントや生物農薬の詳しい放飼スケジュールについての講義、新たな防除資材の紹介があった。また、三徳園のモモ園を視察し、枝吊りの方法や二本仕立て（写真2）の実際について聴取した。11月29日に赤磐市の観光農園「茂桃実園」にて、ブドウ園とモモ園の見学を行い、農薬散布スケジュールや袋掛け資材、肥料などを視察した。同じく赤磐市にあるモモ生産者の圃場では、カイガラムシ防除の情報や土壌改良の手法、苗生育期の技術などを聴取した。

3月15日には、教員一名が鳥取大学農学部附属フィールドサイエンスセンターを視察し、GAP認定に準じた果樹園の管理や、農場全体の運営管理方法を聴取した。聴取した情報を基に、本学でも減農薬や果樹園の安全管理を整備することとした。



写真1：三徳園外観



写真2：三徳園の二本仕立てによるモモ



写真3：生産者モモ園で土壌改良に利用するバーク堆肥。毎年2t購入されているとのこと。

第3節 教育改善に関する活動

令和4年度は、前年度に引き続き新型コロナウイルスへの対応が求められていたものの、幸い農学部では、徹底した感染対策と目的達成に向けた努力により、概ねすべての授業を対面で行うことができた。農学部では、山口大学が採択された令和3年度文部科学省大学改革推進等補助金（デジタル活用高度専門人材育成事業）において、産業界等から求められる「デジタルファーマーリング（DF）を理解・実践できる人材」「農業・食品分野でデータを活用したイノベーションを創出できる人材」を育成するために、「地域に密着した分水工型DF教育システムの構築」を掲げて、1.実習・演習用機器・環境の整備、2.DF教育カリキュラムの構築（新規科目の開発、既存科目の高度化）、3.教材作成、4.DF教育プラットフォームの構築、の取り組みを行った。本事業の「DFカリキュラムの構築」では、既存科目の高度化とともに新規3科目「データサイエンス技術演習」「デジタルファーマーリング基礎」「デジタルファーマーリング演習」の開発を行い、シラバスの一部を3月にパイロット授業として在学学生を対象に実施した。導入したDX教育設備の活用事例として、「データに基づく生産効率の向上」「付加価値が高い果物、果菜生産」「減農薬に対応した穀類生産」「エネルギー使用の最適化が図れるイチゴ生産ハウス」などの社会課題への取り組みによる教育の向上を図っていく。このほか、カリキュラムに関しては、両学科ともに、低学年への専門科目の移行、共通教育から専門教育、さらには研究室配属へのスムーズな移行、学生のモチベーション維持を目的とした新設科目、座学の授業と学生実験の連動、といったものを意識したカリキュラムの見直しを行ったことによった成果が見え始めているところであり、引き続き、学生の様子を注視していきたい。

第4節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額 (千円)	FD活動の効果（簡潔に）
農学部	フィールド教育研修費 (R4.11.28)	旅費 1名	30	山陽薬品株式会社主催のIPM研修会への参加と、赤磐市の観光農園および農家の果樹園を視察
	フィールド教育研修費 (R5.3.15)	旅費 1名	30	鳥取大学農学部附属フィールドサイエンスセンターを視察し、GAP認定に準じた果樹園の管理や、農場全体の運営管理方法を聴取

第5節 来年度の課題

1. ピアレビュー

令和4年度より生物機能科学科と同様のセミナー形式でのピアレビューを開始した。計4回の開催になったが、参加者も多く、開催は概ね好評であった。令和5年度も引き続き5回のセミナー開催を予定しており、生物機能科学科でも引き続きセミナー形式のピアレビューを継続していく。

2. 新型コロナウイルス感染防止対策

令和5年度は、新型コロナウイルス感染防止対策が緩和されることとなったが、本学の方針に基づき、農学部でも対面授業を基礎として実施するとともに、実験科目や実習科目については引き続き感染防止策を徹底することとしている。同時に、修学指導教員が中心となって、修学に伴う不安を取り除くようなケアを行うことにしている。

第11章 共同獣医学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 授業公開(ピアレビュー)

令和4年度に公開した授業は以下の通りである。

日付	科目名	担当教員	発信大学	参観者
2022.6.29	免疫学II	岩田 祐之	山口大学	佐々木
2022.7.11	獣医解剖学D	日下部 健	山口大学	佐藤晃一
2022.10.14	獣医キャリア形成論	高野 愛	山口大学	佐藤宏
2022.11.2	食品衛生学	渡邊 健太	山口大学	度会
2022.11.8	獣医解剖学A	松元 光春	鹿児島大学	日下部
2022.11.15	獣医消化器病学	馬場 健司	山口大学	加納
2022.11.29	獣医消化器病学	馬場 健司	山口大学	伊賀瀬
2022.12.13	消化器B	網本 昭輝 (非常勤講師)	山口大学	板本
2022.12.19	獣医病理学A	森本 将弘	山口大学	渋谷
2022.12.22	獣医内分泌・代謝病学	水野 拓也, 伊賀瀬 雅也	山口大学	日暮
2022.12.27	獣医解剖学B	日下部 健	山口大学	森本
2023.1.16	獣医麻酔学	伊藤 晴倫	山口大学	高木
2023.1.17	生化学I	島田 緑	山口大学	大浜
2023.1.18	獣医運動器病学	板本 和仁	山口大学	角川
2023.1.18	獣医予防管理学	角川 博哉	山口大学	早坂
2023.1.19	獣医内分泌・代謝病学	水野 拓也, 伊賀瀬 雅也	山口大学	柳田
2023.1.23	獣医病理学実習	森本 将弘, 櫻井 優	山口大学	下田
2023.1.23	獣医微生物学IIA	早坂 大輔	山口大学	島田
2023.1.25	動物福祉学	浅野 淳	鹿児島大学	木村
2023.1.25	獣医運動器病学	板本 和仁	山口大学	谷
2023.1.27	獣医発生学	加納 聖	山口大学	三宅
2023.2.1	画像診断学	堀切園 裕	山口大学	伊藤
2023.2.2	獣医内分泌・代謝病学	水野 拓也, 伊賀瀬 雅也	山口大学	馬場

2. 獣医学セミナー

本学部では、教員間のピア・レビューとして教員が持ち回りで講師を務める“獣医学セミナー”を開催している。各教員の研究内容を教員・学生に向けて紹介するセミナーを定期的で開催し、学部の研究力・教育力の向上を図ることを目的としている。本年度は5名の本学部教員を講師として開催した。

(1) 第 84 回 獣医学セミナー:

小動物獣医療における麻酔の安全性向上への取り組み

板本 和仁 先生 (伴侶動物医療)

2022 年 5 月 25 日 (水) 16:00-17:00 iCOVER 1 階 101 教室

動物の飼育する社会環境の変遷に伴い、動物の医療の高度化が謳われて久しいですが、獣医療における診療技術の向上に伴い、必要とされる検査やその精度や手術手技は高度になり、高齢動物の診療の機会や難治性疾患の治療の機会は年々増加しています。動物の診療において、手術のみならず、種々の場面で不動物が必要であり、それに伴い必要とされる麻酔手技は、より高度に複雑にと変遷してきています。本センターにおける小動物外科系診療科では 検査麻酔/手術麻酔/放射線治療麻酔で、年間 3000 件を超える麻酔実績を有しますが、重篤な疾患を有する動物への鎮静や全身麻酔の合併症をもたらす確率は依然として高く、継続的な安全への取り組みがもとめられています。今回、本セミナーでは、麻酔の安全性を高める手法の一つとして、電気生理学的手法を獣医学領域への応用した麻酔深度および侵襲度評価の向上に対する取り組みについて、概説したいと思います。

(2) 第 85 回 獣医学セミナー:

野兎病菌の進化からみる病原性獲得機構

清水 隆 先生 (獣医公衆衛生学)

2022 年 6 月 22 日 (水) 16:00-17:00 iCOVER 1 階 101 教室

野兎病菌 *F. tularensis* は野兎病を引き起こす病原性細菌で、健康な皮膚からでも感染するなど、その高い感染力と病原性でテロ活動などへの悪用が懸念されています。

F. tularensis は BSL3 での使用が求められていますが、研究においてはヒトやマウスに対する病原性が低く、BSL2 で使用可能な亜種 *novicida* (*F. novicida*) が多く用いられます。*F. tularensis* と *F. novicida* は高いゲノムの相同性があるにもかかわらず、病原性に大きな違いがある理由は長年の謎でした。

今回、我々はこの野兎病菌の亜種の進化に着目し、野兎病菌の病原性獲得機構の解明に取り組みましたので、その概要を報告いたします。なお、本研究は研究拠点群形成プロジェクト「感染症創薬研究センター」において、医学部との共同研究で実施したものです。

(3) 第 86 回 獣医学セミナー:

ほ乳類の倍数体がないのはなぜ?

加納 聖 先生 (獣医発生学)

2022 年 10 月 26 日 (水) 16:00-17:00 獣医学研究科棟 4 階 大講義室

ほ乳類において、4 倍体などの倍数体胚は胎生致死となり、倍数体個体は存在しません。

ゲノムセットを 3 個以上持つ倍数体は魚類や両生類において正常な個体として発生が可能である一方、ほ乳類において倍数体は胎生致死となり、倍数体化が厳密に拒絶される機構がほ乳類には存在することが予想されます。

今回は、人為的に作出したマウス4倍体胚などを用いた実験結果をもとに、ほ乳類にとって倍数体とは何か考察してみたいと思います。

(4) 第87回 獣医学セミナー:

マダニ媒介性感染症の総合的な理解を目指して

高野 愛 先生 (獣疫学)

2022年11月30日(水) 16:00-17:00 iCOVER 1階 101教室

マダニ媒介性感染症は、一部の例外を除き、マダニに吸血されることで人や動物が感染する。マダニの普通の吸血源動物は野生動物や家畜など、人以外の動物であることが多い。そのため、マダニ媒介性感染症の感染制御は、自然界のどのような因子が保菌動物の数やマダニの数に影響を与え、その結果マダニの病原体陽性率がどのように変化するかを理解する必要がある。さらに、病原体が人などに感染するためには、マダニの唾液に分泌され、排出される必要があるが、マダニ体内での病原体の動向はほとんどわかっていない。これは、マダニの世代時間が長く、ラボ株の樹立種が少ないことや、マダニ由来の汎用される培養細胞がないことに起因する。我々の研究室では、各種のマダニを用いた感染実験や、野外での疫学調査などを介して、これらマダニ媒介性感染症の総合的な理解を進めるための研究を行なっている。その一端をご紹介します。

(5) 第88回 獣医学セミナー:

牛の人工授精を再考する

谷口 雅康 先生 (獣医繁殖学)

2023年3月29日(水) 16:00-17:00 iCOVER 1階 101教室

牛の精子凍結保存とその凍結精液を用いた人工授精法は世界中で広く一般的に活用されている。しかし、1回の人工授精に対する妊娠率は年々低下傾向である。生産性の向上に主眼を置いた育種改良による繁殖障害の増加や効率化を図るための規模拡大による管理面の要因など、雌側または農家側の要因に対する研究は幅広く行われている。一方で、種雄牛の造成も生産性が最も重要な要因である。凍結精液は主に融解後の運動性において一定基準を満たせば市場に流通する。そのため、種雄牛ごとに受胎率に差はみられるものの、農家は生産性及び市場性を重視して精液を選定する。さらに、凍結精液の製造は限られた機関でのみ行われていることから、雌側での研究に比べ、雄(精子)側での研究報告は圧倒的に少ない。我々の研究室では、このような背景を基に牛凍結精液の性状を様々な手法で解析し、雄側からの受胎率改善を目指した研究を行っている。本セミナーではその一端をご紹介します。

3. 獣医学特別セミナー

本学部では学部の研究力・教育力の向上を図るため、外部から講師を招聘して各分野の最先端の研究に教員・学生が触れる機会として、“獣医学特別セミナー”を開催している。本年度は4名の外部講師を招いて実施された。

(1) 第 54 回 獣医学特別セミナー:

動物の優れた歩行・走行メカニズムの理解に向けて:数理モデルやロボットを用いた研究

青井 伸也 先生 (大阪大学大学院基礎工学研究科機能創成専攻 生体工学領域)

2022 年 7 月 13 日 (水) 13:00-14:00 獣医学研究科棟 1 階 会議室

動物はその複雑な筋骨格系を巧みに制御して、多様な環境の下で優れた移動能力を発揮する。ヒトの二足歩行から、ウマの四足歩行、ムカデの多足歩行など、種に応じて様々な移動形式を取り、さらには速度や状況に応じて様々に歩容を変える。本講演では、様々な動物の持つ優れた歩行・走行メカニズムの理解に向けて、数理モデルやロボットを用いた取り組みについて紹介したい。

(2) 第 55 回 獣医学特別セミナー:

精路発生と比較形態学～三次元再構築法の活用～

表原 拓也 先生 (東京医科大学・人体構造学分野)

2022 年 12 月 20 日 (水) 16:30-17:30 iCOVER 1 階 101 教室

精子の流れる通路=精路の構造は脊椎動物種間で大きく異なります。精路では精子に運動能などが付与されることから、精子が精路のどこをどのくらいの時間をかけて流れるかは、各動物種での受精環境と関連していることが想定されます。

発表者はこれまで精巣からの輸出系の多様性が生じるしくみを調べるために、三次元再構築法を活用した比較形態学的研究を進めてきました。本セミナーでは、その成果とともに、それを得る過程での苦労話のようなものも含めてお話しできればと思います。

(3) 第 56 回 獣医学特別セミナー:

Bovine leukemia virus がコードする非翻訳性 RNA の解析

安藤 清彦 先生 (農業・食品産業技術総合研究機構 動物衛生研究部門)

2023 年 2 月 16 日 (木) 16:30-17:30 iCOVER 1 階 101 教室

Bovine leukemia virus (BLV) は、牛にリンパ腫を引き起こす獣医学上重要な病原体の一つです。BLV に感染した個体がリンパ腫を発症するまでには数年間の潜伏期間があり、この間 感染細胞からはウイルス由来タンパク質がほとんど検出されないことから、潜伏状態にある BLV が長い時間をかけて細胞を腫瘍化させるメカニズムには不明な点が数多く残されています。そのような中、シーケンズ技術の発展により BLV ゲノムが“タンパク質にならない RNA (=非翻訳性 RNA)”をコードしていることが判明し、病態との関係性が注目されています。本セミナーでは、この非翻訳性 RNA に関する我々の研究をご紹介します。

(4) 第 57 回 獣医学特別セミナー:

哺乳動物における個体レベルの逆遺伝学的アプローチの高度化

藤井 渉 先生 (東京大学大学院農学生命科学研究科実験動物学教室)

2023 年 3 月 20 日 (月) 16:00-17:3 獣医学研究科棟 4 階 大講義室

動物の個体内や発生過程において、ある遺伝子の働きに着目して研究を行いたい場合には、遺伝子改変動物を利用した 逆遺伝学的な研究手法が有効です。かつては遺伝子改変動物の作製に労力を要していましたが、近年の様々な技術革新によって身近なものとなりつつあります。

本セミナーでは、分野黎明期から携わってきたゲノム編集技術をはじめとした、遺伝子改変動物の作製のための応用研究についてご紹介します。また、従来技術では解決が困難な 遺伝子機能探索の課題に対する、新たな技術開発の取り組みについてもご紹介したいと思います。

4. 総合臨床セミナー

本学部では、学部の獣医臨床における研究力・教育力の向上を図るため、“総合臨床セミナー”として年に 1-2 回、臨床系教員もしくは外部講師による、教員・学生・学外獣医師を対象としたセミナーを実施している。本年度は 3 名の外部講師を招いて実施された。

(1) 第 18 回総合臨床セミナー

日 時 : 2022 年 8 月 21 日 (日) 12:35 - 17:00

会 場 : 獣医学研究科棟 4 階 大講義室

内 容 :

<教育講演 1> 12:35 - 16:00

「処方率が半減する！抗菌薬と感染症診療の世界」

茂木 朋貴 先生 (東京大学附属動物医療センター内科系診療科)

<教育講演 2> 16:20 - 17:00

病理組織・細胞診で見える、見えない感染症

中嶋 朋美 先生、藤森 佳寿子 先生 (IDEXX laboratories)

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

1. 2022 年度 山口大学・鹿児島大学共同獣医学部合同 F D 研修会 報告書

(1) はじめに

令和4年度 山口大学・鹿児島大学共同獣医学部 合同FD研修会が、本年度は山口大学共同獣医学部の主催により、令和4年9月28日（水）に開催された。昨年度と同様に、ウェブ会議システムWebexを用いたオンライン形式で実施され、山口大学共同獣医学部教員および鹿児島大学共同獣医学部教員の合計73名が参加した。以下に、本年度の合同FD研修会の詳細を報告する。

(2) 研修会次第

日時： 2022年9月28日（水） 14:00～16:30

形式： Webexを用いたオンライン形式

14:00 開会の挨拶（山口大学 度会雅久学部長）

14:10-15:10 基調講演

「大学生・大学院生の抱えやすい課題と学生相談の現状」

講演者： 春日由美先生（山口大学教育学部准教授・学生相談所長）

15:20-16:20 教育ワークショップ（Webexブレイクアウトセッション）

①基礎 ②病態予防 ③伴侶動物臨床 ④産業動物臨床

16:25 閉会の挨拶（鹿児島大学 三角一浩学部長）

(3) 基調講演

基調講演として、山口大学教育学部准教授・学生相談所長の春日先生に、学生相談の概要、学生が抱えやすい課題、学生相談所の利用状況などについて解説していただいた。近年の大学生の状況や、共同獣医学部の学生の傾向など、統計データを交えた議論があり、学生の抱える問題を早い段階で察知することや、学生が相談しやすい環境を整備することの重要性を両大学の教員が認識した。その上で、トラブルを察知した時に大学の学生相談所に相談するという選択肢が有効であることを認識した。

(4) 教育ワークショップ

教育ワークショップ参加者（敬称略）

(1) 基礎

山口大学： 佐藤（晃）（世話役）、今井、日暮、島田、羽原、大浜、木村、加納、飯田

鹿児島大学： 松元、藤田、白石、内藤、宮本、宇野、浅野、ヘンリー

(2) 病態予防

山口大学： 清水（世話役）、豊福、高野、森本、櫻井、吉寄、岩田、渋谷、度会、渡邊、

佐藤（宏）、柳田、西垣、三宅、早坂、下田

鹿児島大学： 三好、松尾、田仲、小澤、一二三、井尻、小原、藤本

(3) 伴侶動物臨床

山口大学： 谷（世話役）、砂原、根本、中市、堀切園、奥田、馬場、上林、水野、伊賀瀬、

板本、伊藤

鹿児島大学： 三浦、藤木、矢吹、高橋（雅）、十川、高橋（香）、蔵元、古澤、野口、遠藤、大和、有村

(4) 産業動物臨床

山口大学： 高木（世話役）、谷口、角川

鹿児島大学： 三角、乙丸、百武、山下

1) 教育ワークショップ（基礎系）

議題：

- 実習での生体使用の状況
- 実習実施における変更状況（情報共有）
- 実習実施における問題点（情報共有）
- 実習の統合について（協議事項）

2) 教育ワークショップ（病態予防）

議題：

- Plus-DX の教育（実習）への応用について
- 外部施設における実習機会の減少について
- その他

3) 教育ワークショップ（伴侶動物臨床）

議題：

- 病院実習の現状
- 夜間救急診療の現状
- 一次診療実習に関して
- エキゾチックアニマル実習
- その他1：愛玩動物看護師への対応の情報共有
- その他2：EAEVEに関して（鹿児島大学 有村先生）

4) 教育ワークショップ（産業動物臨床）

議題：

- 講義、実習についての情報交換
- 産業動物参加型臨床実習の単位互換について
- 両大学の教員配置について
- 産業動物カリキュラムについて（開講期、主担当）

第3節 教育改善に関する活動

2022 年度の学生授業評価アンケートの結果は以下の通りである。講義、実習について、それぞれ 168、54 の回答が得られた。

1. 学生授業評価アンケート（講義）

【講義】出席率（168）	90%以上（14回以上）	80%以上～90%未満（12～13回）	60%以上～80%未満（9～11回）	40%以上～60%未満（6～8回）	40%未満（6回未満）
あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？	157 (93.5%)	10 (6.0%)	1 (0.6%)	0 (0%)	0 (0%)
【講義】授業時間外学習（168）	3～4時間程度又はそれ以上	2時間程度	1時間程度	30～50分程度	30分未満
あなたは、この授業において、授業時間外学習（授業の予習・復習、レポート作成、試験勉強などを含む）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。	39 (23.2%)	62 (36.9%)	31 (18.5%)	17 (10.1%)	19 (11.3%)
【講義】理解度（168）	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	67 (39.9%)	76 (45.2%)	14 (8.3%)	6 (3.6%)	5 (3%)
【講義】目標到達率（168）	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、シラバスに記載された到達目標を達成したと思いますか？	59 (35.1%)	78 (46.4%)	24 (14.3%)	4 (2.4%)	3 (1.8%)
【講義】満足度（168）	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、この授業について満足しましたか？	91 (54.2%)	51 (30.4%)	9 (5.4%)	10 (6%)	7 (4.2%)

2. 学生授業評価アンケート（実習）

【実験・実習】出席率（54）	90%以上（14回以上）	80%以上～90%未満（12～13回）	60%以上～80%未満（9～11回）	40%以上～60%未満（6～8回）	40%未満（6回未満）
あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？	53 (98.1%)	1 (1.9%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
【実験・実習】授業時間外学習（54）	3～4時間程度又はそれ以上	2時間程度	1時間程度	30～50分程度	30分未満
あなたは、この授業において、授業時間外学習（授業の予習・復習、レポート作成、試験勉強などを含む）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。	9 (16.7%)	12 (22.2%)	12 (22.2%)	9 (16.7%)	12 (22.2%)
【実験・実習】理解度（54）	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	29 (53.7%)	21 (38.9%)	3 (5.6%)	1 (1.9%)	0 (0%)
【実験・実習】目標到達率（54）	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、シラバスに記載された到達目標を達成したと思いますか？	28 (51.9%)	23 (42.6%)	3 (5.6%)	0 (0%)	0 (0%)
【実験・実習】満足度（54）	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
あなたは、この授業について満足しましたか？	39 (72.2%)	13 (24.1%)	1 (1.9%)	1 (1.9%)	0 (0%)

- 出席率： 講義、実習とも出席率は高かった。特に実習は、ほぼ全員の出席率が9割以上であった。
- 授業時間外学習： 講義1回あたりの時間外学習時間は1時間程度以上が多く、高い学習意欲が伺われた。一方、30分未満と答えた学生も11.3%認められた。授業時間外にも学習できるよう、図書室やクリニカル・スキルスラボなどの自主学習環境を整えたため、学習時間の増加が期待される。
- 理解度・目標到達率・満足度： いずれの項目も、実習に比べて講義では低くなる傾向が認められた。シラバスに記載された到達目標に基づき、学生の講義内容の理解をより深めることが課題である。

第4節 FD実施経費報告書

学部・研究科 FD 実施経費実績報告票

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額	FD活動の効果（簡潔に）
共同獣医学部・共同獣医学研究科	第54回獣医学特別セミナーでの講演及び指導・助言	旅費謝金1名	75,490	動物の優れた歩行・走行メカニズムに関する知見を得た。
	第55回獣医学特別セミナーでの講演及び指導・助言	旅費謝金1名	69,420	精路発生の比較形態学～三次元再構築法の活用～に関する知見を得た。
	第57回獣医学特別セミナーでの講演及び指導・助言	旅費謝金1名	94,170	哺乳動物における個体レベルの逆遺伝学的アプローチの高度化に関する知見を得た。
	計		239,080	

第5節 来年度の課題

共同獣医学部は2019年に欧州獣医学教育認証機構(EAEVE)の国際認証を取得した。認証取得に向けた様々な取り組みの結果として、鹿児島大学共同獣医学部との相互補完型の教育システムが構築され、国際標準の獣医学教育が実現された。2026年のEAEVE国際認証の更新を控えており、本学部の教育システムをより効果的なものにしていくことが望まれる。

鹿児島大学共同獣医学部とは毎年、合同FD研修会を開催し、教育改善に向けた議論や研修を行っているが、新型コロナウイルスの流行のため、2020年度から今年度までオンライン開催であった。共同獣医学部の運営において、両大学の連携をよりスムーズに行うためには、両大学の教員が対面でFD研修会を行うことの意義は大きいと考えられる。来年度以降、一部または全面的に、対面のFD研修会の再開が可能となることを期待される。

その他、クリニカル・スキルラボや図書室などの設備や、eラーニングコンテンツなどの教材の整備を進め、授業外学習のための学習環境を確保する。また、学生授業評価及び教員授業自己評価の結果を教員に周知し、教育改善に繋げていく。教員授業自己評価の入力率向上に向けて、FD担当教員によるリマインダーの送付や未入力者への督促等を行う。教員による授業参観の実施率を高め、相互の授業の質を向上できるように、教員に積極的に参加を促す。授業毎の成績分布状況を全教員が確認し、成績評価方法の改善等に向けて議論する。これらは、以前より継続している取り組みではあるが、今後も、EAEVE認証においても重要視されている教育の「質保証」を実施するため、教員・スタッフ・学生からの意見を活かしたフィードバック・サイクルを進め、教育システムの改善を続けて行く必要がある。

第12章 国際総合科学部のFD活動

第1節 授業公開

令和4年度では、新型コロナウイルス感染対策として授業の出席者の数を制限する必要があり、授業公開（ピア・レビュー）は行わなかった。

第2節 学部主催FD研修会

令和3年度に行われたFD研修会の一覧を示すとともに、狭い意味でのFDにあたる直接教育改善に関するFDは内容を具体的に記載するが、研究、管理・運営、地域貢献などに関する広い意味でのFDについてはごく簡潔に説明する。

- ・4月27日（水）13：00～14：30 「業績評価およびPBLを主とした授業負担」

参加者 19名

令和3年度の業績評価の結果を紹介しつつ、現在の業績評価の問題点および今後行う業績評価票の改善のポイントについて説明を行った。その後、意見交換をして、改善点について議論をした。

プロジェクト型課題解決研究（以下PBL）は他学部では卒業研究にあたるものであるが、学部の授業の集大成として、そして実社会での課題解決能力を身につけるものとして、国際総合科学部で最も重要な授業である。一方で、PBLについては多くの課題が存在している。この課題についてFDで議論をすることになる。

今回のFDでは、それまでに学部の教学委員会で検討した内容に基づき、PBLの担当について意見交換や方向性の確認を行った。その中で、PBLの主担当教員に原則全教員（助教は研究を主として行うこととなっているため、義務はないが希望すれば担当は可）が行うこととなった。また、PBLの負担を同じにすることで他の授業の負担を決めることが容易になるので、今後その具体的な方法を検討することが紹介された。

また、今後の課題として、PBLプロジェクト決定のプロセスの見直し（時期やプロジェクト数の調整など）、20万円のファンディングにかかわる問題、構想・中間・最終発表会のやり方、高大連携事業としての高校生向けプログラムの作成、PBLと研究とパートナーとの関係のあるべき姿、グローバルイヤーとPBLの関係、フリーライダーへの対処や個別指導が必要な学生への対応のあり方などがあることが確認された。

これらの課題に対処するため、令和4年度から教学委員会の下にPBLチームを立ち上げた。PBLチームでの議論でたたき台を作り、FDや教学委員会、拡大教授会での議論のもとで改革を行うことになった。

- ・6月8日（水）14：00～15：00 「業績評価について」

参加者 23名

4月27日のFDおよびその後学部教員からいただいた意見に基づいて、業績評価票の改定案を作成し、それを説明した。学部教員との意見交換で今後の修正点を確認し、次回の拡大教授会で決定することとなった。教育にかかわる部分としては、オムニバスの授業のコーディネーターや英語・理系科目・機材の補習を評価に加えること、留学生向けの英語プログラムの授業については通常の授業に加えて加点をすることなどである。

- ・9月7日（水）14：00～14：30 「留学生アカデミック・アドバイザーの業務」

国際総合科学部のカリキュラムの特徴の一つが多くの学生が交換留学をすることである。その一方で、国際総合科学部では多くの交換留学生を受け入れており、大部分の教員が交換留学生のアカデミックアドバイザー（指導教員）として学生の学修や生活の指導、相談を行ってきた。一方で、新型コロナウイルスの流行に伴って交換留学生が大きく減少していたため、ここ数年間はアカデミックアドバイザーの業務がなくなった教員が多くなり、その業務についての確認が必要となった。さらにこの期間に迎えた新しい教員はそもそも交換留学生への指導について経験がなく、その教員に対してのFDも必要となった。特に令和4年の後期からは留学生がかなり戻ってきたこともあり、早急に対処する必要があるが生じていた。

学部の国際交流委員会の委員で留学生とかかわりが多い日本語教員が講師となってFDが進められた。まずは、履修確認（最低でも週7コマの履修登録が必要）の必要性や留学生が問題を抱えたときのアカデミックアドバイザー自身の対応と、問題が深刻な場合どこに相談をしたらよいのかということの確認が行われた。さらに留学生からの相談例をもとに、教員がペアになり、そのような問題が生じたときにどのようにアドバイスをしていくか話し合った。その問題の例を下にあげる。

- ①朝おきたら、壁に謎の生物がいた。しかもその生物の進んだ跡には、気持ちの悪い粘液が・・・毒がある？
- ②シェアハウスに、わけのわからないことを話す知らない人が来る。しつこい。怖い。
- ③バスや電車で、自分のまわりだけが、いつまでも空席だ。（よりシリアスなものでは、スーパーで、友達と母語で話していたら、「〇〇人は早く国に帰れ」と言われた、という相談も）
- ④学内（例えばFAVOの前のテーブル）で静かに本を読んでいる時にも、英語で話しかけられる。この大学の学生の英語を上手くするために留学してきたわけではないのに。
- ⑤日本語のクラスでは自分は最上級のレベルだったのに、一般のクラスでは先生の言っていることが分からない。（逆に、「授業が簡単すぎてバカバカしい」という愚痴？も）
- ⑥自分は〇〇が好きで、日本にいる間に〇〇について学びたい。〇〇に直接関係する授業は無いようだが、学内に〇〇について相談できる先生がいたら会いたい。

①については、実際に行った対応は、スマホで写真を撮ってそれを送ってもらうことで何かを確認したところ、ナメクジだったということで、毒はないという説明をし安心をしてもらったというものだった。

②については宗教関係の勧誘だったようである。

③は日本における人種・民族差別という深刻な問題でなかなか具体的な対応が難しいが、まずは指導教員自身があなたの味方であるということをきちんと留学生に伝えることで、日本人全員がそのような考えではないことを理解してもらうという対応があるのではないかということだった。以下は割愛する。

このようなロールプレイングを体験することで教員自身がどのように対応すべきかを真剣に考える機会を得るとともに、意見を出し合うことでより適切な対応もしくは他の教員や学内・学外の機関への相談ができるようになった。

・9月28日（水）15:00～16:00 「グローバルイヤーの指導について」

参加者 19名

国際総合科学部では令和4年度から新しいカリキュラムが動き出しているが、それに伴い、2年後期から3年前期のグローバルイヤーの期間の指導のあり方を変更することとなった。旧カリキュラムでも2年後期から3年前期の期間は主に海外留学の期間として設定されていたが、新型コロナウイルスの影響で海外留学が難しくなった時期に、海外留学を行わなくてもグローバルな考え方や視点を修得で

きる方法はないかという議論になり、新たにグローバルイヤーと名付けて、必ずしも1年間の交換留学を課さない多様なやり方での学びを学生に勧めていこうということとなった。それに伴い、個々の学生の多様なニーズに対応したよりきめの細かい指導が必要となり、それまでの学生50名×2クラスで2名の教員が2年後期から3年前期の研究計画の作成を行っていた旧カリキュラムのやり方では無理があるという認識に至った。そのため、より多くの教員が参加する形でグローバルイヤーの研究計画を立てることとなった。

一方で、グローバルイヤーとPBLをどのように連携させていくかということも以前からの課題として存在していた。これまでのカリキュラムでは留学の期間が間に挟まることで1~2年前期までに学んだことが一旦リセットされ、3年後期から始まるPBLにもう一度1から学びなおさなければいけないということが問題視されており、4年間を通してPBLにつながる形で能力を積み上げていくということが十分に実現できていないのではないかという意見が教員の間で存在した。

令和5年度からは新カリキュラム対象者が2年生となり、上記の二つの課題に対する対策を含めた授業を2年Q2の「グローバルイヤー準備」の中で行うことになる。

FDではこれらの課題の確認とともに、具体的な授業のやり方、特に、学生がQ2の前までに自身の興味・関心などに基づいて新たに指導教員を選択する仕組みを導入することの是非について議論がなされた。さまざまな意見が出されたが、結論としては2年Q2までに指導教員を学生が選択するという仕組みを導入する方向が確認され、具体的な運営方法は教学委員会で議論されることとなった。

・11月2日(水) 14:30~16:00 「山口と世界についてのFD研修会」

共通教育の「山口と世界」の担当や授業の内容、国際総合科学部が責任部局となるかについては、これまで教育・学生支援機構と学部長や教学委員会の教務担当の教員が協議するとともに、学部内でも議論が続いてきた。学部教員の中では「山口と世界」の授業が自身の専門分野と関係が薄いことや授業で求められていることとクラスサイズ、クラスの数などのアンバランスなどの問題があげられてきた。さらに、令和4年度から工学部の学生についても1年後期に「山口と世界」を吉田キャンパスで受講することになり、これまで40名弱から60名のクラスサイズとなった。

令和4年度については議論が間に合わずに60名のクラスで行うこととなったが、令和5年度以降学部として授業担当をどのようにしていくかが問題であった。FDではそれまでの教育・学生支援機構との話し合いに基づいて、クラスのサイズや担当数、授業で最低限含まないといけない内容と教員の裁量の範囲などで共通認識を形成した。その後、教育・学生支援機構との打ち合わせを行い、令和5年度の山口と世界の授業のやり方を決定した。

・2月22日(水) 14:30~16:00 「PBLに関するFD研修会」

参加人数 18名

4月27日のFD以降、PBLチームでは今後のPBLのあり方について議論を重ねてきた。その議論の中である程度論点が整理されてきたため、学部の教員全体に話題を提供し、議論をしてもらうことで今後のPBL改革の方向性について共有した。

研修会ではPBLにかかわる課題について、あらかじめ資料を各教員が読んだうえで、4人程度の小グループに分かれて議論をし、グループごとに意見をまとめて最後に発表するというグループワークを行った。

主な論点は次のものである。20万円のファンディングという枠を維持するか、緩和もしくは撤廃するか、パートナーとの関係(共同・連携なのか協力や情報提供でいどなのか)や少なくともプロジェクト開始時にはパートナーのないプロジェクトも認めるか(プロジェクトの進捗に従って必要に応じてパートナーを見つけ、関係を作っていくなど)、プログラムコースとオリジナルコースのどちらを推奨するかや主担当教員の担当のあり方、グローバルイヤーとの接続、大学院教育への接続(人社系・学際系大学院の設置に向けて)を想定した学生指導のあり方などである。

教員の中にはファンディングやパートナーとの関係についてもっと多様な形を認めるべきであるという意見が多く出されたが、一方でファンディングやパートナーをいきなりなくすことに対する課題も出された。FD で出された意見を参考に、PBL チームでさらに検討を行い、PBL チーム長の下で改革の工程表が策定された。まず第一歩として令和 5 年度の 3 年生からは試行的にオリジナルコースのファンディングを PBL の成立要件とはしないことが提案された（令和 5 年度 4 月の拡大教授会でこの方針が確認された）。

第 3 節 教育改善に関する活動

・ DP および CP について

国際総合科学部では令和 4 年度の新入生から新しいカリキュラムのもとで教育を行ってきた。DP および CP については令和 3 年度までに策定した。その中で授業担当教員の意見を取り入れて授業ごとの YU CoB CuS のスコアを決めたが、令和 4 年度から新カリキュラムの授業を実施していく中でこのスコアと授業内容の整合性を各教員が再確認をし、授業改善や YU CoB CuS のスコアの修正につなげていく。

・ 授業アンケート

特に国際総合科学部での学修の集大成である PBL に関して 4 年生に対して最終発表会の後にアンケートを実施した。学生からは PBL について問題点や課題について様々な意見が出された。これらの意見については行学委員会や拡大教授会の中で教員で共有された。特にグループワークにおけるフリーライダーの存在を学生の一部が問題視していることが分かり、今後の指導のやり方の改善策を考えることになった。また、学生ではないが、PBL の連携先の企業、NPO 等の担当者との懇談会を最終発表会の後で開催した。その懇談会において PBL における課題の確認と連携の強化、個々のプロジェクトにおける情報共有や意見交換の場の拡大などを話し合った。

さい。

・ 「山口と世界」の成績評価について

共通教育の「山口と世界」の授業における成績分布に教員間でかなりの違いがあることが確認された。評価は原則的には絶対評価であるため、秀・優・良・可の割合を厳密に規定することはできないが、学生にとっては授業を担当する教員によって成績が大きく異なることは問題であるので、教員の名前を伏せた形で「山口と世界」のすべての授業の成績分布を拡大教授会で示し、各教員自身の授業の成績評価の参考にしてもらい、厳密な成績評価を依頼をした。

・ 令和 4 年度 6 月に行われた山口大学卒業・修了後のキャリア形成に関するアンケートの結果に基づいて、国際総合科学部の特徴や課題を洗い出すとともに、改善策を考えた。学部長、副学部長、評議員、教学委員会委員長が担当をした。具体的にはアンケートの設問ごとに山口大学全体の平均値と国際総合科学部の値を比較した。なお、教学マネジメント室から当初いただいた資料は PDF のグラフで、数値を実際に計算することが難しかったため、改めてエクセルでのデータをいただいて平均値などをこちらで算出して分析を行った。

国際総合科学部の特徴的な点について、全学に比べて評価が高い点と評価が低い点に分けて紹介し、今後の改善の方向性を述べる。

評価が高い点

・ 就業状況・正規雇用：非正規雇用がない点が文系学部と異なる。アンケート対象者が最大卒業 3 年しかたっていないことが影響していると思われる。

①外国語の講義：全学の中で国際総合科学部が最も評価が高い。他学部では他の授業に比べて外国語の講義の評価がかなり低くなっているが、国際総合科学部であまり評価が変わらないというのが実情である。語学の学修は国際総合科学部の特徴でもあるので、強みとなるべき点を実際に強みとなっていることが分かる。

②留学：外国語の授業と同様に評価が高く、強みとなるべき点を実際に強みとなっていることが分かる。

・職員の対応：共同獣医に次いで2番目で、新しく学部が開設されたときに集められた事務職員が優秀であった、もしくは新しい学部でわからないことが多い中で熱心に学生対応をしていただいたと思われる。

③外国語能力：外国語の授業や留学と同様に評価が高く、強みとなるべき点を実際に強みとなっていることが分かる。

評価が低い点

④卒業満足度：平均点が低い。「とても良かった」が少なく、「良かった」が多めで、「あまり良くなかった」が他の学部に比べて多く、一定数の卒業生が不満を持っていることが分かる。この理由を分析する必要がある。

⑤大学の専門と仕事の関係性：他の学部と比較すると関係性が低いという評価になっている。本来、国際総合科学部の専門性には実社会で応用可能な課題解決能力であるので、本来は最も仕事と関連すべきなのであるが、多分卒業生が専門性ということから想像したのが学問分野（例えば経済学部なら経済学、理学部なら数学・物理学・化学・生物学・地球科学など）であったためだろう。国際総合科学部は学問分野としての専門性は広く浅く学修することになっていて、特定の学問分野の深い理解を役立てるものとはなっておらず、それが低評価を招いたものと思われる。学生に対して国際総合科学部で学ぶ専門性とは何なのかということをもっとより分かりやすく伝え、その専門性を実際に身につけたことを実感してもらうことでこの部分の評価が改善されると思われる。

⑥専門科目の講義：大学の専門と仕事の関係性と同様に、学生の国際総合科学部の専門性の理解の問題があるためだと思われる。

⑦専門科目の実験・実習：上記と同じ。

⑧卒業論文・研究：他の学部に比べて「満足していない」が多い。アンケート対象者が1期生ということと、プロジェクト型課題解決研究（以下 PBL）という他の学部にはない、さらには全国的にも新たな取り組みを卒業研究の当たるものとしている中で、まだまだ不十分な点があったのだと思われる。PBLの改善は国際総合科学部に追って最重要の課題といってもよいだろう。

⑨専門知識：これについても国際総合科学部の専門性や専門科目の考え方の問題があったためであると思われる。

⑩データサイエンス力：ここが低いのは意外であり、国際総合科学部は聞ける融合学部として数学、特に統計学とデータサイエンスには文系学部に比べるとかなり力を入れている。高校時代に文系だった学生にとっては国際総合科学部の理系科目はかなり難しく感じられているので、それがこのような評価につながったのかもしれない。

「対人基礎力」・「對自己基礎力」・「対課題基礎力」・「リテラシー」：これらは必ずしも他学部に比べて評価が低いことはなかったが、国際総合科学部として力を入れている点であり、もっと高い評価を得るべき項目であった。

今後の方向性

今回の卒業生アンケート調査の分析でまず注意しないといけないのは、調査対象者が国際総合科学部の1期生つまり初めての卒業生のみであることである。教員側にも初めて経験することが多く（特に PBL）多くの課題があったことは明らかである。ただし、信頼できる調査結果のためにはもっと多

くの年にわたる卒業生のデータを集める必要がある。今回のアンケート結果の分析から以下のような改善策が考えられる。

①本学部の捉える「専門性」の学生への周知徹底

通常の学部では特定の専門的学問分野（〇〇学）によって専門性が定義されており、Discipline 基盤の専門性である。本学部は、DP に明記した学生が修得する能力により専門性を捉えている。この点は、極めて新規性が高いため、学生に十分周知し切れていないことが判明した。今後、機会をとらえて十分周知していく必要がある。

この点を改善することにより、「専門科目の講義」・「専門科目の実験・実習」・「卒業論文・卒業研究」の各項目の満足度、ならびに授業科目の「専門知識」ならびに「一般教養」の知識・到達度の向上がはかれる。

②カリキュラム全体の総仕上げであり、他学部の卒業研究に相当する「プロジェクト型課題解決研究（PBL）」の一層の充実

知識・能力到達度の「対人基礎力」・「対自己基礎力」・「対課題基礎力」・「リテラシー」にあげられた各小項目は、本来、本学部のカリキュラムの最大の眼目であり、他学部よりも有意に高い回答を得るべき項目である。しかし、実態としてそうになっていないことが今回のアンケート結果で示されている。これは、上記①の本学部のカリキュラムのねらいが周知し切れていないことに加え、PBL がどのような能力の修得を目的として行われているかを学生に徹底できていないことが一因であると思われる。この点も学生に周知徹底するとともに、質量ともに PBL を充実させていくことが何よりも肝要であり、現在、本学部は総力を挙げてその点に取り組んでいるところである。具体的には第 2 節に記載している。

第 4 節 F D 実施経費報告書

令和 4 年度に行った FD 活動において、予算を計上しておらず、また経費を要したものもなかった。

第 5 節 来年度の課題

ここでは研究や管理・運営、社会貢献を含めず、教育にかかわる課題についてのみ記載する。

令和 4 年度から新カリキュラムが始まり、令和 4 年入学の学生はその 1 年目の授業を受けたところである。この成績評価については現在分析の途中であるが、必修科目や選択必修の科目で複数の授業の単位を落としている学生がかなりみられる。これが新カリキュラムの影響なのか、別の要因なのかは現状ではわからないが、令和 5 年度入学性の履修状況や単位取得状況を今年度にかけてデータを収集し、分析して対処を考えていきたい。

令和 4 年度入学性が今年度は 2 年生になるが、Q1 の期間に指導教員を学生の希望に基づいて再配置し、グローバルイヤー期間の指導をすることになる。2 年後期から留学する学生と日本・山口に残る学生が存在するが、その両方に適切な指導ができるように、新たな体制のもと進めていきたい。もし問題が生じるようなら FD を開催するなどして問題を共有し、教学委員会を中心として対応策を考えていきたい。

国際総合科学部のカリキュラムの中心はプロジェクト型課題解決研究（PBL）であり、この改善については PBL チームや FD など多くの議論を重ねてきており、学部長のリーダーシップの下でその改革の工程表を策定した。今年度は現 3 年生からオリジナルコースのファンディングの縛りをなくすという形でまずはやり方を変えてみて、それがうまくいくようなら今後オリジナルコースにもそれを拡大適用していくことになる。

「山口と世界」については、国際総合科学部の多くの教員が現在担当していることから、多くの教員がその運営ややり方に対していろんな考えを持っている。今後は、学部長のリーダーシップの下で、

責任部局を引き受けるかどうか、授業の目標や授業に含めるべき内容、授業のクラスサイズと担当者の割り振り、授業の具体的なやり方などについて学部での意見を集約すると同時に、教育・学生支援機構と協議をしていく必要がある。

第13章 人文科学研究科のFD活動

第1節 授業公開

人文科学研究科としての授業公開は行っていない。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

研修名：「院生指導を考える」

日時：令和5年2月21日

場所：人文学部大講義室

報告者：FD部会

参加者：16名

内容：

大学院の修士論文発表会に合わせて研修を開催した。FD部会（司会者）の問題提起に続いて、院生の指導にたずさわった、ないしはたずさわっている教員を中心に大学院生指導や授業運営についてや日ごろの体験など種々意見交換がなされた。

とりわけ留学生の指導についての日本人学生とは異なる指導の難しさについての意見が目立った。入学時点で学術的な能力がやや不足している者が多く、修士論文を書くための基礎知識や基礎的態度の習得の重要性が指摘された。大学院生の「孤独」という問題提起もなされ、大学院生どうしの交流、指導教員以外の教員と大学院生との連携など横のつながりの重要性が認識された。大学院の指導は教員にとって多大な負担であるものの「真に学問を求める学生、学問を本当にやりたいという学生」を指導する喜びは大きい、というご意見は特に印象的であった。



第3節 教育改善に関する活動

（1）学生アンケート

所属学生数が少ないことから人文科学研究科独自の様式による学生授業アンケートを実施してきた。令和4年度もこれを踏襲し、5人の大学院生から回答を受け取った。

第14章 教育学研究科のFD活動

第1節 授業公開

専門職学位課程（教職大学院）教職実践高度化専攻では、原則、すべての授業を公開しており参観を認めている。教職大学院担当教員であれば、その授業担当者に断ってふだんから多数参観をしている。また教職大学院担当教員以外の参観希望者には、3週間ほど前に授業担当者に参観希望を伝え、許可を得たうえで参観してもらうようにしている。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

○教職実践高度化専攻学校経営コース

FD研修会はコースとして2回実施した。以下、各FDについてその概要を記すとともに、2回のFDを終えて、それをどのように利活用しようとしているかを述べる。

第1回FD研修会

テーマ：山口県における地域連携教育の現状と課題、小中学校や地域における地域連携教育の実際

日時・場所：令和4年5月26日、8:50～11:50、43番教室

参加者：学校経営コース 大学教員7名

学校経営コース 大学院生7名

教育実践開発コース 大学院生5名

研修内容

1 目的

学校・家庭・地域社会の連携の今日的意義と課題、山口県の地域連携教育の現状における成果と課題を踏まえ、望ましい組織連携や機能連携の方途、組織運営の在り方等について協議・考察する。

2 内容

○ 教職大学院開設科目（学外連携とCSの理論と実践）と連動する形で実施

(1) 講義「山口県における地域連携教育の現状と課題」

山口県教育庁地域連携教育推進課 主査 伊秩貴志先生

(2) 実践発表「小中学校や地域における地域連携教育の実際」

教育学研究科 教授（特命） 坂本哲彦先生

教育学研究科 教授（特命） 岡田淳子先生

山口県の地域連携教育のこれまでの取組や成果と課題、今後の推進に係る重点取組事項等について講義を受け、小中学校での実際の取組の具体例から地域連携教育の推進・充実に向けて重要となる視点について協議を行った。それぞれの院生の原籍校や実習校の取組を整理・分析・マネジメントして

いく上で、貴重な機会となった。

年間継続 FD 研修

テーマ：教職大学院における学校実習の在り方に関する組織的研究

期間：令和4年度年間を通して

参加者：学校経営コース 大学教員7名
学校経営コース 大学院生15名

研修内容

1 目的

学校経営専門職や教育行政専門職を担い得る人材を育成することを目的とする学校経営コースにおける学校実習の在り方について組織的な研究を行い、今後の学校実習のよりよい姿を探る。

2 内容

- (1) 学校経営コース研究会 令和4年5月26日
 - ・ 中央教育審議会答申や先行研究を活用しながら、「高度に専門的な実習」であるために求められる内容や方法等について協議
 - ・ 修了生等を対象とした質問紙調査及び聞き取り調査の実施について検討
- (2) 学校経営コース研究会 令和4年6月23日
 - ・ 質問紙調査及び聞き取り調査の内容や進め方等について協議
 - ・ 学校実習ルーブリックの作成について協議
- (3) 修了院生対象の質問紙調査及び在籍院生による修了院生への聞き取り調査、大学教員による所属長・教育委員会関係者への聞き取り調査を実施
- (4) 学校経営コース研究会 令和4年9月15日
 - ・ 質問紙調査や聞き取り調査を踏まえ、今後の学校実習の在り方について協議
- (5) 学校経営コース研究会 令和4年11月17日
 - ・ 学校実習計画及び学校実習ルーブリックの活用について協議
- (6) 研究のまとめを、山口大学教育実践センター研究紀要第55号に投稿

○教職実践高度化専攻教育実践開発コース

FD 研修会はコースとして2回実施した。以下、各FDについてその概要を記すとともに、2回のFDを終えて、それをどのように利活用しようとしているかを述べる。

第1回FD研修会

テーマ：『日本教職大学院協会発表』について

講師：足立直之（副コース長）

日時：令和4年10月6日（水）10:20～11:50

会場：43番教室

参加者：7名

研修内容

1 目的

本教職大学院のこれまでの取組をふり返し、成果と課題を明確にするとともに、指導教員同士が共通理解を図り、今後の学生指導に生かしていくために行う。

2 研修の概要と内容

- (1) 昨年度から取り組んできた全国教職大学院協会での発表を視野に入れ、本コースの取組、成果と課題をまとめる。
FD委員を中心に関係職員、大学院生の意見を聞きながらとりまとめを行った。
- (2) 発表者を決め、内容の吟味を行う。不参加者には資料を配付し意見収集を行った。

第2回FD研修会

テーマ：日本教職大学院協会発表会への参加

日時：令和4年12月6日（日）12:40～13:40

会場：福井大学と43番教室

参加者：発表者（大学教員6名、院生5名）、オンライン視聴5名

研修内容

1 目的

本教職大学院のこれまでの取組をふり返し、成果と課題を明確にするとともに、指導教員同士が共通理解を図り、今後の学生指導に生かしていくために行う。

2 研修の概要と内容

- (1) 発表に参加し、共通理解を図り、今後の取組に生かす。不参加者には資料を配付した。

【第1回・第2回研修会を通しての学び】

- ・本コースの特徴がよくまとまった。臨採との違いも説明できると今後の学部生獲得につながる可能性もある。
- ・ストレートマスターと学部生が交流するような授業が増えてもよいのではないか。
- ・修了院生とのつながりが現院生への刺激になるので、授業参観等が積極的に行えるとよい。
- ・他大学からは長期の学校実習に関心が集まった。またマッチングについても興味を持たれた。これを本学の特徴ととらえて進めていくことがよいと感じた。
- ・発表に向け、院生と協議を行い、様々な意見が聞けたことは成果である。

【事後の利活用】

- ・本年度のまとめが一つの指針となり、今後の取組の充実につながるものと考えている。全ての指導教員が共通理解し、院生への指導を充実させたいと考えている。そのためにも年度当初のコース会議やコース研究会で、周知するとともによりよい取り組みとなるよう今後も見直しと改善を図りたい。一方で入学者の確保については今後も様々な工夫により取り組む必要がある。オンデマンド説明会、県内他大学への周知等を行っているが、学内の学生が教職大学院で学びたいと思うよう授業公開や情報発信を積極的に行っていきたい。これを機にさらに本コースの取り組みの充実に努める。

○教職実践高度化専攻特別支援教育コース

FD研修会はコースとして1回実施した。以下、FDについてその概要を記すとともに、FDを終えて、それをどのように利活用しようとしているかを述べる。

テーマ：山口大学教職大学院特別支援教育コースへの教員派遣の在り方について

講師：福新智幸（山口県教育庁特別支援教育推進室 主査）

日時：令和5年1月21日（土）17:00～

場所：オンライン

参加者：特別支援教育コース教員

研修内容

1 目的

山口大学教職大学院特別支援教育コースへの現職教員の派遣について意見交換を行い、院生への指導に活かし、今後の指導の充実を図る。

2 内容

(1) 派遣の目的

特別支援教育に関する深い専門的知識や技能を習得させる。特別支援教育の視点を踏まえたリーダーシップを発揮できる教員の養成。

(2) 特別支援教育コース修了者に期待すること

特別支援教育の専門性向上のための授業等

学校経営コースとのマネジメントにかかる研修

原籍校やそれ以外での実践的研修（フィールドワーク）、インターンシップ等とおして

⇒ 校内Co、学年主任、校務分掌主任

教育行政、教育センター 学校管理職等

(3) 山口県教員の現状

特別支援学校において中核教員の少なさが課題

学校でも重要なポジション 35～45歳が薄い

【意見交換】

・県の育成指標との関連はどうか、若い教員にも組織マネジメントを求めるのかという点について、育成指標については年齢期に応じたものとするのか採用時からとするのかなど、学校経営という面ではズレも生じている現状があり検討課題

・特別支援教育の専門性の向上について、年齢期に応じてその人物に必要な内容を考慮していきたい。5～10年後には中堅からベテランに近いポジションになる予定

・特別支援教育コースはストマスと現職と一緒に授業を行っている。中堅としての役割も学べていると思う。

・実践にあたっては、校長の理解・学校の協力が必要

特別支援学校のセンター的機能の強化⇒地域の小中校へのサポートへ

【事後の利活用・来年度のFD研修に向けて】

特別支援教育コースは毎年1名ずつの現職教員であり、実績が十分であるとは言えない。学校経営コースとの関係など、今後も検討課題であると考えられる。

第3節 教育改善に関する活動

図1は過去7年間の専門職学位課程の学生授業評価・教員授業評価の実施率である。

平成30(2018)年度を境に低下していた授業評価の実施率は、学生・教員ともに上向いていたが、令和3(2021)年度の学生授業評価実施率は、新型コロナウイルス感染対策が影響したのか、若干低下し、さらに令和4(2022)年度は微減となった。

一方、教員の授業評価実施率は令和3(2021)年度から半減し、30%を下回る結果となった。



図1 授業評価実施率の経年変化

また、図2は令和2(2020)年度から令和4(2022)年度の学生の授業時間外の学習時間を示したものである。令和4(2022)年度は、令和3(2021)年度と比較して、3時間を超えて学習時間を確保した学生は減少したものの、2時間程度および1時間程度の学習時間を確保した学生が若干増加している。

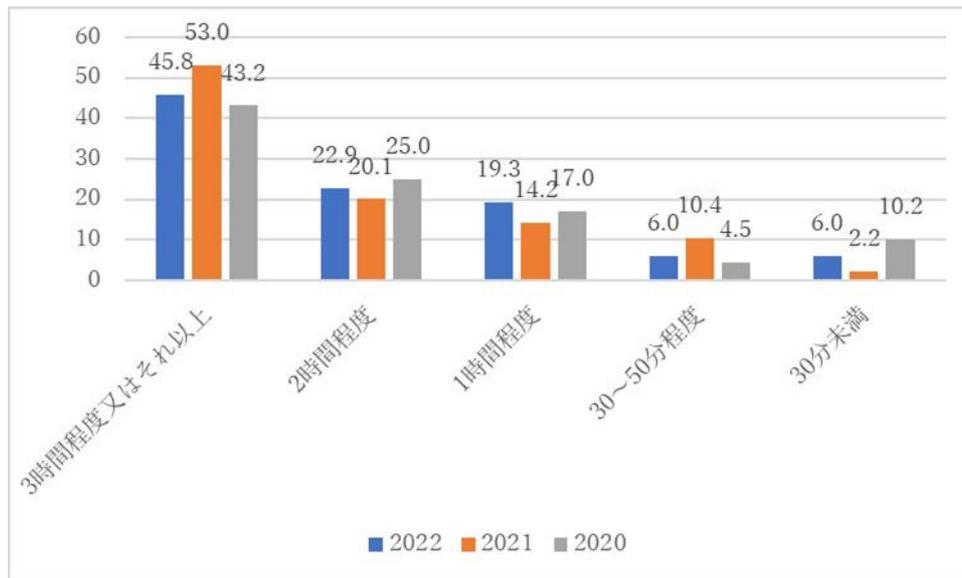


図2 授業外学習時間

第4節 FD実施経費報告書

FD活動の経費は使わなかった。

第5節 来年度の課題

教育学研究科は、これまでの教職実践高度化専攻（学校経営コース、教育実践開発コース）、学校教育専攻、教科教育専攻教科教育専修からなる研究組織から、教職実践高度化専攻、学校臨床心理学専攻臨床心理学専修の研究組織に改組した。この変革をふまえたFD研修会を開催しおり、その成果を今後も引き続き注視していく必要がある。

令和4(2022)年度は学生授業評価ならびに教員授業評価の実施率が低下したので、引き続き授業評価の意義を説明し、実施率を向上させる組織的な取り組みが必要とされる。

第 15 章 経済学研究科の F D 活動

第 1 節 授業公開

経済学研究科として授業公開は実施していない。

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

教員向け英語研修

経済学研究科の公共管理コースでは、全ての講義を英語で実施している。担当教員を中心に英語能力を高め、留学生向けの英語授業や留学生とのディスカッションをより円滑にするために同研修を、昨年度同様、以下の通り行った。

第 1 回研修会

日時：2022 年 9 月 20 日（火）10 時から 12 時

場所：ZOOM によるオンライン開催

講師：尊田 望

参加者：3 人

第 2 回研修会

日時：2022 年 9 月 21 日（水）10 時から 12 時

場所：ZOOM によるオンライン開催

講師：尊田 望

参加者：3 人

第 3 回研修会

日時：2023 年 3 月 14 日（火）13 時 30 分から 16 時

場所：ZOOM によるオンライン開催

講師：尊田 望

参加者：3 人

第 4 回研修会

日時：2023 年 3 月 15 日（月）10 時から 12 時

場所：ZOOM によるオンライン開催

講師：尊田 望

参加者：5人

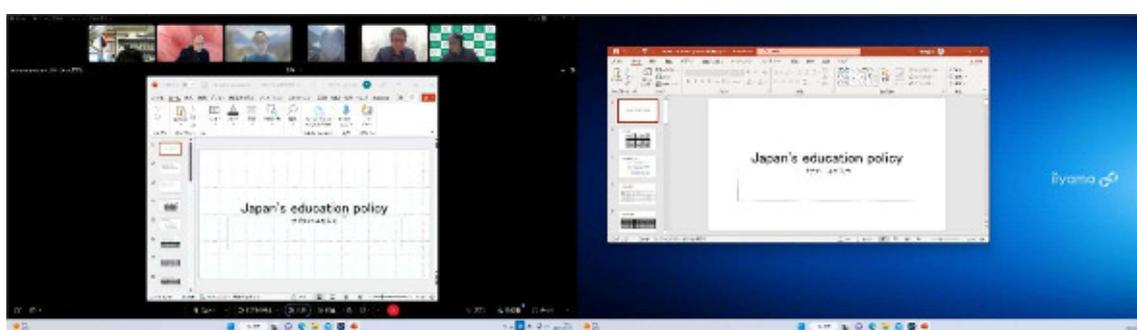
第5回研修会

日時：2023年3月22日（月）10時から12時

場所：ZOOMによるオンライン開催

講師：尊田 望

参加者：5人



第3節 教育改善に関する活動

特別な活動は行っていない。

第4節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金 等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
経済学研究科	教員向け英語研修	講師謝金	57	教員の英語能力を向上させ学生への講義、修士論文の作成に役立てることができた。
	教員向け英語研修	書籍	6	英語による修士論文作成の指導に役立てることが出来た。
		計	63	

第5節 来年度の課題

学部同様、本年度、経済学研究科のカリキュラム上の課題・問題についてのアンケート・FDを行って欲しいとの要望が、研究科教員から挙がっている。学部同様、経済学研究科においてもカリキュラム上の課題・問題が個別に報告されているため、そうした「声」を総合するFDが求められている。

第 16 章 医学系研究科の F D 活動

平成 21 年度より、医学部と医学系研究科において「学部と研究科の F D 企画をできるだけ相乗りの形で実施する」という方針が定められた。この方針に基づき、医学系研究科所属教員は、それぞれが関連深い（実際に兼担で教育を担当している）各学部（あるいはその上部の研究科）の F D 活動に参加する形で F D 活動を行った。具体的には医学部の学部教育を兼担している教員は医学部（第 8 章）の F D 活動に、理学部・工学部・農学部の学部教育を兼担している教員は理学部（第 7 章）・工学部（第 9 章）・農学部（第 10 章）ないしは創成科学研究科（第 17 章）の F D 活動に参加した。具体的活動内容に関しては、それぞれの該当の章を参照されたい。

第 17 章 創成科学研究科の F D 活動

理学系

第 1 節 授業公開

1.1 基盤科学系専攻物理学コースのピア・レビュー

実施科目「専門英語特別演習」(前期)

1) 概要

①日時：令和 4 年 6 月 6 日 (月) 16:10～17:40 理学部第 21 講義室

②対象学生：博士前期課程・物理学コース

③授業概要：クォーター全 8 回の最後の 2 回の授業として、英語による研究発表を行った。発表 10 分＋質問 4 分である。第 6 回までの授業では、英語プレゼンテーションの講義と練習、及び研究発表の準備を行った。研究発表の準備と練習は、各指導教員の指導のもと各研究室でも行った。学生には、発表だけでなく質疑応答にも積極的に参加するように指導した。成績評価は、発表者 10 点 (発表 7 点＋質疑応答 3 点)、質問者 10 点として、参加教員それぞれが採点し、集計した。

④授業の一般目標：英語で自分の研究内容を紹介し、他の人と英語で議論ができる。

⑤担当教員：元木業人 (代表)、レビュアー：野崎、堀川、新沼、齊藤、坂井

2) レビュー結果

レビュアーから以下のコメントを頂いた。

- どの受講者もよく準備をしてプレゼンテーションを行っていた。
- 採点項目に学生からの質問ポイントが加えられていることで昨年以上に学生からの質問が出ていて、よい雰囲気だった。
- 質疑応答が詰まってしまった場合に教員が追加の説明やフォローを入れており、とてもスムーズな進行がされていた。

発表や質問の回答や英語での表現について、だれか (指導教員?) がフォロー (事後指導) した方がよい。

1.2 地球圏生命物質科学系専攻化学コースのピア・レビュー

実施科目「化学ゼミナール I・II」

1) 概要

①日時・場所：令和 4 年 12 月 14 日 (水) 12:50～17:15、経済学部第 1 第講義室

②対象学生：大学院創成科学研究科・地球圏生命物質科学系専攻 (博士前期)
化学コース M1・M2 年生

③授業概要：化学ゼミナール I・II の履修者が、各自の研究課題に関するプレゼンテーション (発表 6 分、質疑応答 8 分：合計 14 分)、同時に他の学生の研究発表を聞き相互に評価し合う。
授業の到達目標：

- ・各自の研究テーマを分かりやすく発表する。

・同級生の研究発表を聞き、批判的・建設的に討論を行う。

④授業担当教員 川俣 純 (化学分野長)

レビュアー 山崎 鈴子・本多 謙介・村藤 俊宏・村上 良子・藤井 寛之・安達 健太・綱島 亮・上條 真・鈴木 康孝・谷 誠治・鈴木 敦子

⑤レビューの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点についての意見を議論する

2) レビュー結果

①授業内容

- ・一人当たり約6分間のプレゼンテーションの後、約8分間の質疑応答を行った。
- ・発表件数は、15件であった。

②意見

レビュアーから以下のような意見が寄せられた。

1. 授業内容に対する意見

- ・博士前期課程の1年生が現時点での研究内容を発表し、会場からの質問に答える講義イベントであり、学生にとって口頭発表を行える重要な科目である。学生にとって良い機会になっていると感じる。質疑の時間を十分にとっており、良いと思う。
- ・とてもよい。
- ・修士論文作成に向け進めている研究の経過報告がされた。(パワーポイントを利用した口頭発表) 発表内容、質疑応答の質には、それぞれ差がある。質が良かった学生さんは、この調子で研究を進めて欲しいし、不十分だった学生さんは内容の改善が必要である。
- ・学生と個別にコミュニケーションを取れる良い授業だと思う。
- ・長めの質疑応答時間を設定しているのは、とても良いと感じる。対面での実施がとても良いと思われる。(教育的効果)
- ・良かった。1年後の修論発表会に活かせる良い機会になっている。特に発表時間よりも質疑応答時間が長い点が良い。異なる専門分野の人々からの質問は、日頃気付いていない点を明らかにしてくれることも多い。

2. 改善を要する点

- ・学生からの質問を増やす方法を考えると良いのでは？
- ・学部2年生や1年生がもう少し参加しても良いと考えます。参加に当たって他の講義に中間発表への参加条件を加えるなどの工夫が良いかもしれません。
- ・学生からの質問がもっとあると良い。
- ・学生が質問することも多く、発表のみならず在校生によっても良い経験になったと思う。教育効果の高い講義だと感じる。
- ・質問が教員、または特定の学生に限定されていることが気になる。大勢の観衆の前で質問する能力は、社会性を考える上でも、とても重要である。質問する機会を全員に与えるような仕組みが必要ではないか？
- ・ポストコロナ禍で行う発表会のスタイルとしては、現方式が最適だと感じる。個人的には単なる“発表会”ではなく、単位取得のための“試験”の一環としてとらえる方が良いと思う。
- ・学生からの質問が、もっと多いと良い。
- ・学生からの発言をどう増やすかが今後の課題だろう。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

今年度は、創成科学研究科（理学系）として単独ではFD研修会を実施していない。理学系教員は、理学部で開催された以下のFD研修会に参加した。詳細は理学部第2節のFD活動を参照されたい。

第3節 教育改善に関する活動

令和4年度に創成科学研究科（理学系）で開設している専門科目のうち、特別研究やセミナーのような科目や、履修者が極端に少ない科目などは対象外とし、修学支援システムを通じて、授業終了後などに学生授業評価アンケートを取っている。評価結果は各教員が修学支援システムを通じて閲覧し、次年度の授業改善などに利用している。

第4節 FD実施経費報告書

今年度は、創成科学研究科（理学系）・理学部ともに、FD実施経費を使用していない。

第5節 来年度の課題

創成科学研究科（理学系）の教員は理学部の教員でもあるため、理学部の報告書の内容を参照されたい。

農学系

第1節 授業公開

創成科学研究科（農学系学域）の各教員が、全ての教員と大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換により、各教育研究分野の活性化と分野間の総合理解の促進を図った。

- (1) 「売れる麦を核とする中山間水田輪作体系における収益力強化と省力化の実証」の成果と検証
日時：令和4年7月27日（水）15:30～ 高橋 肇 教授
- (2) 獣害はなぜなくなるのか
日時：令和4年9月28日（水）15:30～ 細井 栄嗣 准教授
- (3) 土壌教育を考える：土壌教育の国際ガイドラインに向けて
日時：令和4年11月30日（水）15:30～ 藤間 充 准教授
- (4) 節水型コムギ育種に向けた基礎的研究～節水と高収量の両立を目指して～
日時：令和5年1月11日（水）15:30～ 妻鹿 良亮 助教
- (5) サラブレッドの運動生理学的研究の意義
日時：令和4年4月28日（木）16:30～ 宮田 浩文 教授
- (6) フェニルプロペン香气成分の生成に関わる転移酵素の機能解析
日時：令和4年7月15日（金）16:00～ 肥塚 崇男 准教授
- (7) 褐虫藻に秘められたサンゴ-褐虫藻共生の仕組み
日時：令和4年7月22日（水）16:00～ 湯山 育子 助教
- (8) 有用物質生産菌の細胞膜内外の代謝に関する生物工学研究
日時：令和4年10月27日（木）16:00～ 片岡 尚也 助教
- (9) 「第二の抗酸化物質」活性カルボニル消去物質の探索
日時：令和4年11月30日（水）16:00～ 真野 純一 助教
- (10) 酢酸菌の細胞内代謝に関する2つの話
日時：令和5年1月27日（金）16:00～ 薬師 寿治 教授

第2節 学部・研究科主催FD研修会

創成科学研究科（農学系学域）では、農学部FD研修会と一緒に、各種FD研修会を以下の内容で開催した。

1. 令和4年度 アラカルトFD研修会「障害等のある学生への合理的配慮：最近の支援ニーズの傾向から」(農学部FD研修会)

日程：令和4年11月16日（水）13:30～14:00

場所：農学部大会議室

講師：岡田 菜穂子 准教授，松尾 理佳 カウンセラー（学生特別支援室）

参加者：24名

2. 学部内FD研修会（農学部）

日時：令和4年8月3日（水）15:00～16:30（安全に関する座学30分・実習50分）

場所：農学部附属農場実習棟実習室

参加者：農学部の教職員 約30名

3. 刈り払い機講習会（農学部附属農場）

日時：令和4年8月3日（水）15:00～16:30（安全に関する座学30分・実習50分）

場所：農学部附属農場実習棟実習室

参加者：農学部の教職員および学生で農場の刈り払い機利用希望者 10名

第3節 教育改善に関する活動

令和4年度は、前年度に引き続き、創成科学研究科の学域をまたいだユニークな教育プログラムであるCPOT（Center for Graduate Skill Training）プログラムを積極的に推し進め、選択する大学院生を増やす努力を行っている。また、山口大学が採択された令和3年度文部科学省大学改革推進等補助金（デジタル活用高度専門人材育成事業）において、産業界等から求められる「デジタルファーム（DF）を理解・実践できる人材」「農業・食品分野でデータを活用したイノベーションを創出できる人材」を育成するために、「地域に密着した分水工型DF教育システムの構築」を掲げて、1. 実習・演習用機器・環境の整備、2. DF教育カリキュラムの構築（新規科目の開発、既存科目の高度化）、3. 教材作成、4. DF教育プラットフォームの構築、の取り組みを行った。本事業の「DFカリキュラムの構築」では、既存科目の高度化とともに新規3科目「データサイエンス技術演習」「デジタルファーム基礎」「デジタルファーム演習」の開発を行い、シラバスの一部を3月にパイロット授業として在学生を対象に実施した。

第4節 FD実施経費報告書

本年度は大学院教育に関するFD実施経費の申請はなかった。

第5節 来年度の課題

研究科教育は学部教育と大きく異なり、研究科間でもカリキュラムや教育方針が同一ではない。今後のFD活動においては研究科独自の取り組みが必要であると考えられる。また、大学院の専門教育におけるSTEAM教育について、年度末にはSTEAM教育に係る科目および履修方法案が策定されるのを受けて、創成科学研究科農学系学域においても積極的に検討をしていく。

第 18 章 東アジア研究科の F D 活動

第 1 節 授業公開

博士後期課程のみという性質上、東アジア研究科は基本的に講義形式での授業を重視していない。当研究科設置目的のとおり、「問題解決のための高度な専門知識を発揮しうる人材の養成、指導の高度専門職業人の養成」を目指す本研究科では、ディプロマ・ポリシーに示すとおり「独自に問題を立て、研究を遂行して成果を生み出すことができる自立的な研究能力」を養成することを主眼としている。このため、学識を授けるという意味合いの強い講義形式での授業よりも、各院生に対する個別研究指導が主な形式となっている。

とはいえ、授業公開に類する内容として、以下の取り組みを行っている。

(1) 集団指導の場としての「基盤演習」「プロジェクト演習」

上記の特性を持つ当研究科は、カリキュラム・ポリシーに従って、1 年次に「基盤演習」を、2 年次に「プロジェクト演習」を課している。これらの演習授業はコース別に実施され、学生の研究報告に対して複数の教員がコメント・意見を述べる集団指導体制を取っている。

この集団指導体制は、お互いの指導を確認し合うピア・レビューの性格も持ち合わせており、間接的な授業公開となっている。事実、この形式の演習においてなされる各教員からのコメントが院生にとって有意義なことは言うまでもないが、加えてこのようなコメントは指導教員にとっても貴重な示唆を与えるものであり、自らの研究指導へのヒントや改善の契機となっている。こうした意味で、これらの集団演習科目は、間接的なピア・レビューの効果を持ち、当研究科の研究指導能力にとって重要な位置を占めている。

(2) 個別研究指導の場としての「特別研究」

当研究科の主たる教育活動は、当該院生に対する個別の研究指導である。「特別研究」がこれに相当するが、基本的にこの内容は各院生の研究テーマや研究の到達状況次第であり、これを公開し、ピア・レビューの対象とすることは難しい。

しかしながら、これまで研究科の研究指導を担ってきた中心となるべき経験豊富な教員の退職が続く今後を見据えるならば、当研究科が引き続き博士課程の教育を維持・拡充させ、さらに研究教育能力を高めていくために、この「特別研究」に内在する研究指導のノウハウを研究科全体としてどのように蓄積し、次世代の教員（特に、現在の若手教員）に引き継いでいくかは、当研究科の抱える重要な課題である。

この課題に応えるために、当研究科においては、以下に述べるとおり、コース別の研究指導 FD を研究科主催の FD 研修会として、継続的に実施している。

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

前節 (2) の観点から、令和 4 年度にも、下記の通りに研究指導 FD を実施した。これは、学位審査への最終的な関門である「準備論文報告会」開催後に、当該「報告会」で報告した学生の指導教員を中心として、研究指導に関する問題点や工夫、配慮内容について報告し合い、情報交換することによって、個々の教員の研究指導能力を強化することはもちろん、全体としてノウハウを継承していく

ことを目的とするものである。

(1) 研究指導 FD の実施状況

令和4年度には、コース別に以下のように実施した。

実施日	コース名	「準備論文報告会」 報告学生数	「研究指導 FD」 参加教員数
R4.5.11	アジア教育開発コース	4	8
R4.11.9	アジア比較文化コース	3	9
R4.11.18	アジア経済・経営・法律コース	3	8

(2) 研究指導 FD での意見交換の内容から

研究指導 FD における意見交換において様々な問題が提起されたが、その内容を総合すれば、以下のような論点に分けられる。

1) 研究テーマ、分析概念、方法論等に関するもの

- 研究テーマや対象の絞り方について、それが学術的意義に基づくものなのか、社会的意義に基づくものなのかの精査
- 先行研究の扱い方の問題
- 「発見」した事実に学術的意義があるかどうかの検証、および論文のフレームワークの設定に関する問題
- 分析ツールを利用することに関心が向きすぎている傾向があり、理論的検討の重要性を再確認する必要がある

2) 学生とのコミュニケーション上の問題に関するもの

- 日本語理解の問題（意見交換から吸収できる内容に限界）
- オンライン指導が続いたことが、指導の上で大きな障害になったという問題
- 大学院生ごと事情が大きく異なり、その中でどのように指導を進めるべきかという問題

3) 指導時間や指導方法に関するもの

このポイントについては、特に博士課程の学生指導の経験に関わるものであり、経験豊富な教員の意見は、若手教員にとって大変に参考となる。当研究科としては、こうした指導上のポイントを蓄積し、継承していくべきであろう。

- 専門分野のミスマッチとこれの補い方について
- 学生の専門分野転換（修士課程とは異なるテーマへ）に伴う基礎的ディシプリンの教授、調査方法、統計に関する基礎知識、既存研究のレビュー方法などの指導が必要
- 修士課程での指導との連動と協力体制の構築

4) その他

- コロナ禍でフィールドワークの実施が困難になっている（海外が研究対象の場合に、現地での一次資料調査が行えないことの研究上の不利
- 社会人学生への海外フィールドワークの実施への支援（家庭と仕事の存在）

第3節 教育改善に関する活動

※例えば、学科・コース内でのディプロマポリシー・カリキュラムポリシー・カリキュラムマップ・カリキュラムフローチャート作成の取り組み状況、学生授業評価・教員自己評価、優秀教員表彰、教育改善論文集の刊行、テキスト・教材開発、学生への各種アンケートなどについて記載してください。

第1節にも述べたように、東アジア研究科は個別研究指導に加えて、基盤演習・プロジェクト演習（これらを合わせて、以下では共同演習と呼ぶ）を用いた集団指導体制を備えている点にその特徴がある。この集団指導体制のもとでの指導を改善し、さらに充実させることを目的にして、2021年12月より「共同演習に関するワーキンググループ（以下、WG）」を社会動態講座内に設置し、今後の指導運営体制に関する協議・検討を行った。このWGでの議論を踏まえて、将来的には他の講座でも集団指導体制のあり方に関する議論を進めていく予定である。

これまでのWGを中心とした社会動態講座内での議論において、現在の共同演習が抱える問題点がいくつか明らかになった。主なものを挙げておけば、以下のとおりである。

1. 英語話者と日本語話者の混在する環境で、意思疎通・コミュニケーションが不十分になる
 2. 一回あたりの報告者数が多く、時間的制約から十分な議論が行えない場合がある
 3. 報告院生から事前の資料提供がなされない場合がある
 4. 報告内容について、前回との相違や進捗・改善状況が明確でない場合がある
 5. 自らの専門外の報告に対して、教員がどのようにコメントし、学生の報告に貢献するかまた、派生的に関連する共同演習以外での問題として、以下の点も提示された。
 6. 退職者からの引き継ぎの問題（これは指導ノウハウの継承という問題とも関わる）
 7. 自らの専門分野のみに特化しすぎ、専門分野に関連する周辺分野を含めた知識の取得
- これらの問題を一度に解決することは困難であるが、これまでの議論の結果、以下の対策が社会動態講座内において合意されている。
- 共同演習オリエンテーション（ガイダンス）の実施：オリエンテーションを通じて、共同演習でのルールを周知し、再度確認する。
 - 基盤演習・プロジェクト演習の目標については学生便覧に記されているところではあるが、これをさらに詳細にする（上記オリエンテーションにおいて周知）。具体的には、基盤演習では博士論文作成に向けてのテーマ、編別構成設定、博士論文作成に必要な基本的な学術作法の修得を、プロジェクト演習では、これを土台として博士論文作成に向けた完成度の高い編別構成（内容）の作成を目的とする。
 - 退職者を1年間に限り非常勤として採用できないか、また対外的PRや入試選抜の改善が可能か、検討課題とする

これらについて、令和4年度の社会動態講座共同演習において具体的に改善策を実施し、その結果を見つつ、引き続き必要な検討・改善を行なっていく予定である。

第4節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
東アジア研究科	各講座でのFD研修会(研究指導FD)	資料代として	48	教員間で個別研究指導上の問題点や工夫について共有・意見交換できた
計			48	

第5節 来年度の課題

※来年度の課題を具体的に記載してください。

上記、3節で述べた通り、共同演習に関する指導改善は令和4年度より継続して実施しており、この結果を見つつ、更なる改善が可能かどうかを検討していく。なお、これまで例年おこなってきた各講座での研究指導FD(第2節参照)とこの共同演習に関する検討とが相互に関連しながら、東アジア研究科でのFD活動を推進していくことができれば、研究科のFD活動のあり方自体にも新たな方向が見出せよう。

第 19 章 大学院技術経営研究科の F D 活動

第 1 節 授業公開

技術経営研究科は社会人大学院生を対象とした大学院であるので、平日は勤務しながら大学院課程を修学できるように授業を週末の二日間に開講している。日本人社会人を対象とした日本語による大学院講義は、広島教室および福岡教室の 2 教室体制で授業を行っている。また、留学生を対象にした英語による講義は、常盤キャンパス（宇部教室）において平日のカリキュラムにより授業を実施している。これらの講義は、全教員が担当している。本研究科の授業の基本方針として、宇部教室（常盤地区）、福岡教室ならびに広島教室のすべての教室において、全カリキュラムを対面式授業で行うことを基本としている。

令和 4 年度に実施したピュアレビューの評価項目を付記する。

◆ 優れていると感じた点について

【説明】

- ・ 声をはっきりとして聞き取りやすいですか。
- ・ 丁寧に講義内容を説明していますか。
- ・ 学生の職務内容を念頭に置いた説明をしていますか。
- ・ 学生が各自の業種に応じて演習課題を展開できるように意図されていますか。
- ・ 専門分野が違う受講者にも理解し易いように説明が工夫されていますか。
- ・ パワーポイントの使い方は適切ですか（文字の大きさ、スライドの送り方など）。
- ・ 動画を使った説明など、学生の興味を引き出す工夫がされていますか。
- ・ 学生が授業内容を理解するペースを考慮して、説明のテンポを調整していますか。

【資料】

- ・ パワーポイント スライドのフォントサイズは適切ですか。
- ・ パワーポイント スライド 1 枚当たりの時間を十分に設定しますか。
- ・ 講義説明を書き込むのに必要な時間が十分確保されていますか。
- ・ 講義で専用ソフトウェアを利用する際には、操作マニュアルが用意されていますか。
- ・ ニュース・報道・Web 情報を引用している場合、引用元を明記していますか。

【教授法（アクティブラーニング）】

- ・ スクール形式による説明とグループ学習や討議などの実践形式による学習をバランス良く取り入れていますか。
- ・ 事前課題を用意していますか。
- ・ 授業の進め方や教材について、創意工夫を取り入れていますか。
- ・ 学生のモチベーションを引き出すような工夫をしていますか。
- ・ 講義の進行に応じて、グループワークやグループ討議が適切に行われていますか。
- ・ 学生から発言を引き出すように授業をリードしていますか。
- ・ 特定の学生の発言回数が増えないように、注意していますか。

◆ 授業を参観し、参考になる感じた点について

【事例】

- ・ Webex などのオンライン講義の中で、ブレイクアウトセッションを利用したグループ討議やディベートの進め方が参考になった。
- ・ 調査に時間を要する内容について、課題レポートとして割り当てる。
- ・ 教材の作成方法
- ・ パワーポイント教材に図表や写真などを配置し、テキストだけ教材と比較してビジュアル的にアピールする。
- ・ 参考資料を活用する。
- ・ ビデオ教材やドキュメンタリー映像などの動画を用いる。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

令和4年度FDセミナー

山口大学大学院技術経営研究科

日時	令和5年3月7日 午後1時30分～2時15分
聴講方法	オンライン (Webex)
講師	Dr. Fitri Aprilianty School of Business and Management Institut Teknologi Bandung
講演タイトル	The Hedonic and Utilitarian Motivations Pattern Changes in Online Fashion Shopping: A Neuroimaging Study
	オンライン ファッションにおける快楽主義的動機と功利主義的動機の パターン変化 ショッピング: 神経画像研究
対象	大学院技術経営研究科 教員および関係者
参加者数	15名

概要

A customer's desire to purchase fashion items can be divided into two underlying dimensions: utilitarian and hedonic motivations. This study analyzes how changes in the brain's activation are associated with hedonic and utilitarian motivations in online fashion shopping. The study's participants were initially surveyed to determine their dominant (primary) buying motivation, either utilitarian or hedonic. Based on the participant responses, each dominant buying motivation was selected for further eye tracking and electroencephalography (EEG) neuroimaging analysis using the LORETA (Low-Resolution Tomography) technique in several brain areas during the online fashion shopping process. The neuroimaging data supports the theory that different activation patterns are associated with changes in the participants' buying motives. The LORETA data analysis shows that each buying motivation may have its own activation system and that there are changes in the dominant (primary) motivation during the buying process, and these dominant motives turn to be fluid during the online buying process. These findings are discussed in light of the psychology of consumer behaviour and in relation to the recent emergence of consumer neuroscience and neuromarketing. This study contributes new findings about functional and hedonic motives by examining consumers' motive reactions while shopping online.



The Hedonic and Utilitarian Motivations Pattern Changes in Online Fashion Shopping: A Neuroimaging Study

School of Business and Management
Beihua University, Jilin, China

PhD Applicant



Hedonic Vs Utilitarian Motives

- Several studies suggesting that online buying processes are mainly driven by utilitarianism.
- Research into customers' motives often generalizes these throughout the purchasing period and there is limited research into the direct link between the motives and the purchasing decisions.
- In consumers' purchasing process, multiple motivation changes can exist and often interact in complex relationships to influence consumers' decisions. Most of the previous studies have ignored the complex connections between motivation changes.
- Recent research sheds doubt on the results of previous studies because these typically used self-reported assessments, which may have led to response bias. The past decade has seen a growth of interest in using neuroscience tools to explore the brain activity that drives consumers' decision-making.

- An empirical understanding of how these motivations change and affect consumer buying decisions is still limited.
- This study examines how the purchasing process differs due to self-reported buying behavior.
- It evaluates whether the subject has a greater activation in the Brodmann areas (BA) that are related to cognitive (calculative) activity or affective (emotional) activity to see whether the subject is more prone to utilitarian or hedonic motives.

- This study integrated the Brodmann area (BA) dominant activation results from EEG data to include more detailed decision-making motivations during the online shopping process.
- The study identified several representative results that show the consistency of dominant affective-emotion and cognitive-calculative responses and the inconsistent responses across three purchase processes.

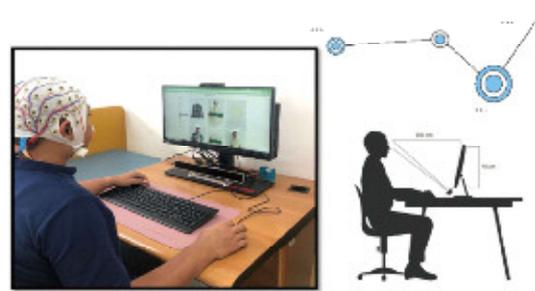
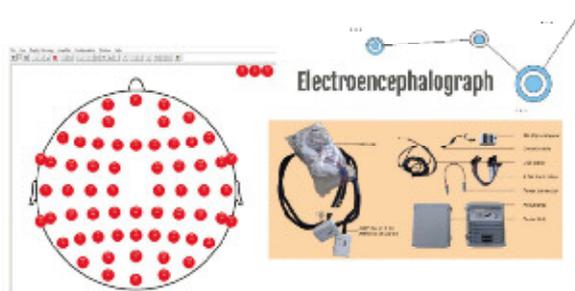
- 51 customers with experience of buying through online websites (BERRYBENKA)
- Have normal vision
- Not in the process of psychoactive medication, with neither a history of neurological nor psychiatric disturbances
- Right-handed as assessed by the Edinburgh Handedness Inventory



Material and Methods

Experiment Stimulus



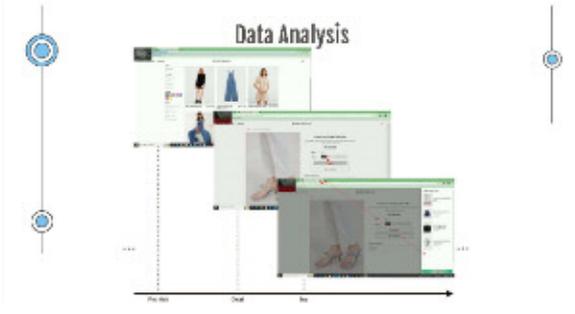


Eye Tracking

- The procedure of eye-tracking experiment was conducted directly at the same time with EEG experiment.
- A table mounted eye tracking records eye movements at a frequency of 60 Hz.
- Collect the fixation point (what participants are looking at and what elements draw their attention the most over time).
- The fixation points then analyzed by the software to collect visual attention:
 - Sazeipoint Control (calibration software)
 - Sazeipoint Analysis (estimate the point of participant gaze)

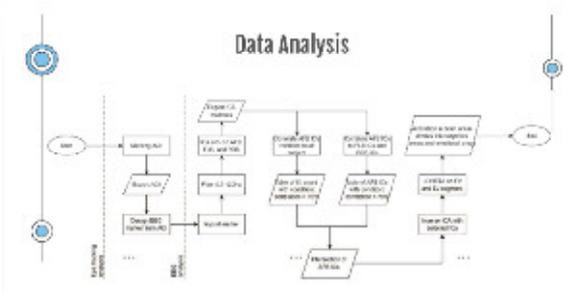
Hedonic and Utilitarian Motives Survey

Items	Loadings
Utilitarian Motive (α=0.853, AVE: 0.592)	
I'm shopping fashion product online to buy better items in price and quality.	0.743
I'm shopping fashion product online for time efficiency.	0.815
I'm shopping fashion product online in order to get additional value or make my purchase.	0.747
Hedonic Motive (α=0.856, AVE: 0.669)	
I'm shopping fashion product online to forget my problems.	0.800
I'm shopping fashion product online just for fun.	0.811
I like relaxed while shopping fashion product online.	0.764



Summary of Regions of Interest (ROI)

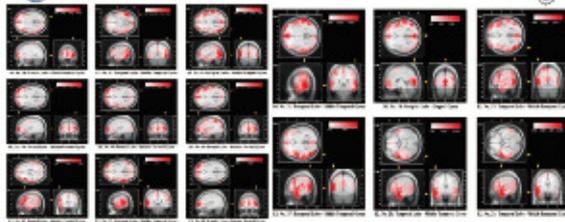
Brodmann Area	Probability (p < 0.05)
Affective-Emotion/Cognitive-Calculative Interaction	
66	0.0004*
10 L	0.0019*
10 R	0.0014*
Cognitive-Calculative	
66	0.0019*
68	0.0024*
38	0.0009*
38 L	0.0014*
40 L	0.0024*
Affective-Emotion	
11 L	0.0019*
11 R	0.0014*
18 R	0.0114*
24 L	0.0104*
28 R	0.0019*



Results of BA activation and Shopper Motive Survey

BA Activation	Shopper Motive Survey	Mean Utilitarian	Mean Hedonic	F Value	T-Test Result
Affective-Emotion	Affective-Emotion	Mean: 3.9	3.9	0.02	Significant
Cognitive-Calculative	Affective-Emotion	Mean: 3.9	3.9	0.02	No Significant
Affective-Emotion	Cognitive-Calculative	Mean: 4.2	4.1	0.196	No Significant
Cognitive-Calculative	Cognitive-Calculative	Mean: 4.1	3.9	0.02	Significant
Cognitive-Calculative	Utilitarian	Mean: 4.2	3.8	0.180	No Significant
Cognitive-Calculative	Hedonic	Mean: 4.3	3.7	0.02	Significant

Utilitarian Motive LORETA



Hedonic and Utilitarian Motives Survey

16.1%

Significant hedonic motives (extreme hedonic motive) in the survey showed dominance and consistency in affective-emotional BA activation results

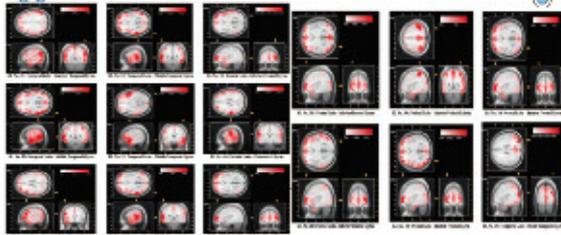
22.6%

Significant utilitarian motives (extreme utilitarian motive) in the survey showed dominance and consistency in cognitive-calculative BA activation results

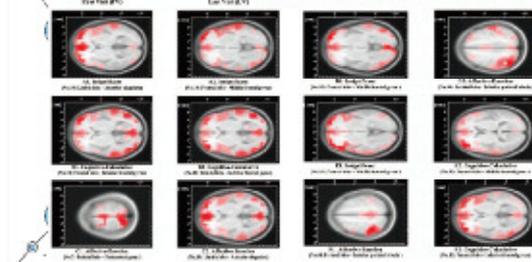
61.3%

No significant dominant motive based on their survey results showed a fluid BA activation response

Hedonic Motive LORETA



Regions of Interest (ROI) Scan Summary



The Shifting of Customers' Motives

- The hedonic and utilitarian motives of participants have both cognitive-calculative and affective-emotional dominant responses, and these can change during the (FV) and (LV) shopping process.
- This study reveals that the decision-making process is fluid depending on what consumers think and believe during their purchasing experience.
- It is related to subjectivity to shape the resulting consumption experience in ways that defy rational analysis

Thank You!

ありがとう
ございます。

Contribution and Implication

- New research into utilitarian and hedonic motives by examining the reaction during the consumer buying while shopping online. Despite several studies suggesting that online buying processes are mainly driven by utilitarian, this study found that it also provides emotional-experiences and elicits emotional feelings in the consumer.
- Traditional surveys, such as self-reported surveys cannot capture this process and are generalizable across subjects and situations also cannot provide evidence for the distinct neurophysiological changes in motives. This is an initial step toward using physiological responses to evaluate a consumer's separation with online buying processes.
- The findings provide mechanistic insights into the neural underpinnings of how motives measure consumer underlying neural network.
- The accumulating results help to address those processes and refine our understanding of what consumers value during the online buying process.
- Marketers and product managers should adjust neuroscience methods in combination with AI-supported services to properly assess the experience of their consumers and to develop product and marketing communication accordingly.

第3節 教育改善に関する活動

令和4年度のカリキュラム・授業の改善に向けて、教員懇談会を実施し、情報共有並びに議論をおこなった。

教員懇談会

令和4年9月13日(火) 午後4時

令和4年12月13日(火) 午後4時

令和5年2月7日(火) 午後3時

第4節 FD実施経費報告書

令和4年度 各学部・研究科FD実施経費報告書				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
大学院 技術経営 研究科	2023年3月7日(火) オンラインファッションにおける快楽 主義的動機と功利主義的動機のパター ン変化	講師謝金 1名	ご辞退	ファッションアイテムを購入したいという顧客の欲求は、実用的な動機と快楽的な動機という2つの根本的な側面に分けらる。本FDセミナーでは、脳の活性化の変化がオンラインファッションショッピングにおける功利的な動機とどのように関連しているかについて研修した。
計			0	

第5節 来年度の課題

背景

情報通信技術(ICT)の高度化に伴い、社会経済が大きく変化している。この状況の下、新たな知識・スキル・思考力を獲得するため、社会人が大学で学び直す必要性が増している。また、グローバル化の進展により、海外大学と共同で国際的に活躍する人材を育成する必要性が生じている。これらは本学が「明日の山口大学ビジョン2015」において掲げている「高度な専門性と社会性を持つ指導的人材の育成」や「グローバル力を強化する大学院教育の推進」といった目標と同じ方向性を持つものである。これらを受けて本研究科では、「国内では西日本地域において、国外では東アジア・東南アジアにおいて<技術経営>者を目指す人々の『最優先志望』となることを目指す」という中長期ビジョンを掲げ、福岡・広島教室においては日本人社会人を、宇部教室においては留学生を対象とする技術経営教育を実施してきた。

課題

1. **ハイフレックス型教育の実施と教材の整備:** コロナ禍をきっかけにオンライン教育が進化し、その結果ハイフレックス型教育の重要性が増した。収束後もこのオンライン形式による講義設計は

継続的に必要となる。対面型教育とオンライン教育を同時に進行させるためには、教材のデジタル化やオンライン教育用の教育ツールを拡充することが重要となる。

2. **教育システムの拡充と維持：**これまでハイフレックス型教育を実現するための教育システムの拡充を計ってきた。今後は、ただシステムを設置するだけではなく、その運用と維持が重要な課題となる。システムのメンテナンス、トラブルシューティング、最新のテクノロジーへのアップデートなど、継続的なシステムの運用と管理について検討を要する。
3. **教員のデジタルスキル向上：**教員自身が新しい教育スタイルやテクノロジーを適応することは大きな課題である。教員のデジタルリテラシーを向上させるための継続的なトレーニングとサポートを検討する。
4. **学生のテクノロジーへのアクセスとリテラシー向上：**全ての社会人大学院生が適切なテクノロジーへのアクセスを持ち、オンラインでの学習に適応する能力を持つわけではない。当研究科大学院生のデジタルリテラシー向上と適切なテクノロジーへのアクセスを検討する。
5. **対面とオンラインのバランス：**ハイフレックス型教育では対面とオンラインの両方の形式をバランス良く取り入れることが重要となる。全てをオンラインに移行するのではなく、対面での講義や実践的な演習の配置を考慮し、最適な教育形式を選択する必要がある。技術経営研究科では、特定課題研究発表のオンデマンド化を推進してきた。今後、特定課題研究発表における教員と学生の間での対話やフィードバックをどのようにライブ化するかが重要となり、適切な実施方法を検討する。
6. **国際協力の強化：**また、各教室と海外提携大学との連携により、国際的な視野を持った教育が可能となる。しかし、タイムゾーンの違いや言語の壁、文化的な違い等を克服する必要がある。
7. **プライバシーとセキュリティ：**オンライン教育では学生のプライバシーとデータセキュリティが重要となる。学生の個人情報保護や、オンラインでの講義内容やディスカッションの情報が外部に漏れないようにするためのセキュリティ対策の拡充を図る。
8. **教育効果の評価と改善：**ハイフレックス型教育を実施する上で、その教育効果を評価し、改善するための仕組みを整備することも重要な課題となる。フィードバックシステムや評価手法について、データに基づいた改善を進める。

第 20 章 共同獣医学研究科の F D 活動

共同獣医学研究科の FD 活動は、共同獣医学部の FD 活動に参加する形で活動を行った。具体的な活動内容に関しては、第 11 章「共同獣医学部の FD 活動」を参照されたい。

令和4年度 山口大学 教学委員会 名簿

部局名	職名	氏名	任期
	副学長（教育学生担当）	葛 崎偉	
教育・学生支援機構	教学マネジメント室長	野崎 浩二	
〃	教育支援センター長	野崎 浩二	
〃	学生支援センター長	高橋 肇	
〃	保健管理センター所長	奥屋 茂	
人文学部	教授	谷部 真吾	4.4.1～6.3.31
〃	教授	De Boissieu Michel	3.4.1～5.3.31
教育学部	教授	曾根 涼子	4.4.1～6.3.31
〃	教授	佐伯 英人	3.4.1～5.3.31
経済学部	教授	武本 Timothy	4.4.1～6.3.31
〃	教授	宮井 浩志	4.4.1～5.3.31
理学部	教授	村藤 俊宏	4.4.1～6.3.31
〃	教授	末竹 規哲	4.4.1～5.3.31
医学部	教授	田中 申明	4.4.1～6.3.31
〃	教授	高瀬 泉	4.4.1～5.3.31
工学部	教授	樋口 隆哉	4.4.1～6.3.31
〃	教授	山口 真悟	3.4.1～5.3.31
農学部	教授	鈴木 賢士	4.4.1～6.3.31
〃	教授	井内 良仁	3.4.1～5.3.31
共同獣医学部	准教授	渋谷 周作	4.4.1～6.3.31
〃	准教授	馬場 健司	3.4.1～5.3.31
国際総合科学部	教授	有元 光彦	4.4.1～6.3.31
〃	教授	阿部 新	3.4.1～5.3.31
事務局	学生支援部長	出雲 武	
〃	学生支援部教育支援課長	福田 孝	
〃	学生支援部学生支援課長	宮本 達司	

令和4年度 山口大学 学部・研究科FDコーディネータ 名簿

部局等	職名	氏名
人文学部 人文科学研究科	准教授	横田 蔵人
教育学部 教育学研究科	教授	藤本 幸伸
経済学部 経済学研究科	教授	古賀 大介
理学部 創成科学研究科(理学)	教授	村藤 俊宏
医学部(医学科) 医学系研究科	教授	白澤 文吾
医学部(保健学科) 医学系研究科	教授	下川 元継
工学部 創成科学研究科(工学)	教授	山口 真悟
	教授	大原 渡
農学部 創成科学研究科(農学)	教授	鈴木 賢士
共同獣医学部 共同獣医学研究科	准教授	渋谷 周作
国際総合科学部	教授	北西 功一
東アジア研究科	准教授	兒玉 州平
技術経営研究科	教授	大島 直樹

令和4年度 山口大学FD報告書「山口大学のFD活動」

令和5年11月発行

編集・発行 山口大学教育・学生支援機構

山口大学教学委員会

山口市吉田 1677-1

TEL (083) 933-5060 (学生支援部教育支援課)